不適材魔界転生

玉苗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不適材魔界転生

【Ｎコード】
Ｎ２８２７Ｖ

【作者名】
玉苗

【あらすじ】
某月某日、死にました。
某月某日、転生しました。淫魔として……

恋も経験もないわたしに、どんなムチャぶりしてくれるんですか！
うっふんな食事なんてできません！
あっはんな格好も却下です！
その上魔王サマから「暇つぶし世界征服」発言が投下！
地味に慎ましく健全かつ適当に、そんな人生目指してる平和主義者

なわたしにどうしろと？

前世記憶を引き継いでしまった、故・渡辺凛、今生名・ネヴァンジェリンの、和平奮闘記。

始まりは不完全エピローグ

某月某日、早死しました。

歩いていたら脳天目がけてタライが降ってきて――たぶん高層マンション三十階くらいから――、あっけなくご臨終したわたしです。
日頃の行いが悪かったんでしょうか。
前世の業かなんかでしょうか。
なんとも微妙――ある意味で絶妙――な死に方をしてしまったわたしですが、死んでしまったものは仕方ありません。
死に方含め、黒歴史リセットだと思って成仏します。

それでは皆さん、さようなら。
いつかの輪廻でまたお会いしましょう。

肉体のない身体――この状態を幽体っていうんでしょうね――を胎児のように丸めて、わたしは瞼を閉ざしました。
深い深い闇の中に、ゆっくりと沈んでいきます。
そうしてじょじょに小さくなって、やがて種子へと還り、新たな誕生を待つのでしょう。
次の生では、人間より飼いネコがいいナ……

――なんて、考えていた時でした。
突如わさっと髪が伸びました。
短く切り揃えていた爪が、シャキーンと尖ります。

あれ？　もしかして、もう転生？　はやっ！
余韻も何もあったもんじゃありません。

ってか、ネコ？　次はネコなの？　だったら許すよ！　大歓迎だよ！

期待に胸を膨らませていると、ボインと物理的に胸が膨らみました。

……おい。

待て。

なんで！？　なんで転生のはずが成長してんの！？

しかも胸増量とか、わたしが貧乳みたいじゃん失礼な！　人並みにはあったわよ！！

わたしは大混乱に陥りました。

わたしは死んだはずなのに、どうして成長しちゃってるんでしょうか。

もしかして実は死んでない？　昏睡状態で寝たきりってヤツ？

たとえそうだとしても、とうに成長期の終わったわたしが成長するはずがありません。髪や爪は伸びても、胸の増量はあり得ない。減量はあってもな！！

そうしてわたしは頭ぐるぐる状態のまま、ぽいっと現世に放り出され――もとい、新たな世界に誕生したのでした。

ぽかんと開いた口に、清々しい朝の空気――ではなく、重苦しい瘴気が流れ込み、見開いた目に、柔らかな光と優しげな両親――ではなく、生暖かい雨と不気味な人々が映りこみます。

素足に感じる感触は、ベッドやシーツなんていいものじゃありません。地面だよ。しかも岩場だよ、岩の色黒いよ硬いよ痛いよ。

「淫魔か。種としてはつまらんが、双子はまあ珍しいな」

小さな呟きが、冷たく耳朶を打ちました。
綺麗だけど、ひやっとする声でした。
気怠げで音程も低いのに、よく通る声でした。

聴いた瞬間、丸まっていた背筋が自然と伸び、未だ夢の残滓――っていうかあの世――を引きずっていた頭が、急速に動き出しました。
この声の主には絶対逆らうなって、わたしの中のどこかが言ってます。
そいつ捕食者、わたし被食者、みたいな。
怒らせたら死んじゃうよ。生まれたばっかでもう死ぬよ。

急いで視界を巡らせて、声の主を探しました。
黒い空に黒い森、黒い岩場に黒い人々が集っています。人の形をしてないのもいます。

そんな中、場違いな玉座がドーンとそこにありました。
荒野の中の一軒家、どころか、コスプレ会場のど真ん中にシルバーシート、くらいの唐突さで置いてありました。
やたら禍々しくて大きなそれに、魔王が頬杖ついて座っています。
ええ、魔王です。間違いない。
わたしは思わず正座になって、頭を下げてしまいました。

「は、初めまして、魔王サマ。こんにち――こんばんは？　いい夜ですね」

いかにもつまらなそーだった魔王サマが、片眉を上げました。
まじまじと、こちらを凝視してきます。

えぇと何でございましょうか、魔王サマ。改めて見ると、傾国の美女の如き麗しの顔(かんばせ)でゴザイマスネ。

ワタクシはあなた様の美々しい隻眼に留め置かれるほどのシロモノではないですよ？　目が穢れちゃいますよ？

わたし以外に何か見るものがあったかと、再び視線を巡らせて、気づきました。

すぐ隣に青年が居ました。

魔王サマほどじゃないですが、その青年もまた素晴らしく美形です。わたしってば何故気づかなかったのでしょうか。

年の頃は二十代半ばほど。褐色の肌と琥珀の瞳が、トロリとした甘さを感じさせる美青年です。喩えるなら魅惑の毒リンゴです。

何ここ、美形王国!?

――と、いつもなら、冗談で流せたはずでした。

が、ここで問題が一つ――いや、ホントはいっぱいあるけど、とりあえず、一つ。

なんで裸なんですか、毒リンゴさーーーーん!!

いくら身体に自信があったって――すみません。眼福でした――ダメです！　アウトです！　猥褻物陳列罪です！

年齢イコール彼氏いない歴だったわたしには刺激的すぎますっ!!

「なっ……！」

尻餅ついて後退った瞬間、視界ににゅっと白い膝頭が現れました。

何コレ。

女の人の足?

……持ち主どこ？

とてもとってもイヤな予感がしました。

冷や汗をかきながら、その足を付け根の方へと辿っていって――

わたしは悲鳴をあげました。

「にゃあああああああっっっ！？」

故、渡辺凛（わたなべりん）。

享年二十一歳。

淫魔（サキュバス）として、裸で魔界転生しました。

第一話：不穏な招待状、空腹時に届く

重たい雨が降っていた。

雨だれの雫が落ちるかのように、一粒一粒が大きな波紋を散らせて、地面に吸い込まれていく。ゆるりゆるりと大地を濡らす、生暖かい水滴に打たれながら、しかし木々は潤うこともなく、乾いた古木のように佇み続ける。

葉のない枝を蔓のように絡め合い、朽ちる寸前の姿のまま何千年と立ち続ける樹木の森。足元に生える草もまた枯葉のようで、森はどこまでも灰色に支配されている。

そんな森を照らすのはただ一つ、夜空にかかった青褪めた満月（つき）――

ここは魔界。

蒼い月に抱かれた、夜だけの世界。

そんな魔界の灰色の森を、彼女は一人歩いていく。

黒いレースの傘を回し、編み上げブーツで大地を蹴って、やがて小さな湖に辿り着いた。

そっと湖面を覗き込めば、思いがけず澄んだ水の上に、彼女の姿が映り込む。

透き通るような白い肌に、艶やかな黒の巻き毛。

琥珀色の瞳に桃色の唇。

背にはコウモリの羽根があり、先の尖った耳の上には、羊のような角が生えている。

これらはまさに、女淫魔（サキュバス）の特徴だ。

淫魔といえば、その色香で異性を誑かし、性交を通じて精気を吸い取る魔物とされる。必然容姿はその生態に相応しく、退廃的にして煽情的――な、ハズだ。

（そのハズですよねぇ！？）

特徴は揃っている。
揃っているのに何か違う。いろいろ違う。
水面に映る彼女の姿を、彼女自身が一言で言い表したら、こうなる。

（何なのよ、このロリ巨乳美少女は！）

ぱっちり開いた大きな瞳に、ふくふく柔らかなバラ色のほっぺ。
手足は子供のように小さく、手首や足首は折れそうに細い。それでいて胸だけは、大人の膨らみを有している。
――ちなみにこれは、生まれて初めて自分の姿を確認したときの感想だ。今は少々異なっている。
何にせよ、お色気重視の淫魔の中で、彼女の容姿は明らかに系統が違っていたのだ。
さらに言えば、その性格も。

挑発的な格好は似合いません。
見せる勇気もありません。
大人の振る舞いとか駆け引きとか、教科書何ページ目に載ってましたか。思わせぶりな態度って、会社の研修になかったんですが。
そもそも異性と付き合った経験さえないんだよ！

（これで女淫魔（サキュバス）人生歩めとか、いったい何の罰ゲーム！？）

「こんなムリゲーやってられっかーーーっっっ！！」

魔界転生してようよう三年。
渡辺凛（わたなべりん）――今生名ネヴァンジェリンは、色気より幼気でも頑張って生きてます。

（だいたい、渡辺凛が残ってるのが悪いのよね）

傘をくるくる回しながら、ネヴァンジェリンは森を歩いていく。

転生先を決めた運命だか神だかに、届くものなら是非クレームを飛び蹴りつきで叩きつけたい。

前世（わたなべりん）の自分は記憶のみならず、価値観や意識、容姿にまで引き継がれている。

おかげで魔界に馴染めないし、魔族を理解できないし、アジア童顔遺伝子健在で全体的に幼い。淫魔の美肌効果と背のかさ増しがない分、少女めいた容貌どころか、少女そのものの容貌だ。

おまけに他の女淫魔に会ってみれば、胸ばいーんで顔キラキラで、増量された胸も淫魔にしては小さいとか、顔もこの程度じゃ美少女に入らないとか、実に悲しい事実を思い知った。

さらに現在とある男の趣味により、黒いベビードール風ワンピースを着せられている。

結果、容姿感想はこう変更された。

『ロリ巨乳美少女』改め、ただの『ゴスロリ少女』。

転生補正入って並以下とか酷すぎる。

「なんで残っちゃったのかな～」

ブツクサぼやきながら、ネヴァンジェリンはひっそりと咲く花を摘み、僅かな実りを木々から採取する。

捨てなきゃならない渡辺凛（にもつ）を持ち越したものだから、食事だけで一苦労だ。

そう――ネヴァンジェリンは生まれてこのかた、まともな食事をしたことがない。

淫魔の食事といえば例のアレだが、渡辺凛の価値観が強固に拒絶した。

ムリムリできない、ありえない！

そんな恥ずかしいことするくらいなら潔く飢え死ぬよ！　それが大和魂だよ！

そもそもその気になったところで、この姿では幼女趣味（ロリコン）しか釣れないわけで。生理的に無理だ死ぬ。

しかし実際に飢え死ぬわけにはいかない。

そうなれば必然、別な方法で必要エネルギーを摂るしかなく、人間のときと同じように、動植物を食べるしかなくなった。

しかし魔界は人間が生きるに適さない。

そりゃもう鼻で笑っちゃうほど適さない。

ほぼ毎日降る雨に、バリバリ有害な魔界の瘴気。動植物は毒入り酸入りで、『補整ってなぁに？　岩が邪魔なら壊せばいいじゃない』な路面事情。じゃれて襲ってくる怪物（モンスター）。

そんな中を、できるだけ毒性の少ないものを探して歩き回るわけだ。泣ける。

「これは食べられるかなぁ？」

足元の葉っぱを根ごと引き抜いて、ネヴァンジェリンは首を傾げた。

葉はニンジンに似ているが、根っこはトウモロコシだ。色は紫。まったく美味しそうではない。

「紫色は食べ物とは認めない主義だったんだけど、背に腹は代えられないしなぁ。

お腹空いてるし、味はともかく食べようと思えば何でも食べれる

し……毒で胃が痛くなるけど」

紫芋も茄子も却下していたのに、こんな不気味植物に妥協を強いられるとは。

思わず項垂れていると、頭上で大きな羽根音がした。

「ネヴァンジェリン」

大きな月を背景に、一人の青年が優雅に舞い降りてくる。

「ネヴァンディーンお兄様」

滑らかな褐色の肌に、黒曜石の巻き毛。胸を騒がす琥珀の双眸。羽根や角は一回り大きいが、肌色を除く特徴は同じ。顔立ちにも共通点がある。

ネヴァンジェリンの双子の兄、ネヴァンディーンだ。

それでいて自分と比べものにならない魅力的な容貌に、ネヴァンジェリンはますます落ち込んで項垂れた。

豹を思わせるしなやかな肢体も、少し垂れた目尻を飾る泣きボクロも、大人っぽくて色っぽい。男淫魔（インキュバス）の面目躍如――どころかお釣りがくる。

その上淫魔は下級魔族なのに、上級クラスの吸血鬼並みに強いのだ。これぞまさに淫魔の鑑。淫魔の模範。

こんな兄（チート）、とても『ちゃん』づけで呼べません。様付け『お兄様』が適当だ。双子なのにこの差は何だ。

不条理を嘆くネヴァンジェリンの顎（おとがい）を、男にしては繊細な指先がそっと持ち上げる。

「ネヴァン？」

甘い美貌で案ずるように覗き込まれ、ネヴァンジェリンは引き攣った笑みを返した。

「また気分が悪いの？　僕の精気を分けようか？」

「大丈夫よ、ネヴァン兄様。ありがとう」

だから顎仰向けて覗き込むとかやめてください。腰砕ける。

「本当に平気かい？　無理しないで僕に言うんだよ。食べ物でも人間でも、すぐに獲ってきてあげるからね。邪魔者は消してあげるからね？」

どういうわけかネヴァンディーンは、妹にベタ甘だった。

心配顔で優しく怖いことを言う兄に、本当にダイジョーブデスと念押しして尋ねる。

「こんなに早く帰ってくるなんて、どうしたのお兄様？　食事はもう終わったの？」

妹と違って淫魔らしい食事をしに行った兄は、本来なら二時間は帰ってこないはずだ。それなのに今夜は、一時間足らずで戻ってきている。

（いくらなんでも相手に失礼っていうか、感謝が足りないわよね）

淫魔の多くは人間の世界で暮らすものだが、弱すぎて狩られかねないネヴァンジェリンと、強いので人間を相手にしなくていいネヴァンディーンは魔界にいる。

必然、彼の食事は魔族が対象になるわけで。

（食事って言ってもさ、同族なんだから、身体だけじゃなくてもうちょっとこう、心の触れ合いってゆーか誠意が必要だと思うのよね。済んだらサヨナラとか、ひどいわよ）

前世含め経験のないネヴァンジェリンには、いろいろ理想があったのだ。今でも、とっさに不満を覚える程度には理念が残っている。

唇を尖らせて、『言っても通じないけど言っちゃう誠意のお話』をしようとすると、兄が苦笑してそれを止めた。

「食事は中止。魔王様から招待状が来た」

「招待状？」

思わずオウム返して、泣きそうになった。

当代魔王は歴代最強にして最長君臨期間を誇っている。口癖は「暇」「退屈」「つまらん」の三つで、魔界で何か起これば移動玉座で飛んでっちゃうほどフットワークが軽い――それで双子の誕生にも立ち会った。

そんな魔王様が『招待』するということは、すなわち、

「魔王城へ行くよ、ネヴァンジェリン。勇者が現れた」

お城で魔界イベント発生です。

第二話：不満な招待、不満表現

あれは魔界に誕生――もとい、発生して一年くらいのことだった。
とにかく魔界の常識は、渡辺凛（にんげん）の常識を百八十度越えプラス三次元回転していて、毎日が大混乱だった。
魔族は両親からではなく、自然現象として生まれるとか。
通常双子は生まれないし、生まれても互いに興味ナシとか。あるいは壮絶に憎しみ合うとか。
だから肉親の情は存在しない。同族意識もほとんどない。
生まれた時から完全体（おとな）なので、保護者や教育者は不要。家なし補助なし手荷物なしで、生後ゼロ歳にして自立完了――とか。
ムリムリ死ぬ死ぬ本気で死ぬ！
涙目で双子（あに）に縋ったら、意外にもあっさり庇護してくれたものの、それでも生きるだけで精一杯だった。
そんなある日、魔王城から招待状が届いた。
その頃は、『魔王様が自分から出歩いちゃう人だから、城への招集は特別である』という魔界常識（ローカルルール）を知らなかった。
知らなかったから、緊張はしたけれど覚悟はないままに、ネヴァンジェリンは城へ向かった。
そして見たものは、囚えられた勇者――人間の処刑だった。

「ネヴァン兄様」

震える指で、ネヴァンジェリンは兄の袖を握った。

「行きたく、ない……」

零れそうな涙をどうにか堪える。
ネヴァンディーンは秀麗な眉を下げ、慰めるように頭を撫でてくれた。

「魔王様の招待を断ることはできない。ネヴァンも分かっているだろう？」
「分かってるけど、どうして……？」

処刑の瞬間、ネヴァンジェリンは恐慌状態に陥り、気絶した。
そして半年の間、彼女は外へ出ることができなくなった。
人間（ひと）が殺されるのが怖かった。
魔族（ひと）が殺しているのが怖かった。
どちらの人生も歩んでいるネヴァンジェリンには、同族（なかま）が同類（なかま）を殺しているようにしか見えなかったのだ。

「どうして魔王様は、わたしを喚ぶの？」

ネヴァンジェリンは弱い。
貧血で常にふらふらしているし、魔力の扱いも覚束ない。空を飛ぶのさえ不安な始末。とても魔王城に招待されるような者ではない。

「わたし、弱いのにっ……！」

処刑を止められなかったほど、弱かったのに。

（どうして――！）

「招待されなかったら、こっそり裏口から人間逃がしに行ったのにーーーっっっ！！」

「弱いのに大胆な娘だね、ネヴァンジェリン。刺激的だ」

泣いて逃げて閉じこもった後、ネヴァンジェリンは理解した。

次に人間が処刑されるのを見過ごしたら、きっと自分の心は壊れる。

魔王様どころか、そこらの魔族にはたかれただけでも死にそうなほど弱いけど、同族を裏切る根性も信念もないけれど、自分の前で人間が殺されるのはダメだ。それだけはダメだ。

頭を抱えるネヴァンジェリンをこの上なく愛しそうに見つめて――この兄どっか間違ってる――ネヴァンディーンは言う。

「招待された以上覚悟を決めて、一番に勇者を捕獲するしかないね。そうすれば処遇の優先権は、君に与えられる」

「わたしは刺激のない人生を歩みたいのに……」

手柄争いの先駆けを競うなんて、ネヴァンジェリンの主義に反する。

派手さなんていらない。慎ましく健全に生きていければ充分だ。だってそれ以上を望むなら、必然苦労が伴うじゃないか。

無理をしない人生。

それが渡辺凛の、そしてネヴァンジェリンの基本方針である――淫魔に生まれた時点で、大幅に予定は狂っているが。

「ネヴァン兄様、協力してくれる？」

上目遣いに――身長差があるのでどうしてもそうなる――尋ねると、ネヴァンディーンは嬉しそうに頷いた。

「もちろんだよネヴァン。可愛い君の頼みなら、並み居る魔族（なかま）をなぎ倒して、勇者の首を捧げるよ」

「首だけじゃなくて下もつけてね!?　分解しちゃダメよ!?　丁寧によ!?」
「分かっているよ。お兄様を信じなさい」
「信じる」とは言い切れず、ネヴァンジェリンは曖昧に頷いた。
なにせ魔族の辞書に『手加減』の文字はない。比喩でなく本当にない。
「でも、そのかわり――」
するりと大きな手が頬を滑る。
ギクリと身を強ばらせ、ネヴァンジェリンは後退った。
「お、お兄様」
「お礼は、してもらえるよね……？」
耳に息を吹きかけるようにして、甘く囁かれる。
途端頬が熱くなり、膝の力が抜けた。崩れかけた身体をしなやかな腕がさらう。
「心とカラダ、どちらでお礼をしてくれるのかな？」
冷や汗が流れた。
膝裏に回された腕が、ネヴァンジェリンを持ち上げる。
細められた琥珀の瞳が、獲物を嬲(なぶ)る猫のように彼女を見た。
「あ、あああのね、お兄様」
「うん？」
微笑を含む相槌。

器用に抱え上げたまま、褐色の手のひらが白い太ももを這い、スカートの中へ侵入しようとする。慌ててスカートの裾を押さえた。

「妹（わたし）なんか相手にしてもつまらないっていうか、こういうのは心を交わした相手とするものだっていうか。それ以前にコレってどこか間違ってると思うの。いえ、明確に間違っているかと異議を申し立てます次第でありまして聞けコラ待ってぇぇえええええっっっ！！」

必死に太ももからの侵入を防いでいたら、もう一方の手がするりと上着の裾から入り込んだ。

おまけに耳に歯を立てられ、パニックになる。

「あっ！　やっ…も、ダメ……わ、分かっ……ら！」

何を言っているか分からないままに、本能が口を開く。

――警告・警告！（エマージェンシーエマージェンシー）

思考が逃走しました。

これより本体は危機回避のため、本能選択モードに入ります。

心とカラダ、今ピンチなのはどっちだ？

「心で払います！！」

答えた瞬間、思考が戻ってきた。

（あれ？　これって状況打開になるの？）

思考が首を傾げる。

ネヴァンディーンがフッと口元を綻ばせ、楽しそうに告げた。

「心を交わした相手となら、オーケーなんだよね？」
「うわさっきそういえばそう言った！　ごめんなさいウソです！　カラダで払います～！」
「うん、じゃあこのまま――」
「後払いで！！」

人間必死になれば、何かしら出てくるものだ――人間じゃないけど。

これで許してくださいと、懇願のまなざしを向けるネヴァンジェリンに、ネヴァンディーンは耳元で囁くように答えた。

「焦らすのが上手だね、ネヴァンジェリン。イケナイ娘だ」

（妹に手を出す兄（アンタ）のほうが、よっぽどいけないと思いますっ！）

いや、魔族は双子でも血の繋がりがあるわけじゃないから、セーフなのか？　でも感情面でアウトだろう。むしろこの人の雰囲気（エロフェロモン）がアウトだよ！

思えど口にしないのが、ネヴァンジェリンの防衛本能だ。

ネヴァンディーンが腕を下げ、地面にそっと降ろしてくれる。

息を吐くと同時、へなへなとその場に座り込んだ。心臓がバクバク鳴り響いている。そんな妹を見て、兄はことさら楽しそうに、声を立てて笑った。

（うわぁん！　玩（もてあそ）ばれた！！）

しかしネヴァンジェリンには、恨めしく睨む以外に不満の表し方がない。

ネヴァンディーンが目の前にしゃがみ込み、にっこりと尋ねてく

る。

「手付けはいただけませんか？　お姫様」

「食らえ、猫ぱんち！」

指をにゃんこの手に丸め、土をつけてから兄の顔に押し付ける。

ネヴァンディーンはさらに笑い転げたが、その顔にくっきり猫の足跡がついているのを見て、ネヴァンジェリンは溜飲を下げたのだった。

第三話：不安ながら、狩りです

月夜に浮かぶ不気味なモニュメント。
それは岩山を丸ごと削って造られた、魔王様の牙城。
無骨にして歪。歪にして繊細。
黒一色に統一された城は、シルエットと実際の差が分かりづらく、酷くチープにも恐ろしげにも見える。
地には多種多様な怪物（モンスター）が蠢き、城内は人外魔境――魔界なので当然だが――が形成されている。暗色でまとめた内装と入り組んだ回廊含め、完璧だ。ゲーム世代だったネヴァンジェリンから見ても、紛うことなき魔王城だ。

（どれだけ魔王様が城を使ってないか分かるわね）

退屈しのぎに、どれくらい情熱をかけているのかも。
住み心地＜遊び心。きっと城にはめったに帰っていないに違いない。
空から来た者用の玄関――見た目はテラス――から城内へ入ると、屍鬼族の執事が迎えてくれた。

「ようこそいらっしゃいました、ネヴァンディーン様、ネヴァンジェリン様。
私（わたくし）、執事をしておりますチェーザレと申します」

動く死体（アンデット）とは違う滑らかな動きで、執事（チェーザレ）が紫の顔を伏せる。
屍鬼族とは死体を食み、屍を纏う者。本性はともあれ、外見が死体ならネヴァンジェリンには忌避対象だ。光のない目も、水死体を思わせる紫色の肌も、正直直視に耐えかねる。

とっさに兄の背に隠れた妹とは対照的に、ネヴァンディーンは余裕の素振りで一礼を返した。

「この度は魔王様の恩情によりお招きを賜り、こうして参上仕りました。
ご不快とは存じますが、我等淫魔が御城へ立ち入りますことをお赦しください」

（なんでこんなにスラスラ言えちゃうの）

文句なくカッコイイ兄に、ネヴァンジェリンは感心した。
もっともその頬には彼女がつけた『猫ぱんち』がそのまま残っていたが。気づいてちょっと焦る。

「不快など滅相もありません。ネヴァンディーン様は力ある魔族の中でも、種を超えそれと知られる方。その妹君であるネヴァンジェリン様もご高名です。
お噂どおり、子ウサギのように可憐なお嬢様であらせられますね」

（それはいかにも被食者って意味ですか？）

思えど問いかける勇気はなく、微妙に目線を逸らしながら、曖昧な笑みを返した。
元日本人、心中を見せない笑顔は得意です。

「さて、此度の獲物で御座いますが、人界シュッティンベルグランド国の第一王子と、騎士二千人です」
「にせ……」

軽く告げられた人数に、くらくらと眩暈がする。

「ここまで辿り着いたのは百人です」

しかしどうやら全滅寸前らしい。

今回の狩り目標（ゲーム）は第一王子。彼がすなわち『勇者』として扱われる。

各自、強さ別に割り振られる担当階（フロア）にて待機。

階を移っての攻撃はなし。連続波状攻撃もなし。勝負後は、必ず勇者側に十分以上の休息時間を与えること。戦闘は近接戦闘限定で、城内にはいくつか勇者用の休憩地点（セーフポイント）が用意されているが、そこから出てすぐに襲い掛かるのもなしだ。まあ、なんて親切な。

（勇者さん、遊ばれてるなぁ……）

今の気分はゲームマスターですか、魔王様。

勇者が狩られた時点でゲームは終了。あとは宴とご褒美タイムだ。

「ネヴァンジェリン様は一階、ネヴァンディーン様の担当地区は、最上階となっております。

どうぞご存分に狩りをお楽しみください」

かたや最下層。かたや最上階。実力評価が露骨かつ的確で泣けた。

しかしここで離されるわけにはいかない。

両手を組み、ネヴァンジェリンはうるうる目で懇願した。

「お兄様と離れるなんてイヤです。どうか一緒にいさせてください！」

そしてできれば勇者に接触しやすいよう、二人とも一階でお願いします。

ネヴァンディーンもまた艶っぽく愁眉を顰め、頼み込む。

「わがままを申し上げますが、妹は見た目どおり、荒事には向いていないのです。正直一人では身を守ることさえ覚束なく、狩りに参加できるとは――」

「ご安心ください」

紫執事が確信を込めて頷く。

「魔王様も、ネヴァンジェリン様に荒事で期待はされていないと思われます」

（じゃあ何を期待してるんですか！）

敗北ですか？　負け姿ですか？　それとも泣いて逃げ惑う有様ですか！？

よほど問い詰めたかったネヴァンジェリンだが、なんとか堪えて我慢した。

ええ、そりゃあ魔王様にもご満足いただけるでしょうよ。人間を見て、ぴるぴる震えながら壁際に逃げる魔族。逆に狩られちゃう魔族。きっと大爆笑だ、けっ。

「同時にネヴァンディーン様のご性分も、魔王様は把握しておいでです。

危機に際し飛び出されたところで、かの方のご機嫌が損なわれることはないでしょう」

（つまり）

人差し指を唇に当て、ネヴァンジェリンは考える。

（弱っちい魔族も妹思い（シスコン）な魔族も充分珍しくて面白いから、多少のことは許してもらえるってことよね）

兄と視線を合わせ、頷き合う。

――勇者を見つけたら悲鳴をあげるから、助けにきてねお兄様！

――むしろ一階に着いたらすぐに叫（よ）びなさい。

相互理解（アイコンタクト）の誤差はこの際無視だ。

ネヴァンジェリンは兄の影から出て、二人にぺこりと一礼した。

「では行ってきます、ネヴァン兄様。紫しつ――チェーザレさん」

「すぐに僕を呼ぶんだよ」

「行ってらっしゃいませ、ネヴァンジェリン様。宴でまたお会いしましょう」

そういえば『猫ぱんち』跡を指摘し忘れたなぁと、走り出してから気づいたネヴァンジェリンであった。

一階へ行ってすぐ、ネヴァンジェリンは後悔した。

紫執事（チェーザレ）は仕事柄丁寧に対応してくれたものの、他の魔族からすれば、ネヴァンジェリンは浮いた存在なのだった。

（ううっ、忘れてたよ～！）

至るところから視線を向けられ、ネヴァンジェリンは小さくなる。

こちらを指差し、何やらひそひそ声で囁きあっている者もいて、

泣きそうになった。

（目障りだって思ってるよね……）

独立独歩を旨とする魔族からしてみれば、いつも兄の背中に隠れているネヴァンジェリンは軽蔑の対象に違いない。それなのに魔王様の招待を受けるとか、分不相応にも程がある。

（わたしだって、辞退できたならしたわよ！）

そうすれば勇者が捕らえられた後に、こっそり救出を狙えたのに。しかし招待を辞するのは無礼となる。仕方ないではないか。

（そうよ、わたしは悪くない！）

幸い自己暗示は効くほうだ。必死に己に言い聞かせつつ、勇者が来そうなポイントを探す。

乱戦になりにくく、かつ他の魔族がいない場所。できれば勇者と一対一で対面できそうな――ああ、こんなとき自分が某擬似宝箱モンスターであれば！　って、さすがにそれはイヤか。

考えているうちに、城内に鐘の音が鳴り響いた。

勇者が入城した合図だ。

途端、剣の音が鳴り響き、楽しそうな咆哮が聴こえてくる。

「ミナサン、タノシソウデスネ。急がなきゃ！」

とりあえず賑やかなほうへ走り出す。

いきなり襲われると困るので、愛用の傘を突き出しつつ進んでみたり。

（そろそろお兄様を呼んでおこうかな。勇者を見つけても、時間稼ぎなんてできないし……）

まったく自慢じゃないが、貧弱さには自信があるのだ。
そこではたりとネヴァンジェリンは気づいた。
勇者を保護するためにと急いでいるわけだけど、自分は今、れっきとした魔物なわけで。
おまけに弱いなわけで。
……遭遇したら、瞬殺ですか？

「お、お兄――！」

叫び声を遮って、衝撃が腕を襲う。

「きゃっ！？」

角を曲がってすぐ、誰かがネヴァンジェリンの傘を切り裂いたようだ。
真っ二つになり、飛んでいく黒い傘。
冴え冴えと輝く白銀の剣。
大仰に翻る空色のマント。
こちらを見据える眼差しは強く、翡翠の瞳と金髪のコントラストが血煙に汚れてなお眩しい。

「また現れたか、不浄な魔物め！」

あ、死亡フラグ。

第四話：不意打ち遭遇へ捧ぐ、バックアタックと落とし穴

避けられない速度で絶対死の刃が振り下ろされる。
それはネヴァンジェリンを切り裂く直前、視界の端から飛び込んできた影により横に逸れた。
掠めた髪が数本床に落ちる。
その上に着地する、小さな黒い影。

「ルゥ！」

それは隻眼の黒猫だった。
片目は閉じたまま、もう一方のヘーゼルの目で鋭く勇者を睨みつけている。その首にはかつてネヴァンジェリンが結んでやった、赤いリボンが揺れていた。

「使い魔か！？」

勇者が剣を構え直す。
気づいたネヴァンジェリンは黒猫を胸に抱き込んだ。

「ダメ！！」

ルゥはネヴァンジェリンのたった一人――もとい一匹の友達だ。
勇者の処刑を見て閉じこもっていた頃、どこからともなく現れた。
言葉を交わしたことはない。喋れないのかも、喋らないのかも分からない。魔族（だれか）の使い魔なのか、どこへ帰るのかも知らない。
時々現れては傍にいて、「ルゥ」と呼べば頭をすり寄せてきた。
それだけで充分だった。

身を挺して庇う理由も。

「ルゥを傷つけちゃダメ！　この子は関係ない！」

戸惑うような気配が勇者から伝わってくる。

剣の先端が僅かに下がった。

「……お前は、魔物なのか？」

「魔物だよ」

答えたのはネヴァンジェリンではなかった。

聞き慣れた甘い声――

「ネヴァンディーンお兄様！」

「なっ――！？」

勇者が振り向きざま剣を振るう。

いつの間にか背後に忍び寄っていたネヴァンディーンは、軽く後ろへ跳んでそれを躱した。

その続く一瞬で、勇者の懐に身を寄せる。

「僕の可愛い妹に、そんな無粋な剣（モノ）を突っ込もうなんてイケナイ子だね」

黒い巻き毛と金糸の髪が、二人の間で混ざり合う。

口付けを思わせる距離に、勇者は目を見開き後退しようとした。

けれどしなやかな右腕に腰をさらわれ叶わない。

剣を振り上げようとした手には、左の指が絡みつき、一本一本強引にそこを開いていった。

「――代わりに僕がイかせてあげる」

刹那――

勇者は左手一本で首を捕まれ、壁に叩きつけられていた。

「ぐ、あっ……！」

「ふふっ、いい声」

琥珀の瞳がうっとりと細められる。

勇者――彼らにとっては王子か――の危機に気づいた騎士たちが、青褪めて叫んだ。

「殿下！」

「おのれ魔物め、その手を放せ！！」

ネヴァンディーンは素直に手を放した。

崩れ落ちそうになった勇者の身体を、みぞおちに膝を叩きこんで、再度壁に張り付け直す。

「ぅあ……！！」

「感度がいいね。でもまだイっちゃダメだよ。我慢しなさい」

血を吐き呻く勇者の頬を、愛撫するかのように優しく両手で持ち上げる。

そして騎士たちに、見せつけるような流し目をくれた。

それだけで彼らの動きは止まる。

勇者は文字通り、ネヴァンディーンの手の中だ。そっと長い爪を立て、勇者の皮膚をじわじわ赤く染めていく。その姿を見れば、迂闊に動くことはできないと思い知らされたことだろう。

「ほら、頑張って。僕は前戯を楽しむ主義なんだ。ああ、声は抑えなくていい。好きなだけ啼きなさい」
「もういいわ、お兄様！　やめて！」

黒猫（ルゥ）を抱き、ネヴァンジェリンは立ち上がった。
膝ががくがく震えている。振り下ろされた刃や迫る死の恐怖を、意識より身体が拾い上げていたらしい。
それでも、それ以上勇者（ひと）が傷つけられるのは看過できなかった。

「ルゥとお兄様が来てくれたから、わたしは大丈夫。もう怒らないで！」
「え？」

きょとんと琥珀の瞳が振り向く。
一瞬間を置いて――

「……ああ、うん、そう。僕の可愛い妹をキズモノにしようなんてホントゆるせなくて、ついお仕置きが加熱しちゃっタ」

てへッ、と最後にハートマークが付きそうな笑顔。
ネヴァンジェリンはこめかみが引き攣るのを自覚した。

「……おにいさま」

助けに来てくれた瞬間、ネヴァンディーンは確かに救世主（ヒーロー）だった。
暴力は怖かったけれど、それでも自分のことで憤ってくれているのだと思えば、少しだけ嬉しい気もした。
――ああ、そんな自分はまだまだ甘い。

（こいつ、僕（わたし）の可愛い妹を忘れてがやったな！！）

興奮のあまり、そもそもの目的を忘れたらしい。
しょせんは魔族。最後まで英雄（ヒロイック）を求めた自分がバカだった。

「単に楽しんでただけか、この鬼畜！　言い回しがエロすぎて、勇者の貞操の危機か命の危機かも分からんわ節操なし！　わたしの感動を返せーーーっっっ！！」

「いや誤解だよ、ネヴァンジェリン。お兄様はいつでも君が一番ですよ？

……でもほら、快楽に流されやすいのが淫魔というか、本能には抗えないというか、ね？」

「可愛く首傾げても、赦しません！！」

興奮するネヴァンジェリンの腕の中から、あきれたように黒猫が飛び降りる。

「あ、ルゥ」

彼はまたいつもどおり、どこかへと帰っていくようだ。
振り向きもしない友人に、ネヴァンジェリンは心を込めて礼を述べた。

「ルゥ、助けてくれてありがとう！」

ルゥは尻尾を一度だけ揺らし、そのまま去っていった。
その背中に思わず悶える。

「ああ、なんてカッコイイの、ルゥ！」

惚れちゃうじゃないか。

前世含め、出会ってきた男（オス）の中で一番のオトコ前だ。間違いない。
ネヴァンディーンが不満げに唇を尖らせた。

「助けたのは僕なのに～」
「途中で忘れたから減点です」

……本当は、とっても感謝しているけれど。
それは兄には言わないでおく。
いつの間にか足の震えも消えていて、ネヴァンジェリンは普段通りに振る舞うことができた。

「ほらお兄様、勇者のイジメすぎ禁止！　気絶させて、魔王様のところへ連れていこう？」
「ま、待て！」

慌てたように騎士の一人が叫ぶ。
ネヴァンジェリンはそちらに、気の毒そうな目を向けた。

「気持ちはとっても分かるけど、勇者が気絶したら狩り（ゲーム）は終了なの。だから――」

ネヴァンディーンが勇者の首筋に手刀を落とす。
がくりと首が垂れた途端、騎士たちの足元に闇が生まれた。

「……え？」

ぽかんと口を開いたまま、彼らはどこかへ落ちていく。
歴代最強魔王サマの得意技は、闇を介した空間操作。影さえあればどこにでも現れ、誰でもそこへ引きずり込める。たぶん落下先は檻の中だ。

城内に二度目の鐘が鳴り響く。
それは狩りの終了の合図。「あーあ」「早すぎ、つまんねー」「もっとがんばれよ、勇者ー」と、のんきなブーイングが聴こえてくる。
人間側は必死でも、魔族はいつでもお遊び気分だ。
「やべ、腕どっかで落としてきた」「さっき人間と一緒に落ちてったぞ」「マジか！」「オレの内蔵がないぞう」
……うん、いつもどおりだ。
勇者の血を拭ってやりながら、ネヴァンジェリンはしみじみ頷いた。

「ゲームバランスは大事だよね」

魔王様含め、この世界の魔族は強すぎだと思う。

第五話：蒼き謁見の間に落ちる、不測事態

謁見の間を兼ねた八角形平面の石造りの広間は、城の最上階に位置している。

半円アーチを刻んだ黒壁に、姿が映り込むほど磨かれた漆黒の床。けれど壁はどういう材質なのか、月明かりを飲み込まずその色に染まる。

蔦を編んだかのような複雑な格子の天窓は、いまその中央に月を抱いていた。

月に青褪めるその部屋は、まるで深海の境のようだ。

頭上で光が揺れ、足元に闇が横たわる。

――そしてその深淵の闇から、黒き玉座が現れる。

魔族は一斉に膝を折り、頭を垂れた。

「今宵の勝者に褒美を授ける。

ネヴァンジェリン、並びにネヴァンディーン。面を上げよ」

硬質な声が命じた。

双子は緊張の面持ちで顔を上げ、正面に対する王を見上げる。

美しくも無骨な玉座に、黒檀の髪が流れている。束ねもせず垂らしたままのそれは床にまで届き、影と繋がっているようにも見えた。

髪に覆われぬ半分の顔と、それを彩る深紅の瞳だけが、かの方の持つ色彩である。

闇そのもののような魔界の主。

歴代最強の魔王陛下。

玉座に片肘をつき、その上に頬を乗せた魔王様は、それはそれは気怠げに仰った。

「勇者の処遇は、狩りの勝者に委ねるが通例である」

よかった、とネヴァンジェリンは思った。
実際に活躍したのはネヴァンディーン――と、ルゥ――だが、どうにか勝者と認められ、勇者の身柄を任せてもらえそうだ。
これで人間が殺されるところを見ないで済む。
ほっと安堵の息を零すネヴァンジェリンの心境を知らず、魔王様はこう続けた。

「――が、お前に処刑方法を決めよと申しても、嬉しくはなかろうネヴァンジェリン」
「はい？」

思わず素っ頓狂な声が漏れた。
ええ、まあ、その通りです。処刑なんてしたくないですからね。させないつもりですからね？

（でもなんでそんなこと言うの？）

イヤな予感。

「代わりに魔界をやる」

静まり返った場が、さらなる静寂に包まれた。

（魔界を……やる？）

魔界の何を？　あるいは、魔界で何を？
理解できなかったのは彼女だけではないらしく、静寂は困惑に満ちている。
魔王様は平然と爆弾発言を投下した。

「余は人間界を手に入れてくる。
世界征服というヤツだな。しかし世界は二つもいらぬので、一つその方にくれてやる」

「ありがたく思え」の言葉は、ネヴァンジェリンの悲鳴と魔族らの歓声に掻き消された。

「何言っちゃってんの、この人ーーーっっっ！！！！！」
「人じゃないよ、ネヴァンジェリン」
「うおおお！　さすが魔王様！」
「大掛かりな遊びを考えられましたな」
「よーし！　やっちまおうぜ！」
『おー！！』

教訓、魔界はいろいろ予測不能です。

（ないないない、あり得ない！！）

これはいわゆる祝勝会のはずだった。
狩り（ゲーム）の勝者に勇者の処遇を決める権限を与え、その処刑を肴に談笑するというダークな宴だが、とにかくその予定だった。
そこで便乗勝者のネヴァンジェリンが「殺さないでください」と懇願すれば、まあブーイングは起きるだろうが、それで済むはずだったのだ。
ところが魔王様は、処刑権限ではなく魔界をネヴァンジェリンにくれると言う。
理由、処刑権限をもらっても嬉しくないだろうから。（まあ、な

んて親切な）

魔界を下げ渡した魔王様は、代わりに人間界を支配しに行くと言う。

他魔族たち、大賛成。（まあ、なんて迷惑な）

（どんな過程があればその理論に帰結するの！！！？？？）

魔王様に物申す。下手な心遣いはありがた迷惑なんでやめてください。気を遣うとか、根本的に向いてないです。

「魔界なんていりません！！」

思わず立ち上がり、ネヴァンジェリンは叫んだ。

片肘の上に頬を乗せていた魔王様は、僅かに眉を上げて身を起こす。

「何故？」

「いや、なぜって……」

そこでそう返されるとは。

叫んでしまってから、口答えととられ叱責される――あるいは殺される――のではと青褪めたが、素で理由を問われるとは予想外だ。

「その、魔界なんて大きなもの、もらっても困ります……」

「分割して他に譲渡してもよい」

貰い物のおすそわけですか、とつっこみたいがつっこめない。

「ま、魔界をわたしがもらったら、魔王様住むとこなくなっちゃいますよね。だから人間界支配するーとか仰ってるんですよね？　だ

ったら――」
「世界征服は退屈しのぎだ」
「え、わたしの褒美と別件ですか！？」

こくんと、ちょっと可愛い仕草で頷かれる魔王様。
そのまま軽く首を傾げられる。さらさら長い黒髪が零れ、隠されていた側の顔が僅かに覗いた。バター色の肌に刻まれた魔術文字が、淡く光っている。

「勇者を待つのも飽きたし、どうせ余のところまでは辿りつかない。ならばこちらから出向くも一興」

一興でどこまで行く気だ魔王。
一人焦るネヴァンジェリンとは対照的に、他の魔族たちは不思議そうに彼女を眺めている。
その視線は「魔界いらないの？」「何が言いたいの？」という、魔王様と同じ目つきだ。アホな子か空気読めない子みたいに思われている気がして、ネヴァンジェリンは悲しくなってきた。自分が魔族として浮いているのは自覚しているが、実感したいわけではない。

「ま、魔界なんていらないから、そんなのやめてください……！」

つい涙声になる。
分かっている。自分と魔族たちの価値観は違う。彼らにとって人間は、家畜かオモチャも同然で、それに必死になるネヴァンジェリンのほうがおかしい。

（でも、わたしも人間だったんだもん）

いまはもう違うとか、そんな風に割り切れない。

結局ネヴァンジェリンの意識は、渡辺凛（にんげん）のままなのだ。

「僭越ながら魔王陛下、よろしいでしょうか」

ネヴァンディーンが落ち着き払った声をあげる。

「発言を許す」

「ありがとうございます」

にっこり笑って立ち上がり、さりげなく兄は妹の肩を抱いた。

「我が妹は人間に対し、狩って遊ぶ以外の価値を見出しているようです。

故に、安易に人間を減らすことを憂いております」

「ふむ。狩る以外の価値とはなんだ、ネヴァンジェリン？」

「えっ！？」

落ち込んでいたところにいきなり振られ、ネヴァンジェリンは焦った。

そもそもにして『人間の価値』などという、哲学だか倫理だかで紛糾しそうな議題に、簡単に答えを求められても困る。

「こ、言葉では説明しにくいです」

苦し紛れにそう言えば、魔王様は先ほどとは逆の方向に首を傾げた。

表情はほとんど変わらないが、何やら考えているらしい沈黙。

そうしてしばし黙り込んだ後、魔王様は言った。

「ならば言葉以外で示せ」

ぱちりと指を鳴らす。
影の中から等身大の十字架が浮き出してくる――と思いきや、それは磔台だった。血で汚れたままの勇者が張り付けられていて、ネヴァンジェリンは青褪めた。

「これを使い、人間の価値とやらを見せてみよ。それまで世界征服は保留とする」
「本当ですか！？」

ぱっと表情を輝かせたネヴァンジェリンに、魔王様は頷く。

「待つのに飽きたらする」
「……できるだけ早く報告に行きます」

とりあえず、多少の猶予はできたらしい。
ネヴァンジェリンは急いで勇者の拘束を解き、状態を確かめた。
顔や首の引っ掻き傷のほか、打撲と骨折が見受けられる――全部ネヴァンディーンの仕業だ――が、命に別状はない。
ほっと息を吐き、気絶した勇者の頭を膝に乗せる。血の気の失せた白皙の美貌が痛々しく、ドレスの袖で血を拭ってやった。

「多少予定はかわったけど、勇者を救うことはできたね」

こっそりと、ネヴァンディーンが耳打ちしてくる。
床に座ったまま兄を振り返り、ネヴァンジェリンは笑った。

「ありがとう。お兄様のおかげよ」
「どういたしまして」

にっこり微笑み返した兄の腕が、するりと首元から胸元へ落ちてくる。
背後から軽く妹を抱きしめて、ネヴァンディーンは甘く掠れた美声で囁いた。
「約束のお礼を楽しみにしているよ」
ネヴァンジェリンは硬直した。
そういえば、この礼は身体で払うとかいう約束を……した。
（あ、あの、えと、ちょっと待って。これって――）
「人間の価値を証明するまでの間、その方ら双子は城への滞在を命じる」
冷や汗を流す彼女に気づかず、魔王様は淡々と告げる。
「勇者の扱いはネヴァンジェリン、その方に一任する。
また、世界征服を中断したゆえ、余は暇である。よって――」
深紅の瞳がきらりと光る。
このとき初めて、魔王様の顔に『退屈』以外の表情が浮かぶのを見た。
獲物を前にした猫科の猛獣を思わせる、美しくも凶悪な微笑。
「その間、責任を持ちその方が余を楽しませよ。
――よいな？　ネヴァンジェリン」
これって、なにフラグですか？

第六話：不用意発言は首を絞める、本人の

「おいで、ネヴァンジェリン」

甘やかな声が自分を呼ぶ。

「大丈夫。乱暴になんてしないから」

それは心配してないと小さな声で呟けば、嬉しそうに微笑んで兄のほうから寄ってきた。軽々抱き上げられて、ベッドの上に優しく降ろされる。

「お、お兄様！」

足元に跪き、彼は妹の爪先を己の膝に乗せた。

自分のものとは違う大きな手が、踵から太ももへ這い、足の付根へと上がっていく。

「や！　待――」

「おとなしくしていなさい」

チュッと音を立てて内ももに口付けられる。

ネヴァンジェリンは真っ赤になって、ネヴァンディーンの髪を掴んだ。

「イイ子にしていたほうが、早く済むよ」

琥珀の瞳に見つめられると、ますます顔に血が上って混乱してくる。

恥ずかしさから、思わず目尻に涙を浮かべると、兄は立ち上がって舌でそれを舐めとった。

「ほら、力を抜いて。僕に全て任せればいい」

もう、何が何だか分からなくなってきた。

足に触れた指が腰に周り、胸元へ伸びて、髪を梳いていく。

ネヴァンジェリンは固く目をつむり、全てが終わるのをただ待った。

これは、勇者を助けるために必要だった代償だ。望みが叶えられたいま、断る術は彼女にない。

「ああ……可愛いよ、ネヴァンジェリン」

ネヴァンディーンが耳元で囁いた。

耳をくすぐる吐息が、視界を閉じたゆえより間近に、ダイレクトに伝わってくる。

「ほら、目を開けてご覧。いまの君を見せてあげる」

浮遊感が全身を包み込む。

背と右肩に兄の体温を感じ、腕に座らされた状態で抱き上げられたのだと気づく。

イヤイヤと首を振れば、こめかみにキスを落とされた。もう一方の手が、焦れたように頬を撫でる。

「ネヴァンジェリン」

名を呼び再度促され、彼女は泣きそうな心持ちで瞼を開いた。

魔王城の冷たい一室。灰色の壁に四方を囲まれたそこには、ベッ

ドと椅子と、等身大の姿見しか置かれていない。
床に散らばった己の服から目を逸らし、ネヴァンジェリンは震えながら、正面に突きつけられた姿見を覗き込んだ。
腰まで届く黒い巻き毛が、耳の上で二つに結われて揺れている。白い肌を包むのは、膝上までの黒いドレス。白いケープと赤いリボンが彩りを添えており、形としては、修道服か女学生の制服を思わせる。
ことさら丁寧に履かされた靴下は、黒と白の縞模様だ。……おまけに下着も、縞模様だ。
ネヴァンディーンはほぅっと熱い吐息を漏らし、うっとりと目を細めた。

「ああ、本当に可愛い……」
「黙ってください、このロリコン！！」

羞恥に身を震わせて、ネヴァンジェリンは半泣きで叫んだ。
……代償の支払は、過酷です。

その後、首筋やら胸元に不埒な赤い徴を見つけて、べしべしおニューのレース傘で兄を叩いてから、二人で勇者の様子を見に行くことにした。
魔王城への滞在を命じられた双子は、居心地最悪の部屋群の中から最低限の家具がある一室を選び、囚われの身である勇者は、最奥に位置する尖塔の最上階に運ばれた。
狩りが終わり、集められた魔族がいなくなった魔王城は、灰色の廊下が続く冷たいだけの空間で、怖いよりむしろ物悲しい。
（ゲームを敵遭遇（ノー・エンカウント）なしに無音（ノー・サウンド）状態でやれば、こんな感じだったのか

も）

これは魔王様も居着かないよねと、ネヴァンジェリンは深く納得した。

十分ほど歩いてようやく窓を見つけ、そこから外へ出る。

飛び立ちと着地が苦手なネヴァンジェリンは、兄の手を借りて空を舞った。

魔界には太陽が存在しない。そもそも朝という概念がないのだが、月明かりの強弱でなんとなく時間は計れる。狩りから一夜明けた、一度目の食事時間くらいだろうか。

（さすがにもう起きてるよね）

ネヴァンジェリンが治療を施した後も、勇者は気絶したままだった。

怪我の疲労や緊張もあったのだろう。そのまま睡眠に移行したのを見てとって、自分も休息をとったのだが、今ごろ目覚めて不安がっているかもしれない。

（勇者の様子を見に行ってくれる人なんて、いないもんね）

感情的な理由ではなく、主に発想と人手の面で。

「死んでないなら寝りゃ治る」が標準思考（デフォルト）の魔族には、『看病』のニ字がない。そして魔王城は人手不足どころか、基本的に人気（ひとけ）がない。

なにせ召使は屍鬼族の紫執事（チェーザレさん）だけで、他の用事は動く死体（アンデット）か泥人形（ゴーレム）で賄っている現状だ。彼らは動きが遅い上に、命じたことしかしてくれない。おまけに魔族は致命的に『創造』力が低く、短期間で壊れて地に還る。用事があるならある奴が動け。魔族の常識は、合理的か否か悩むところだ。

（せめてお部屋くらい、なんとかしてほしいな）

ネヴァンジェリンは崖の中腹にある洞穴に住んでいるが、内装にはこだわっている。暗くてジメジメしてても負けない。精一杯の乙女部屋にすべく、カーテン縫ったりタイルを敷いたり、いろいろ奮闘したものだ。

仮にも魔王『城』なのだから、それくらいは頑張っていただきたいのだが――

岩山を削った城の裏手には、遺跡跡のような廃墟が広がっている。空から見ると、その廃墟が半分ほど森に飲み込まれているのが見て取れた。

ここが魔王様の憩いの庭で、城にいるときは、だいたいそこで寛いでいるらしい――うん、内装への期待（リフォームねがい）は諦めました。

空を飛ぶ者の特権で、尖塔の屋根に降り立ちそこから中に入る。魔族にしか開けられないドアノブをひねると、ネヴァンディーンがいきなり肩を掴んで、自分のほうへと引き寄せた。

「ふぇ？」

鼻先を錆色の何かが通りすぎる。

目の前には、錆びた燭台を握った勇者サマ。彼は鋭く舌打ちし、忌々しげに双子を睨んできた。

「ええっとー……気分は、どうですか？」

燭台と勇者の顔を往復して眺めた結果、出てきた言葉はそれだった。

勇者は答えず、さらに強い視線を向けてくる。ああ、警戒されております。

「お腹空いてたりとか――」
「……何のつもりだ」
押し殺した声で、勇者が言った。
「私を人質とし、国に何らかの脅しをかけるつもりか。甘く見るな、魔物め！　たとえ私が失われようとも、我が国は決して貴様らには屈しない！！」
「え、ぽい捨て決定？」
王子様なのに？
思わず言って、慌てて口を手で塞ぐ。途端、勇者は黙り込んだ。秀麗な顔立ちが苦悩に歪む。
「あ、す、すみません！　失言しました！　ごめんなさい！！」
いつもは内心で毒を吐いているだけなのに、たまに口から零れてしまうことがある。
ネヴァンジェリンは慌てて謝罪するが効果はなかった。勇者は拳を震わせて、ぷいとそっぽを向いてしまう。
（うあ、なんか地雷踏んだっぽい！）
魔族の戯言と聞き流せない事情があるようだ。ほぼ初対面でそこまで突っ込んで、ホントに申し訳ありません。
気まずい空気に助けを求め、ネヴァンジェリンは兄の腕をつかんだ。
「ネヴァン兄様、どうしよう！？」

「うん。とりあえず互いの自己紹介からじゃないかな」

……兄は空気読めていませんでした。おのれ魔族め、どんだけマイペースだ。

にっこり綺麗な笑みを浮かべて、ネヴァンディーンが優雅に一礼する。

「改めて、魔界へようこそ王子殿下。
僕は男淫魔（インキュバス）のネヴァンディーンです。こちらは妹のネヴァンジェリン」

勇者がちらりとこちらに目を向けた。
兄を見て、妹を見て、もう一度兄を見て、最後にじっくりネヴァンジェリンを見る。

「……女淫魔（サキュバス）か？」

ネヴァンジェリンは胸を押さえ、ズーンとその場で落ち込んだ。

「おっぱい小さくてすみません……」
「え！？　いや、そこは充分だと――」
「じゃあ背が低くてごめんなさい。童顔なの謝ります」

最後の二つには、否定が返ってこなかった。

（図星ですか……）

先の失言の仕返しかと思うくらい、的確にコンプレックスをつついてくれた。
ぷるぷる腕を震わせて、上目遣いに勇者に叫ぶ。

「どうせ！　どうせわたしは色気がないですよ！　がっかり淫魔で悪かったですね！
　でも誰にもメイワクはかけてないじゃないですか！　お色気美女軍団の中で、それでもこの姿で頑張って生きてるんですよ！　なめくじにも角はあるんですよ！　仮にも王子なら紳士らしく、見てないフリで流しなさいよ！！」
「う……む、すまなかった」
「そこで謝られちゃうと、余計傷つくんですよーーー！！！！！」

　叫ぶだけ叫んで、ネヴァンジェリンはみーみーとネヴァンディーンに泣きついた。
　すぐにひしっと抱き返してくれる。

「お兄様ー！　勇者にいぢめられた～！」
「可哀想にね、ネヴァンジェリン。彼はきっと年増好みのおっぱい教信者なんだよ。胸は爆乳まで行っちゃいけないの美学を知らないんだよ。
　ちっちゃいのに胸だけ人並以上が最高峰だと、僕は断言するよ！」
「うわーん、ロリコンー！」

　しばし騒いで――自分が――落ち着いてから、ネヴァンジェリンが名を尋ねると、勇者は案外すんなり名乗ってくれた。双子のペースについてこれなかったらしい。

「私はエリオット。
　エリオット・シュッティンベルグランドだ」

　家名はともかく、名前は覚えやすそうで安堵する。

（うん、とりあえず問題はいろいろあるけど――）

人間の価値を認めさせなければ、世界征服が始まってしまうとか。
彼の魔族への不信感だとか、なんか確執ありそうなお家事情とか、
同じく囚われたままの騎士たちのこととか、兄への分割支払は毎朝
当分続くとか、魔王様のご機嫌取りも必要だとか……うん、ありす
ぎるけど、とりあえず。

（まずは勇者さんと仲良くなることよね！）

そうすれば、彼も力を貸してくれるかもしれない。
そう、稼ぐに追いつく貧乏なし――じゃない、千里の道も一歩から、だ！

「じゃあ、エリオット王子」

だからネヴァンジェリンは、できるだけ可愛く微笑んだ。
にっこり笑って両手を差し出す。

「服を脱いでください」

第七話：相互理解の不協和音、その結果

急に部屋が寒くなったような気がした。

（あれ？　なんで？）

服を受け取ろうと両手を差し出したまま、ネヴァンジェリンは首を傾げる。魔界の気候――天気ではない――は変わりやすいが、それにしても唐突な変化だ。

というよりむしろ、冷気は二人の男から発せられているような……

「ネヴァンジェリン」

甘く名を呼んで、ネヴァンディーンが抱きついてくる。

片手を妹の腰に絡め、もう一方の手で器用に己の服の留め金を外し始めた。

「なんでお兄様が脱ぐの！？」

「僕の前で他の男と絡もうなんて、本当にイケナイ子だね。精気が欲しいなら、いつだって僕が分けてあげるのに」

「いーりーまーせーん！　ってぎゃー！　耳舐めるなー！」

勇者――もといエリオットが、虫の交尾を眺めるかのような冷めた視線を向けてくる。その目に軽蔑を感じ取って、ネヴァンジェリンは慌てて兄の胸を押した。

「包帯をかえようと思っただけよ、もうっ！

なんでお兄様は思考が下半身に直結するの！？　淫魔だからって盛り過ぎデス！」

自重しなさいと睨めば、何故か兄は楽しそうに、エリオットに笑顔を向けた。

「――らしいよ？」

気まずそうにエリオットが視線を逸らす。

不思議と部屋の寒さも元に戻ったようだ。内心首をひねりながらも、兄が身を引いたのを幸い、そのままぐいぐい押して、部屋の外に追い出した。

「ちょうどいいからお兄様、エリオット王子に着替えを貸してあげて」

「僕は男に自分の服を着せて悦ぶ趣味はないよ」

「うん、あったらドン引くから」

肩を竦めたネヴァンディーンが、額にキスを寄越してくる。先ほどからいつも以上にスキンシップが多い。

「可愛い妹のおねだりには逆らえないね。じゃあちょっと取ってくるけど、勇者サマに襲われないよう気をつけるんだよ」

「勇者はそんなヒドイことしません！」

（――よね？）

思わず、部屋の中に危険なものがないか見渡してしまったネヴァンジェリンである。まあ、素手で襲われても負けますが。

十五階ほどの高さに位置する扇形のこの部屋には、ベッドと燭台以外は何もない。あとは昨日ネヴァンジェリンが持ってきた救急箱

――私物――くらいだ。鎧や剣は、まとめて他所に隠してしまったし。

唯一武器になりそうな燭台を、彼が未だ片手に握っているのが気になるが、王子様だから大丈夫。うん、きっと。そう思おう。

――でもやはり不安だったので、ネヴァンディーンに頼んで取り上げてもらった。勇者は当然抵抗の意思を示し、結果、床に沈められる事態となる。

「じゃあ服を取りに行ってくるから、良い子で待ってるんだよ」

にっこり微笑んで、兄は窓から飛んでいった。

ネヴァンジェリンは無言でその背を見送り、ひどく気まずい思いでエリオットに目をやる。

笑顔で近寄りざま、昨日折った肋骨に膝蹴りして凶器回収。兄の所業はなかなか鬼畜でしたが、この場合の主犯は彼に頼んだワタクシでしょうか？

ネヴァンジェリンはだらだらと、流れる冷や汗を自覚した。

「あ、あの、包帯をかえ――て、もう一回手当していいデスカ？」

床に倒れたまま、無言で痛みを耐えているエリオットに問いかける。

その言葉に反応して向けられた視線には、屈辱と怒り、そしてちょっぴりの涙が浮かんでいた。

「いま…のが、魔界流の洗礼か。捕虜は、立場を弁えろ、と、いうことだな……！？」

絶え絶えに紡がれる言葉に、ホントにごめんなさいとネヴァンジェリンは思う。

威嚇でも懲罰でもなく、アレは魔族の素の行動です。魔族辞書に『手加減』がないのを忘れていたネヴァンジェリンのミスだ。

「手当を――」

「だが、この程度の痛みで私を屈服できと思うな、魔物め！」

「そんなつもりじゃ」

「いかな責め苦を受けようと、私は最期まで――」

早々言葉の説得をあきらめたネヴァンジェリンは、救急箱を片手に歩み寄った。

立ち上がろうともがく身体をそっと押さえ、頭を膝の上に乗せる。

「触れるな！」

「はいはい、じっとしていてくださいね～」

こうなったら勝手に処置してしまおう。

白を基調とした彼の軍服の留め金を外し、くるりと指を回す。しゅるしゅると包帯が解けていくのを見て、エリオットが固まった。

魔界最弱を自負するネヴァンジェリンだが、魔力がまったくないではない。むしろ魔力値が低いので、こういう小技は得意だ。

ちなみに他の魔族がこれをしようとすると、包帯どころか皮膚まで剥ぐ。魔族はどこまでも全力志向である。

（ああ、またぱっきりいっちゃってる……）

昨日せっかく繋いだ骨が、ネヴァンディーンの一撃でまた折れている。

嘆息してその部位に触れ、目を閉じた。

小さな魔力で微小サイズなホッチキスの針を創り、骨と骨を留めていく。そうして判る範囲の傷を留めて目を開けば、エリオットが

愕然とした表情でこちらを見上げていた。

「いま、何をした……？」

「骨を繋いだだけです」

答えれば、さらなる驚きが彼の表情を彩った。

「馬鹿な……治癒の力か！？　それは神の御子と呼ばれる、かの――」

「いえ、技術と知識です」

端的に答え、ネヴァンジェリンはパタリと上半身を背方向に倒した。

「お腹空いた～……」

くると悲しく腹が鳴く。

魔力を使うには、魔族の生命力たる精気がいる。しかし淫魔的偏食者たるネヴァンジェリンは、常にそれが枯渇気味だ。

つまりは精気（エネルギー）不足。お腹が空いて、もう動けない。

（ああ、そういえば、勇者のご飯も調達しなきゃなんだ……）

空腹のせいだけでなく、頭がくらくらしてきた。魔王様の試練を乗り越える前に、彼の世話だけでギブアップしそう。

「治ったわけじゃないから、動くとイタイですよー。無理すると外れますし」

勇者が身動ぎしたのが分かったが、顔を上げるのさえ億劫だ。そ

のままの体勢でエリオットに忠告する。
膝の上の重さが消えたので、ネヴァンジェリンは足を伸ばした。
床に仰向け状態になる。髪と服が汚れそうだが、いまはそれより身体がだるい。

（あ、クモの巣発見）

ぼーっと見上げる天井に、エリオットの顔が割り込んだ。

「ふみゃっ！？」

突然目の前に美形の顔というのは、小心なネヴァンジェリンの心臓に悪い。
涼やかな目元にエメラルドのような緑の瞳。金の髪とのコントラストが鮮やかだ。秀麗な顔立ちは女性的に見えてもおかしくないところだが、耳から顎にかけてのシャープな線がそれを救っている。

（そんな美形さんがですね、至近距離から見下ろしてくるって、アウトだと思うんですよ！！）

ネヴァンジェリンは心の中で抗議した。
顔の左右に両手をついて、跨られている状態だ。体勢的にもいろいろアウトだ。アウトすぎて奇声から先の声が出ない。

「魔物は皆、お前のような力が使えるのか！？」
「あの、いえ、その、まあ、どうでしょう？」
「どうでしょうではない！　私が訊いているんだ！！」

（その前にどいて～！）

動揺するネヴァンジェリンに気づかず、エリオットは真剣な眼差しで詰め寄ってくる。

近づく顔に泣きそうになりながら、懸命に答えた。

「ほ、他の魔族は、やらせてみないと分からないですけど、やろうと思ったこともないと思います。だって、精気食(ごはん)べて寝れば治るし」

元々頑丈な上に、でたらめな生命力がある。ちぎれた足でも五分ほどくっつけておけば繋がるのに、骨折の繋ぎ方なぞ考えるはずがない。

「ならば何故、お前はそれができる!?」

「えーっとぉ……」

「他の者たちの治療は――」

そこで、エリオットの表情が曇った。

目を伏せて、唇を噛むようにして言葉をしぼりだす。

「私の仲間は――私に付き従っていた騎士たちは、どうなった……？」

腕で身体を支えたまま、指が強く床を掻いた。

ネヴァンジェリンは慌てた。項垂れる髪。瞳を覆う長い睫毛。苦悩に顔を歪める美形というものは、どうしてこんなにも加害者意識を募らせるのか。

「だ、大丈夫です！　生きてます！」

途端、ぱっと表情が明るくなる。

二十代半ばだろうと推測していたが、その表情は常より幼い。前

世の自分より年下かもと思いながら、ネヴァンジェリンは教えてやった。

「魔王城まで来れた人たちも、その前に脱落した人たちも、戦った相手が魔族なら生きてます。捕虜は、勇者と共に処刑するのが魔王様の指示ですから」

狩り自体に参加できない魔王様が、唯一関われるのが処刑だ。ゆえに魔族たちは、できるだけ痛めぬよう人間を捕獲する――魔族の『できるだけ』なので、「両手足折れば動けないよねー」という、生きてりゃいい的なものだが。やはり手加減がない――ことになっている。

「勇者というのは……私のこと、か？」

「あ、そうです。魔王様に挑む無謀な人間代表が、魔界では『勇者』って呼ばれます」

言ってから、とんだ皮肉ではなかろうかと気づいたネヴァンジェリンだ。人間的感覚を持ち続けているつもりだが、微妙に毒されつつあるのかも。気をつけよう。

「……つまり、私が処刑される時、彼らもまた命を奪われるということか」

「わ、私がなんとかしますから！」

エリオットが再び苦悩に沈む直前、ネヴァンジェリンは急いで言った。

「魔王様と約束したんです！　魔王様は、私にあなたを使えって言いました。だから、あなたが協力してくれるなら、わたしが人間（あなたたち）を

守ってみせます！」

あとあと冷静に思い返すなら――

この言い回しがまずかったのだ。

「だから、安心してくださいね」

少しでも彼を宥めようと、ネヴァンジェリンはにっこり笑いかけた。

「私が、お前に協力すれば……？　そうすれば彼らを救う、と？」

「はい！」

しばしの間エリオットは、無言で彼女を見つめていた。やがて目を閉じて、またしばしの間を置き、ゆっくりと目を開く。

その目には、何かの決意が確かに宿っていた。

「……分かった」

ネヴァンジェリンはほっと安堵の息を零した。

途端、変わらない体勢が気になる。早くどいてほしい。

「不浄なる魔物と通じるなど、唾棄すべき行為。しかしいまは、お前に身を委ねるほか、彼らを救う術がない。

私の死が私だけのものならば、迷いなく誇りに殉じよう。しかし、忠義厚き彼らの死と同一であるのなら、私は決して死ぬわけにはいかぬのだ！」

「え？　あの、そのとおりですけど、なんでそこでそんな熱血……？」

イヤな予感がしてきた。
あの説明、勇者には何か間違ったニュアンスで伝わっているのではなかろうか。

「ちょ、ちょっと待――！」
「琥珀の瞳を持つ女淫魔（サキュバス）よ。我が騎士を守るため、私は名誉を捨て、この身をお前に捧げる。
――いくらでも貪り、好きなだけ精気を奪うがいい」

避ける間もなく近づいてくる彼の顔。
そして唇が重なった。

第八話：不埒者への制裁、二回

唇に何かが触れている。
それは自分の手ではなく、慣れた兄の指でもない。
言葉途中で塞がれたため、ネヴァンジェリンの口は半ばまで開いていた。その隙間から、湿った何かが侵入してくる。
口内に入り込んだソレは蛇のような動きで舌に絡み、トロリとした何かをネヴァンジェリンの中に零した。
途端、身体が歓喜に震える。
たった数滴の雫が全身に広がって、細胞の一つ一つを活性化させていく。
これは、そう、ネヴァンジェリンが生まれて初めて味わう――男の精気。
飢えた身体は与えられるままに、ソレを享受しようとした。

（……でも待って）

心がそれに疑問を呈する。
ソレって何さ。
そもそもいま、わたしは何をして――いや、何をされている？
上着の裾から、するりと入り込んでくる無骨な手。
その動き、肌触り、そして魔族（じぶん）よりずっと高い体温……コレは、冗談めかして触れてくる優しい兄（ネヴァンディーン）の手ではない。

（人間の男だ！！）

認識と同時に、ネヴァンジェリンは足を振り上げていた。

「ぐっ！？」

仰向けのまま膝を曲げて繰り出した足は、エリオットの腹にヒットした。
覆いかぶさっていた身体を離し、苦しげに呻いた勇者が、心外だとばかりに睨みつけてくる。
「い、いきなり何をする！　私は取引どおり、お前、に、精気を……」
勢いよく紡がれていた言葉が尻つぼみに消える。
ぎょっと目を見開くエリオットの身体の下で、ネヴァンジェリンはぼとぼとと涙を零していた。
「え……？　な、なんだ！？　お前――」
「お兄様ぁぁあああああっっっ！！！！！！」
そしてネヴァンジェリンは叫んだ。
全力で叫んだ。声が枯れんばかりに叫んだ。
刹那、エリオットの身体が頭を支点にぐるんと回り、入れ替わりに兄のいつもの笑顔があった。
「うん。呼んだ？」
「ネヴァン兄様！」
微笑をたたえた、ネヴァンディーンの優しい声。
両腕を伸ばせば、しなやかな左腕が背から掬いあげるようにして抱き上げてくれる。
「お兄様ぁ～～～！！」

安心したネヴァンジェリンは、兄の首筋に顔を埋めて泣きじゃくった。

（キスされたー！）

生まれてから一度も――生まれる前も――、誰にも許したことがなかったのに。

よく知らない男から、

いきなり、

一方的に、

理由も分からないまま奪われるなんて！

（最低！！）

キッと顔を上げて、ネヴァンジェリンは勇者を睨み据えた。

ネヴァンディーンに頭を鷲掴みされたエリオットは、痛みに悲鳴さえ出ないらしく、どうにか指を外そうと足掻くのに必死だ。その視線に気づかない。

かわりに兄が気づいた。

にっこりネヴァンジェリンに笑いかけ、くすぐったいキスを額に落としてから、笑顔のままで勇者を見下ろす。

「待てもできない駄犬は死ね」

風を切る音がしたと思ったら、勇者の身体が床を滑りながら吹っ飛んでいった。

ぱらぱらと、ネヴァンディーンの右手から、金の髪が数本遅れて落ちる。

この上なく丁寧に、ネヴァンジェリンはベッドの上に座らされた。

ぽかーんと口を開けて見上げる妹の額に、兄はもう一度微笑んでキ

スをして、壁に当たって止まったエリオットに向き直る。

「締りのない下半身は、いっそ失くしちゃったほうがすっきりするよね。ちょんぎって口に突っ込んであげるから、自慰して果てればいいと思うよ。自分の口で口淫なんて、すごく前衛的。勇者の面目躍如だね！」

しゃきーんと輝く尖った爪に、見ていたネヴァンジェリンの血の気が引いた。

（本気だー！）

「お、お兄様、ストップー！！」

「え？」

妹の制止の声に、ネヴァンディーンは足で勇者を仰向けにしながら、不思議そうに振り向いた。

「どうしたのネヴァンジェリン。あ、もしかしてお腹空いた？」

いやいや、いまはそれどころでなく。

ぶんぶん首を振ったネヴァンジェリンは、そういえば動けないほどの空腹が和らいでいるのに気がついた。

むしろ普段の空腹度からいえば、かつてなく満たされているといえる。

（そっか、勇者（あのひと）の唾液から精気を吸収して……）

理由に思い至り、ぼふんと湯気を出しそうなくらい赤面する。

ネヴァンディーンがにっこり微笑んだ。

「そう。じゃあ、処置するから待ってて。すぐ終わらせるから」
「終わらせちゃダメっ！！」

勇者を殺されるのもまずければ、強制去勢も心底困る。どう頼まれたってそんなところ、魔力で繋ぐ気になれないし。
ネヴァンジェリンは勢いよくベッドから降りて、ネヴァンディーンの腕に抱きついた。

「もういいわ、お兄様。他の用事もあるし、行きましょう！」
「そう？　じゃあやめようか」

あっさり妹に従って、兄はエリオットに背を向けた。
冗談めかして恭しく、エスコートの手を差し出し扉を開く。

「どうぞお通りください、お嬢様」

扉をくぐりながら、ネヴァンジェリンは束の間エリオットを振り返った。
彼はあばらを押さえながら、床でもがいている。繋げた骨含め、また肋骨が数本折れただろうし、足や腕もどうなっているか分からない。
しかし、さすがにいまは、優しく手当てしてやるつもりにはなれなかった。

（救急箱の中に包帯も痛み止めもあるし、固定して薬飲んだら大丈夫よね。それくらい自分でできるはずよ）

ネヴァンジェリンは己にそう言い聞かせ、部屋を後にした。

勇者を閉じ込めた尖塔は、最上階にのみ部屋が存在する。扇形の二つの部屋は、長方形の狭い廊下に仕切られていて、梯子を登れば屋根の上に、壁から突き出た螺旋状の石柱を降りていけば、地上にたどり着く。

石柱の階段には手すりはおろか柵さえなく、踏み出せば段の隙間から、遠く一階の石床が覗けるスリリングな造りだ。空を飛べる今世だからともかく、前世なら絶対に使わなかっただろう。

ネヴァンジェリンは羽根を使わず、階段で降りることにした。石柱を踏みつけるようにして、憤然と螺旋を辿っていく。くるくる景色が回るたび、くるくる思考も同じように回った。

（エリオット王子のバカ！　勇者なんてキライ！）

ぷんぷんネヴァンジェリンは怒る。

彼らを助けようと頑張っているのに、いきなり痴漢行為とは何ごとだ！　キスもショックだが、正直裏切られた心境だ。何故に勇者に性的な意味で襲われねばならんのか。

（初めてだったのに！　ひどいよ！　いくらわたしが淫魔だからって――）

――淫魔。

ネヴァンジェリンは足を止め、うな垂れた。

（……やっぱり、わたしが女淫魔（サキュバス）だからなのかな）

女淫魔といえば、男の精気を奪う魔族なわけで。そして奪い方は、例のアレ的行為なわけで。

ふつうに考えるなら、女淫魔的にはウェルカムな状況だっただろう。むしろ「うむ、愛い奴」と好感度大アップ。

（だとすると、もしかしてアレは彼なりの友好表現――ううん、ちょっと待て、セリフ的にもっと重そうな感じが）

その前に交わした会話を思い出す。

ネヴァンジェリンではなく、一般的な淫魔に置き換えて、あのやり取りを再現してみれば――

「魔王様は、私にあなたを使えって言いました」→魔王がうっふんな食事のエサとしてくれた

「あなたが協力してくれるなら、わたしが人間（あなたたち）を守ってみせます」→おとなしくエサになるなら仲間を助けてやってもいい

「～～～～～っ！」

声にならない声でうなって、ネヴァンジェリンはその場にしゃがみ込んだ。

痛恨のミスを理解する。言葉選びを間違ったー！

（あーもう！　なんで誤解されるようなこと言っちゃったの～！）

相手がどう受け取るかを意識して、正確に話すべきだったのだ。

たとえネヴァンジェリンの価値観が渡辺凛（にんげん）のままだったとしても、そんなこと人間（かれ）に分かるはずもない。

ネヴァンジェリンはいまは人間ではなく、魔物なのだから。

「……どうしてわたし、魔族なんかに生まれちゃったんだろ」

両腕に顔を伏せたまま、思わずそう呟きを零す。

淫魔になど生まれなければ、そんな誤解を受けることもなく、魔界で苦労することもなかった。

嘆くネヴァンジェリンだったが、その身体がひょいと抱き上げられる。

「あ……」

ネヴァンディーンの顔が目の前にあった。

同じ高さで向き合うそれに、ネヴァンジェリンはたじろいだ。先の言葉は魔族(いま)の自分だけでなく、兄のことさえ否定する言葉だ。いつも側にいて、こんなに守ってもらっているのに――

「僕に出会うためだよ」

ネヴァンディーンは怒った様子もなく、あっさりと言い切った。

「君は僕の双子で、僕だけの妹。

ネヴァンは僕に会うために、魔族に生まれてきたんだよ」

それだけだよと笑って、兄は妹の額にキスをした。

責める言葉は一切なく、失望も怒りも、不快感さえそこにはない。

「……ネヴァン兄様、ごめんなさい」

「ん？　何かイケナイことしたの？」

首を傾げて訊いてくる兄は、とぼけているのか素なのか分からない。

勇者(エリオット)のことにしてもそうだ。怒っているように見えたのに、あっさり放り出してくる。

「お兄様って……」
「うん？」
いつだって変わらない兄の笑顔に、ネヴァンジェリンは肩の力が抜けた。
目の前の頭を、ぎゅーっと抱きしめて言う。
「お兄様、大好き！！」
「知ってるよ」
互いの額をくっつけて、双子は笑った。
「よしっ！」
ぴょんと飛び降りるようにして、ネヴァンジェリンは兄の腕から抜け出した。
生まれを悔やんでも仕方ない。淫魔だろうが何だろうが、ネヴァンジェリンはネヴァンジェリンだ。他の者になれない以上、いまの自分に妥協してやっていくしかない。
（今度はちゃんと勇者――エリオット王子と話そう）
ネヴァンジェリンの価値観も踏まえて、助けたいという意思を伝えよう。
種族的な誤解が避けられないならば、その分言葉で説明すればいいのだ。
何だってきっと、それだけのことなのだ。
水面の浮石を踏むかのような足取りで、決意も新たにネヴァンジェリンは階段を下りていく。

「ネヴァンジェリン」
「なぁに？　お兄様」
背後から呼ばれて、ネヴァンジェリンは笑顔で振り返った。
――ちゅっ。
唇が軽いリップ音を立てる。
離れていくソレを呆然と眺めるネヴァンジェリンに、ネヴァンディーンはにっこりと笑って言った。
「はい、消毒」
何をされたか理解して、ネヴァンジェリンはぷるぷる震えた。
いますごく感動してたのに！
「お兄様の、ばぁかぁあああああっっっ！！！！！！！」
両手を突き出す。
目の前の不埒者が、笑顔のまま階段の外へと落ちていった。

第九話：不注意が招くは、危険な狼（前書き）

気持ちのよくない描写があります。
犬好きさんは特に気をつけてください。

第九話：不注意が招くは、危険な狼

男は狼なのよ～気をつけなさい～
昔そんなフレーズの歌があったそうだけど、メロディライン知らないや。
でも意味はよくわかった！！

「お兄様は今日一日、わたしに近づくの禁止！」

尖塔で正座してなさいとネヴァンジェリンが言えば、ネヴァンディーンは目を見開いてよろめいた。

「そんな……ひどいよ、ネヴァンジェリン。君はもう、僕を愛していないのかい！？」

青褪めた顔色も、慄く唇も、彼の顔に浮かべば色気に変わる。
はらりと額にかかる黒髪さえ計算つくしたかのように美しく、凄絶な悲哀を表現していた。
いっそわざとらしいほどに。

「最愛の人に見捨てられるなんてっ……！　ああ、神は死んだ！」
「ウソ泣きしても赦しません！　ってか魔族が神とか言わないのっ！」

ぷくっと頬を膨らませ、上目遣いに睨みつける。
「はーい」と答えたネヴァンディーンは、むしろ嬉しそうにその場で正座した。
光の差さない尖塔の一階。冷えきった石畳。夜目が利くので不自由はないが、その扱いは罰に相応しいだろう。

「いわゆる放置プレイだね。なかなかマニアックなプレイが好きだったんだね、ネヴァンジェリン。今度から選択肢に加えておくよ」
「なんの選択肢！？」

――それくらいで堪える兄ではないわけだが。
ネヴァンジェリンはがっくりうな垂れた。
大切に守ってきた唇が、ファースト・セカンド共に一瞬でパアだ。前世二十一年、今世三年。合わせて二十四年分のロマンを奪った罪は重い。勇者は兄に成敗されたが、この兄はどうすりゃいいんだか。
とりあえず、

「……明日からしばらく、スカートやめてズボンにします」
「ごめんネヴァンジェリン。僕が悪かった。心から反省した。いい子で『待て』してるから赦して。せめて半ズボンにニーソックスで！」
「本気で反省しろ、ロリコンめーーーっっっ！！」

傘で頭を力いっぱい叩いてから、ネヴァンジェリンは一人尖塔を後にした。

（まったくもう、お兄様ってば！）

ネヴァンジェリンは憤然と、畳んだままのレース傘を振り回して廊下を歩いていた。
向かうは囚われの騎士たちの下だが、気が治まらなくて困る。
勇者といい兄といい、かたや淫魔だと思って、かたや淫魔だからって、なんてことしてくれるんですか！

特に兄は赦しがたい。
あれだけセクハラを繰り返しながらも、いつもネヴァンジェリンが本気で嫌がることはしない。今回のキスだってそうだ。勇者にされて泣いたあと、気分的に浮上してきた直後を狙ってきた。
お兄様なら赦せるかな、と、思ってしまいそうな瞬間(とき)を。

（油断も隙もない！！）

あれぞ正しき淫魔の所業。心の隙をつくのが上手すぎる。注意一秒、怪我一生。いまは距離を置くべきだ。これぞ正しき被食者の保身。壁や床に八つ当たりして、心の平穏を取り戻すのだ！
ぶんと傘を振り下ろす。
ぺちり。
石とは違う柔らかい手ごたえと共に、傘が止まった。

「……あれ？」

叩いた先を見てみる。
そこに、ふかふかの毛皮があった。長い鼻に大きな口。口からのぞく鋭い牙。ぴくぴく動く獣耳の間に、振り下ろした傘がちょーんと鎮座している。

（狼だーーーっっっ！！！！）

男は狼なのよ～気をつけなさい～。
黒い鎧と自前の毛皮を纏った人狼族がそこにいた。

「ご、ごめんなさい～！　だ、誰かがいらっしゃるとは思わなくてっ……！」

慌てて傘を引っ込める。
魔王城は人気が少ないとはいえ、無人というわけではない。それを失念して傘を振り回し、狼さんを叩いてしまうとは。
ギロリと鋭い蒼い瞳が、ネヴァンジェリンを見下ろしてくる。

（ネヴァン兄様～！）

ネヴァンジェリンは兄を置いてきてしまったのを後悔した。貞操と命、優先すべきはどちらだったのだろうか。……いや、これも全部ネヴァンディーンが悪い。食べられちゃったら兄様のせいだ！
おそるおそる上目遣いで相手の表情を窺えば、腹の底に響く低音が落ちてきた。

「……よい夜だな」

思わず窓の外を見る。
立ち込める瘴気に降り続ける生暖かい雨。「どこがですか？」と聞き返したいのをぐっと堪え、曖昧に笑う。本気ですか？　それとも、傘で叩かれたことに対する嫌味ですか？
黒と白の毛皮の狼男は、それだけ言って黙っている。怒っているのかいないのか、狼の顔では判別できない。腕はネヴァンジェリンの腰くらい太く、お返しとばかりに小突かれれば頭が吹っ飛びそうだ。謝罪はしたし、できれば穏便かつ即急にこの場を去りたいのだが。

（何か言ってよ～）

魔族は陽気でお喋りな者が多いのに、ネヴァンジェリンを前にすると、だいたいがこうして黙り込む。たまに話しかけられれば、やれ弱いんだからお守りをしてやろうかとか、兄の後ろから出てもっ

とこっちへ来いとか、嫌味なことを言う者ばかり。それだけ嫌われているのだと認識しているが、実力行使だけはご遠慮願いたい。ケンカを売るなら兄がいるとき限定でお願いします。

（何も言わないなら、もう行っていいかな……？）

目を合わせたまま、こそーっと後退る。逃げると獣は追ってくる。バレないように、慎重に。

「あ、あの、わたし、忙しいので、これで……本当にごめんなさいでした！」

距離をとってから、再度謝罪だけ告げて走り去った。

不自然なくらい足音が響く廊下をけたたましく駆け抜けて、枝が複雑に絡み合う、灰色の裏庭に出る。

柳と松の木が混合したような、気合入ってるんだかないんだか分からない木々のアーチをくぐり抜け、ネヴァンジェリンはようやく足を止めた。

「あー、怖かっ……た！？」

しゅるりと何かが足首に巻きついた。

目をやれば、ミミズを思わせる肉色の触手が足に絡み付いている。ぐいっと勢いよく引かれ、ネヴァンジェリンは尻餅をついた。

「やん！」

両手が泥水に浸かる。じわりと下着にまで滲み込む不快感に、思わず顔を顰めてから顔を上げると、目と鼻の先に狼の鼻があった。大きく開かれたピンクの口から、黄色がかった涎が零れ落ちる。

「ひぅっ……！」

先ほどの人狼ではない。見た目は熊サイズのシベリアンハスキー。直立歩行していた人狼と違い、四足を地につけている。けれどその目は血のように赤く、尻尾の代わりに何本もの触手が生えていた。

（怪物（モンスター）っ！）

ネヴァンジェリンは青褪め息を呑んだ。

同じ魔界の生物だが、目の前の生き物と魔族では種が異なる。意思疎通がかなわない。何より彼ら――もしかしたら彼女かもしれないが――は、弱い魔族をも食らう。

弱い魔族＝ネヴァンジェリン。

（は、反撃しないと！）

ちなみにネヴァンジェリン、マッチ一本分の炎を出すのに三分かかる。最弱自負は伊達ではない。

もたもたしている間に、足首の触手は腿にまで絡み付いていた。長い爪の生えた大きな手が肩に食い込む。ぐぱりと大きく裂けた口が、ネヴァンジェリンに迫った。

「お、おにぃやぁあああああっっっ！？」

兄を呼ぼうとした声は、途中悲鳴に切り替わった。

目の前で、狼の頭が口から真っ二つになったのだ。

斬り飛ばされた上半分の頭が、木に当たってべしゃりと泥に浸かる。視線で追ったネヴァンジェリンの琥珀の目と、光を失くした赤い目が虚ろに絡み合った。

「……無事か？」

そして尋ねてくる重低音。

のろのろと顔を上げれば、先ほど叩いてしまった人狼がいた。腕には血のついた大きな斧が抱えられていて、それが怪物の頭を斬り飛ばしたのだと理解する。

そびえ立つ人狼と、頭半分を失くした狼型の怪物。残った口から下が、ぐらりと揺れて覆いかぶさってくる直前、人狼はそれを無造作に掴んで、頭のほうへと放り捨てた。

ぐしゃりと、シベリアンハスキーに似た見た目を持つ生き物が、血と臓物を巻き散らかして潰れる。

――人狼は、助けてくれたのだ。

頭ではそれを理解している。しかし、ネヴァンジェリンは恐怖を抑え切れなかった。

「うあぁぁあん！　こ～わ～いぃぃぃいいいっっっ！！！！！！」

なので、ようやく生み出せたマッチ一本分の炎を、咄嗟に人狼に向かって投げつけた。

じゅぅと眉間が音を立て、小さな煙がぽわんと立つ。

そこでハッと我に返って、ネヴァンジェリンは人狼の表情を窺った。

全身の毛が逆立ち、蒼い目が大きく見開かれている――

うん。今度こそ喰われるかも。

閑話：ネヴァン兄様の妹愛日記　～その1～

某月某日、男淫魔（インキュバス）として魔界に生まれました。
――うん。じゃあ、食事に行っていいかな？

正直いま生まれたんだと知っても、特別な感慨はなかったし。
こちらを窺う魔族たちにも興味はない。唯一魔王様は別だけど、だからってへりくだってもねぇ。
生まれたばかりで何も持たない僕が、魔王様に何かを差し出せるわけじゃなし。命令があれば従うけど、僕には何ができるんだろうね？
魔力の使い方も力量の高も理解はしているけどさ、魔王様のほうがぜんぜん強いじゃない。役に立つも何も、あの人が動けば全部終わっちゃうよ。取り巻きの魔族はいったい、何ができるつもりでお側にいるんだろう。
まあ、もしかしたら戦闘以外の特殊技能があるのかもね。
でも淫魔の特殊技能は性技くらいだから、同性の魔王様にはきっと受けないな。女王様なら頑張ってみたかもしれないけど。
とにかく僕は、ここに留まる意味を見出せなくて、早く魔王様どっか行かないかな～と待っていた。先に立ち去るのは失礼だって、それくらいは思うし。

ところで、僕は双子として生まれたらしい。
双子は珍しいと魔王様が仰った。
そりゃそうだよねぇ。魔族は魔界の瘴気が一定量の魔力を帯びた時に生まれる。魔力が自然に溜まるなんて、そうあることじゃない。ましてやそれが魔族二人分だなんて滅多にないよ。
滅多にないけど――うん、だから？
興味はなかった。

むしろ、ちょっと不快。同じ素材ってことは、もう一人僕がいるってこと？

嫌だな。殺しちゃおっかな。

すぐ隣に座っている、僕の双子を観察する。

その娘は少女に見えた。

うん、少女だ。女には見えない。女淫魔のはずなのに、おかしなことだ。

つぶらな瞳にまろやかな頬を持つ幼い顔立ち。肌理細やかな雪の肌を、黒い巻き毛が覆っている。背に生えた羽根は小さくて、怯えた獣の耳のように垂れ下がってる。角さえへにょりと曲がって見えた。

……ねえ、僕って傍目にこんな感じなの？

双子なんだから、見た目はやっぱり似てるのかなと思って、ちょっと焦った。僕の肌は褐色だけどさ。でも素材が同じなら似てるよねぇ。こんな幼い容姿でどうやって女を誘惑しろって言うの？　そういう趣味のお姉さん限定で食べろってこと？　えー？　まあいいけど。

容姿は幼いけど造りはいいし。岩場に投げ出された華奢な手足はいかにも傷つきやすそうで、嗜虐心が沸いた。漆黒の巻き毛の合間から覗く、細い肩に丸い膨らみ。あれに顔を埋めて噛み付いたら、綺麗な痕が残りそうだ。

うん。せっかくだから、殺す前に楽しもうかな。やっぱり不快だったら、すぐ殺せばいいし。

そんな僕の考えに気づかずに、少女の姿をしたおかしな淫魔は、のんきに魔王様に挨拶してる。

「よい夜ですね」って……、ねえ本気？

僕たちの原料になった瘴気だけどさ、これって結構肌に痛いよね。ピリピリするんだけど。雨は重くて鬱陶しいし、その上妙に生暖かいし。こんな天気が「よい」の？　感性おかしくない？

双子だっていうけど、この娘と僕ってあまり似てないのかも……。

僕を見たと思ったら、目を見開いて後退って、そのあと固まって悲鳴上げるし。
すごい声だったよ。
死ぬ時以外であんな声をあげる魔族、他にいるのかな？
僕も魔王様も他の魔族も、ちょっと驚いちゃってさ。
しかもそのあと「何か着る物ください～！」って、魔王様に言うんだよ？
みんな唖然としたよ。
魔王様から物を貰おうなんて、君いったい何様さ。ご褒美もらえるようなこと、してないでしょう？
意外すぎて面白かったのか、魔王様は影から布を二枚取り出された。
一枚は彼女に、もう一枚は僕に。おこぼれありがとうございます。
ぐるぐる身体に布を巻きつけた少女は、不安そうに辺りを見回している。
追い詰められたウサギって感じ？　それとも狼に囲まれた子羊かな。ホント嗜虐心そそるね、この娘。早く啼かせたくて、うずうずしてきた。アソコも心も壊れるまで、念入りに可愛がってあげよう。

魔王様が去った後、同じようなことを考えた魔族が何人か残っていたけれど、にっこり笑って退散させた。
魔力を放出すれば、自分と相手の力量差が分かる。どうやら僕は結構強いらしい。
それなのに、僕の双子だっていうこの娘、めちゃめちゃ弱いよ。
本当に魔族かと疑った。これじゃ僕が何もしなくても死ぬね。遠慮の必要はなさそうだ。まあ、元々するつもりなかったけど。
目線を合わせるため跪き、いまから啼かせるよ～と不穏に笑いかける。
少女はおどおどと、窺うように僕の顔を見上げてきた。
琥珀の瞳に涙が滲んでる。

……おかしいな。淫魔って食べる側だよね？　食べられる側の要素しかないよ、君。餌には困らなさそうだけど、淫魔としてそれでいいの？

まるで僕に食われるためだけに、生まれてきたような娘だと思った。

瑞々しいピンクの唇が、そっと小さく開かれる。

「おにいさま」

……。

……僕か。僕のことか！

びっくりして目を見開けば、少女の瞳が戸惑うように揺れた。

「あ、あの、お兄様って呼んじゃ、ダメ、ですか？　なんて呼んだら――」

「ネヴァンディーン」

魔族は生まれながらに、自分の名前を持っている。

名乗り、けれどすぐに付け足した。

「でもお兄様でいいよ。君は？」

「ネヴァンジェリン……」

自分の名前さえ、自信なさげに紡ぐ。

なんなの、この娘。

本当になんなの？

思わず凝視していたら、少女――ネヴァンジェリンが、どこか必死の様子で言ってきた。

「あの、わたし、弱いんです！」

うん、知ってる。

「たぶん他の魔族とちょっと違うし……」

違うねぇ。

「一人じゃ魔界で生きられないと思うんです！」

ふつうに考えて、死ぬよね。確実に。

「だから……」

小さな手のひらが、ぎゅっと僕の腕を握った。

尖った耳と羽根を横に倒しながら、大きな瞳でうるうると見上げてくる。

「お願いです、お兄様～！　わたしと一緒にいてくださいぃ～！　置いていかないで、ネヴァンディーン！！」

……咄嗟に返事が出なかったのは、僕のアドリブ力が不足していたわけじゃないと思う。

だってさ。

だってね？

そりゃあ僕はこの娘の双子の兄だけど、同じ瘴気から生まれた存在だけど、それだけでしょう？

なんで一緒にいなきゃいけないの？

いて、それで僕のメリットは何？

しかも何かあったら守れって言うんでしょ？　得するの君だけじゃないか。

そもそもにして僕は、君を犯して殺そうと――

「……ダメ？」

涙目で首を傾げるネヴァンジェリン。

うん。

「大歓迎」

僕はそう断言していた。

途端、ほっと表情を和らげて笑う。

なんなの、これ。

なんなのこの可愛い生き物！！

抱きしめたくてウズウズしたけれど、警戒されると嫌だから、そっと頭を撫でてみた。

一瞬身を強張らせて、けれどすぐに力を抜いて、ネヴァンジェリンは無防備にその身を委ねてくる。

この警戒心のなさはなんだろう。

弱いのに。

僕がその気になったら、君なんて一瞬で殺せるんだよ？

ネヴァンジェリンの甘えた口調は、保身からくる媚だけど、同時に信じているようでもあった。きっと自分を守ってくれる、そういう思いが透けて見える。

僕が兄だから。たった一人の双子の兄だから。

僕にはなんの意味もないことを、この娘は支えにして縋っている。

……変なの。

君は僕がいないと生きられないけど、僕は一人で生きていけるのに。

でも――

この娘を殺すのは誰でもできるけど、生かせるのはいまは、僕だ

けなんだと思った。

「ネヴァンディーンお兄様、ありがとう……」

ネヴァンジェリンが上目遣いに礼を言う。

照れたように。どこか申し訳なさそうに。

都合のいいことを言ってるって、たぶんこの娘は分かってる。分かっていても、いまは僕しか頼れない。だから気づかないフリをしてる。

弱くてなんて強かな、なんて可愛い僕の妹！

「気にしなくていいよ、ネヴァンジェリン」

だから、僕も気づかないフリで、赦しの言葉を口にした。

「僕は君の兄だから、いくらでも頼っていいんだよ」

僕には理由にならない理由を挙げて、甘やかすようにこめかみにキスをして。

途端、ぽっと頬に朱が差して、ネヴァンジェリンは身を引いた。

僕が口付けた場所を押さえながら、ぱくぱく口を開閉している。

ねえ君、本当に淫魔だよね？

――なんだかね。

なんだか、この娘を見ていると、面白くなってきて。

弱いし何ができるわけでもない。

僕が生きる役には立たない。

でも、とびきり可愛くて、すべてが僕と違っていて。

見ていると、胸の内に暖かい何かが広がっていく気がした。

くすぐったいような、ぎゅーってしたくなるような、そんな不思

議な充足感。僕に全てを委ねてくる、力ない無防備な存在。
この娘と生きるのも悪くないって、そう思った。

「一緒にいようか、ネヴァンジェリン」

未だ赤い顔をしたままの、可愛い妹に語りかける。
僕は一人でも生きていけるけど、

「君と一緒にいたほうが、色んなものを感じて生きていける気がするよ」

第十話：不可解な謝罪、とそのオチ

ある日森の中で熊ならぬ熊サイズの狼さんに出会い、その少し前に傘でぶっ叩いた狼さんに助けてもらいましたが、驚いて火を投げつけてしまいました。
以上、あらすじ。

（どんだけ失礼なことを！！）

ネヴァンジェリンは冷や汗が止まらなかった。
狼の表情は見てもよく分からないが、ふつうで考えて大激怒だろう。毛が逆立っているのは殺気立っている証明で、見開いた目は逃がすまいとの凝視に違いない。
怪物に襲われたときと同じくらいにリアルな生命の危機を感じたが、幸い相手は人狼族だ。つまりは魔族で、意思疎通は適うはず。

（こ、ここは元日本人として、潔く土下座で涙の謝罪を！！）

泥の中に座り込んだまま居住まいを正す。

（……赦してくれなかったら、飛んで逃げよう）

礼儀よりも保身が大事です。こっそり羽根を広げつつ、ネヴァンジェリンは口を開いた。

「あのっ！」
「すまなかった……」

ネヴァンジェリンの言葉を重低音の声が遮った。

「ふえっ？」
「……怖がらせて、悪かった」
天を向いていた耳が垂れ、ふさふさの尻尾がしゅーんと下がる。
逆立っていた毛皮も雨に濡れ、ぺたりと身に張り付いた。
二メートルを超える狼が、全身で反省を表している！
その姿はまさに、雨に濡れた子犬の風情――は、さすがに無理があるが、悲しそうには見える。
ぽかんと口を開けたネヴァンジェリンに背を向けて、人狼は肩を落としたまま、とぼとぼ去っていこうとした。
（え、なんで！？）
背中に哀愁。
どう考えてもネヴァンジェリンが悪いのに、何故彼が謝って落ち込むのか。
「ちょっ、ちょっと待ってください！」
慌てて立ち上がり、両手で彼の腕を掴む。
手が汚れていたと気づいたときには、黒い毛皮にべったり泥がついていた。
「あ、あああああ～！　ごめんさいぃ～！！」
慌てて袖で泥を拭った。なんかもう泣きそうだ。
（何やってるの、わたし～！）

通りすがりに叩いて逃げて、助けてもらったら火を投げて。おまけに服――もとい毛皮――まで汚す始末。いくらなんでも最悪すぎる。礼儀なんてあったものじゃない。

さすがに落ち込んだネヴァンジェリンは、しゅんとうな垂れ、もう一度謝った。

「本当にごめんなさい……」

逃げずにちゃんと怒られようと、心を決める。

食べられるのは困るけど、元々怪物に食われるところだったわけだし。一齧りくらい――うん、やっぱやだ。穏便にお願いします。

おそるおそる顔を上げると、狼が口を開けて凄んでいた。

（ぎゃー！　やっぱ怒ってたー！！）

「なんでもするから食べないで～！」

「は！？　食べない、俺はお前を食べたりしないぞ！？」

「うあぁぁん！　おにーさまー！！」

「泣かないでくれ！　俺が悪かった！　全部俺が悪かったから！！」

ぺたんとその場に座り込んで、ネヴァンジェリンは泣きじゃくる。

人狼が慌てたように何やら言ったが、いかんせん顔が怖すぎた。

来ないで来ないでと石を投げ、近くに落としていた傘を拾って、ぺしぺしと頭を叩く。

我に返ったときには、二人ともどん底に落ち込んでいた。

「……ごめんなさい」

「……いや、俺の顔が怖いのが悪いんだ」

はぁと揃ってため息を吐く。

人狼はネヴァンジェリンを怯えさせないために、伏せの状態で木陰から鼻だけを覗かせている。そうして見ればただの犬で、幾分恐ろしさも和らいだ。

（でも、やっぱり狼は怖いよぅ）

怪物を倒した豪腕と容赦のなさを見ているだけに、どうしても恐怖心が先に立つ。

元よりネヴァンディーンを間に置かず、魔族と対するなどそうそうない。機嫌を損ねれば――いや、損ねなくても遊びで殺されてしまうんじゃなかろうかと、警戒してしまうのだ。命の恩人に対してとる態度ではないと、よぉく分かってはいるのだが。

「あのっ、本当にほんっとーに、ありがとうございました！」

せめてお礼の気持ちだけでも伝えようと、両手を組んで必死に告げる。

狼の鼻がピクピク動いた。

「俺は役に立ったか？　余計な世話ではなかったか？」

「余計な世話だなんて！　あなたがいなければ、怪物に食べられちゃうところでした。心から感謝です！」

木陰の中で、何やらぱさぱさと揺れる音がする。

どうやら尻尾を振っているらしい。……ちょっと可愛く思えてきた。

「そうか。ならばいい」

何やら満足そうな彼に、ネヴァンジェリンは首を傾げた。

「あの～、どうして助けてくれたんですか？」

ふつうに考えて、魔族である人狼があんなに失礼なことをしたネヴァンジェリンを助けるなどあり得ない。追いかけて仕返しをすることはあっても。

尻尾が動く音が止まり、人狼は躊躇うような口調で尋ねてきた。

「俺を、憶えていないのか？」

「先ほど廊下で、傘で叩いちゃった狼さんです」

「いや、まあ、そうなんだが……」

それ以前に人狼と話した覚えはない。

話した覚えはないが――ふと、その姿が記憶を掠めた気がした。

確かにどこかで会った気がする。それもあまり、よくない記憶として。

「俺は以前、お前に怪我をさせたことがある」

ネヴァンジェリンは心持ち身を引いた。

焦ったように狼が告げる。

「わ、悪気はなかった！　呼び止めようと腕を掴んだだけだ！　そうしたら――」

「あーっ！」

ネヴァンジェリンは人狼を指差した。思い出した！

「前にわたしの腕を折った駄犬ー！」

叫んでから、慌てて口を閉じる。
駄犬呼ばわりされた狼は怒らず、むしろしょんぼりと謝ってきた。

「悪かった……」

あれは、転生して一年くらい――勇者の処刑を見る前のことだ。
その頃は、魔族を見てもあまり怖いとは思わなかった。
人間を殺す姿を見ていないのもあったし、それ以上に、まだ実感が沸かなくて、「リアルコスプレ集団」と流せていたからだ。だから魔族たちの集まりにも、それなりに顔を出していた。
もちろん顔を出していたとはいっても、自分から話しかけるようなことはない。兄の後ろに隠れて、せいぜい相槌を打つくらいだ。
それさえできなくなったのは――
人狼に腕を折られ、そのすぐ後に勇者の処刑を目の当たりにしたから。

「あの時のことが、ずっと気にかかっていた。謝罪をと思ったが、怖がらせるから近寄るなと言われて……」

言ったのはおそらくネヴァンディーンだろう。腕ぽっきり事件の後、彼は前にも増して過保護になって、他魔族を近寄らせようとしなかった。実際ネヴァンジェリンも拒否反応が酷く、謝罪をと言われても受け入れられなかったはずだ。

「以後姿を見せぬよう気をつけていたのだが、廊下で会った時、お前の隣にネヴァンディーンの匂いがしなかった。ここには飢えた怪物が多くいる。他魔族ならともかく、お前には危険だ」
「だから……ついてきてくれたんですか？」

決して叩かれた復讐のためでなく。

ネヴァンジェリンは感動した。よもや魔族の中に、こんな常識人がいようとは！

「人狼って律儀なんですね」

「我が一族は誇りを重んじる。腕を折られれば首をねじ切れ、それが道理だ」

斜めに逸れた返答がきたが、やられた場合は倍返し、ということだろうか。

（やっちゃった場合も謝罪は二倍？）

「さすがに首は差し出せないが、腕一本ぐらいなら謝罪としてねじ切ろう」

「いりません！」

やはり魔族だ。誠意が人間（ひと）の感性からホームランしている。

即座に辞退すれば、人狼は低くうなり声をあげた。怒らせたかと思い青褪めたが、どうやら悩んでいるらしい。

「では、思い切って足を――」

「思い切るとこ間違ってませんか！？」

「ならば目、牙……耳、尻尾」

「だからっ、そんな血生臭いのはいらないんですってばー！」

耳と尻尾はちょっと可愛く聞こえたが、実物を切り取られて渡されたら泣く。絶対に泣く。

うなっていた狼はふと、思い出したように鼻先を上げた。

「そういえば、淫魔は肉など食わないのだったな」

ネヴァンジェリンは頬を引き攣らせた。ニュアンス的には『けじめの指詰め』だと思っていたのだが、『食べ物としての肉提供』だったのか。ますますいらん。

「ならば精気をと言いたいところだが……むぅ」

うん、イヤな予感。

きょときょと周囲の地面を見渡す。

近くに手頃な大きさの岩発見。よいしょと膝に抱え上げておく。

「俺は力加減が得意ではない。お前は小さすぎて、抱き潰してしまいそうだ。我ら獣型の魔族は、筋力と精力には自信があるのだが。
――そうか。お前に任せればいいのか。俺はおとなしくしているので、好きにしてくれて構わないぞ」

なーにーをしろって言うのかなー？

ネヴァンジェリンはにっこり微笑んだ。

（どいつもこいつも淫魔だと思って、そーいうネタばっかり振ってきやがりますけどねぇ！）

こちとら処女だ、文句あるか！！

ぷるぷる震える腕で、どうにか岩を頭上まで持ち上げて――投げる。

「きゃいん」と犬の悲鳴が上がった。

――好きにしましたけど、何か？

第十一話：不平等解消の道は遠い、とても

自他共に認めて、ネヴァンジェリンは弱い。
気丈でもないし、すぐに泣くし、あまり頭もよくないし、平静さも保てない。全力で兄に頼り切り、お情けで生かしてもらっているような存在だ。基本的に臆病で、彼がいなければ魔族と視線を合わせることさえ躊躇する。
……いつもは。

「な、何をする！」

たんこぶを作った怒れる狼が、勢いよく木陰から立ち上がる。
ネヴァンジェリンは地面を指差した。

「お座り！！」

反射的に膝を折る犬――もとい、狼。
すかさず地面を手のひらで叩き、ネヴァンジェリンは据わった目つきで言った。

「――これから誠意のお話をします」

弱虫（ネヴァンジェリン）だって、怒るときは怒るのである。

曰く、魔族はモラルとデリカシーに欠けている。
別に慎み深くあれとは言わない。合意の上で、人目のない場所であるのなら、何をしても結構だ。告白するもよし、キスするもよし、

それ以上の行為も――まあ、うん、いいんじゃないでしょうか、合意の上なら。

「でもですねぇ！　そーいうのは隠れてやるものだと思うんですよ、わたしは！　実際の行為だけじゃないですよ！？　そーいうニュアンスを含む言動すべてです！」

正座で膝を付き合わせ、ばしばし地面を叩きながら説教すること一時間。

人狼は膝をもじもじさせながら、できるだけ小さくなるよう背を丸め、相槌を繰り返す。

「そもそもにして性交渉は、愛の末にあるべき行為なんです！　分かりますか！？　愛！　愛です！」

「……はい」

「相手と想いが通じ合い、かつ、相手に対し責任が取れる上での行為なんです！　礼だの謝罪だの取引だの、そーいうんでするんじゃないんです！！」

「……はい」

「ましてや興味本位や快楽のためだなんて、もっての外です！　最近の日本といい、魔界といい、ただれ過ぎなんですよ！　避妊もしないとかバカじゃないんですか。病気移されたいんですか。少子化への挑戦のつもりですか。子供一人育てるのに、いったいいくらかかると思ってるんですか。そんな甘い考えだから、離婚も可哀想な子も口ばかりの政治家も減らないんですよ！」

ネヴァンジェリンは立ち上がり、ぶんと拳を振り回した。

「まずは妻子を養えるだけ稼げ！　子育てへの参加は最低義務だ！　ちっとは頭使って、だらしない下半身を律しなさいっ！！」

「はいっ！」

人狼は反射的に相槌を返し――

「……はい？」

首を傾げた。

魔族同士の交わりで子が生まれることはないから、まあ、最後の説教は不要だったかもしれない。

コホンと一つ咳をして、ネヴァンジェリンは地面に座り直した。

「それにですね、わたしが淫魔だからって、そういう行為を無条件に望むという決め付けはやめてもらいたいんです。

はっきり言って不快です。セクハラです。ついでにパワハラで差別です！

種族一つでその人を決めつけるなんて、とっても失礼なことだと思いませんか？」

「あー、いや、しかし、精気はお前にとっての主食だろう？　ならば――」

「どこの世界にも偏食家はいるんですよ！　なんです！　もう一回お説教を最初から聞きたいんですか！？」

「わ、分かった！　もう充分だ！」

「では改めて、正式に謝罪を要求します」

慌ててこくこく頷く狼に、ネヴァンジェリンは続けた。

「ごめんなさいしなさいっ！」

人狼はしばし、ぽけっとした顔で沈黙していた。

ジロリと上目遣いに睨みつけると、ようやく謝り頭を下げる。

「ご、ごめんなさい……」

ネヴァンジェリンはにっこり笑った。

「よろしい！　いい子いい子～」

下がった頭を両手で撫で回す。

気分は完全に犬扱いだ。硬直しておとなしくなった狼に気をよくし、ネヴァンジェリンは鼻先にキスしてやった。

途端、人狼は目を見開いて盛大に後退る。

「なっ！？　な何を――！」

「わたしも傘で叩いたり、石を投げたり毛皮を汚したりしてすみませんでした。ごめんなさい。

それと、危ないところを助けてくださって、本当にありがとうございました」

ネヴァンジェリンは正座のまま、深々と頭を下げた。

気持ちがすっと軽くなる。

きちんと謝罪できたことも、お礼を言えたこともそうだが、兄以外の魔族とちゃんと話ができたことが嬉しかった。

（魔族の中にも、わたしの話を聞いてくれる人がいるんだわ！）

お説教を会話と呼べるかは不明だが、ネヴァンジェリンは満足した。少なくとも彼のことは、あまり怖くなくなった。こうして同族に対する苦手意識を解消していければいいと思う。

会話は相互理解への、まさに第一歩なのだ。

「それじゃあわたしは行くところがありますから、これで失礼しますね」

立ち上がり、再度一礼。

くるりと背を向けると、人狼が慌てたように呼び止めてきた。

「待て！」

「はい？　なんですか？」

振り向いて首を傾げる。

立ち上がった人狼は、先ほどの狼狽を忘れようとするかのように、全身の毛を逆立てて身体を震わせた。その後元通りに毛を落ち着かせると、背筋を伸ばしてこちらを見下ろしてくる。

（うん、ふつーにしてるとやっぱり怖い）

よくぞこれに説教したものだ。

いまさらながらに自分に感心していると、人狼は胸を張り、朗々と名乗りを上げた。

「俺の名はヴァーリヴァルグ。鉄の森（イアールンヴィズ）では『黒狼』の名で知られている」

見たままのあだ名だと思い、そういえば名乗っていなかったと気づく。

「ネヴァンジェリンです」

「知っている。もっとも若き魔族にしてネヴァンディーンの妹だ」

（そっか。わたしのあと生まれてないんだ）

魔族のでたらめな生命力を考えれば、それくらいでなければ人口バランスが保てないのかもしれない。なるほど世界は上手くできている。

「先も言ったが、この森には怪物が多い。お前が一人で歩くのは物騒だ。よければ俺が同行しよう」

「結構です」

ネヴァンジェリンは即答した。

しばしの沈黙が訪れる。

「……何故だ？」

「これから捕まっている騎士さんたちのところへ行くので、人狼の方は……やっぱり、怖いですし」

「俺は人間を食べたりせん。あいつらは旨くない。故に、その心配なら不要だ」

「でも」

「お前も言っていたではないか、種族で決め付けるのは失礼だと。他に俺の何が恐ろしい？」

実に答えにくい質問だったが、ネヴァンジェリンは正直に言った。

「……顔が」

ガーン

まさにそんな擬音を貼りつけて、ヴァーリヴァルグが硬直した。

ネヴァンジェリンは慌てて言う。

「あ、あの、申し出は嬉しいです！　とっても！

でも、誰しも向き不向きがあると言いますか適材適所があるって言いますか、敵地に囚われた人間のもとに野放しの狼さん――それも人間側逃げ場なしっていうのは、どう考えても脅しにしかとられないと思う次第でありまして」

人狼の耳と尻尾が、だんだん垂れ下がってくる。

（ええ、そりゃそうですよね）

あんなに偉そうに説教しておいて、自分はこれだ。あきれられても怒られても仕方ない。

（でも、仕方ないじゃないですか！　狼ですよ。二メートルですよ。魔族じゃなくても怖いですよ。ふつーに怯えますよ！！）

初対面でその洗礼はさすがにない。ないったらない。

未だ会わぬ騎士たちのため、気まずく眼を逸らしながらも、ネヴァンジェリンは撤回しなかった。

人狼・ヴァーリヴァルグが実に悲しげに呟く。

「……差別だ」

ごめんなさいしました。

第十二話：不思議な猫の、道案内

しょんぼり項垂れた狼の前で、ネヴァンジェリンは居心地の悪い思いをしていた。

種族で決めつけないでと説教した舌の根も乾かぬうちに、見た目で却下を食らわせているこの現状。心も空気もひじょーに痛い。

さて、どう慰めようかと必死に考えているネヴァンジェリンの足元で、がさりと草をかき分ける音がした。

目を向ければそこに、一匹の黒猫。

「ルゥ！」

パッと表情を輝かせ、ネヴァンジェリンは彼を抱き上げた。

「やーん、ルゥってば！　なんでこんなところにいるの～？」

ツヤツヤの毛皮に頬ずりする。ビロードのような素晴らしい肌触り。

「落ち着け」ないしは「お前こそ」と言いたげに、ルゥが胡乱げな目を向けてきた。

「ああ、その冷たい目がステキ！　ラブ！」

「お前の使い魔か？」

「友達です」

ヴァーリヴァルグが尋ねてくる。気が逸れたせいか、いくぶん尻尾の高さが戻っていた。

「使い魔でないのなら会話もできんだろう。それで友となり得るの

か？」
「なりますよー。言葉はなくても何となく分かりますし。ルゥはすごく賢いんです」
「にゃん」とも鳴かないルゥは、顔をすり寄せて同意を示している。二メートル超えの人狼など完全無視だ。相変わらずいい度胸。
「……ただの猫か？　それとも他の魔族の使い魔か？　あるいは魔族自身が化けているのではないか？」
低い声で問いかけてくるヴァーリヴァルグは、自分に怯えない黒猫を訝しんでいるようだ。
ネヴァンジェリンは平然と答えた。
「知りません。別に何でもいいです」
「何でもいいのか？　本性は俺のような獣型の魔族かもしれんぞ」
「いま可愛いからよいのです」
「差別だ……」
またがっくりと肩を落とす人狼。
実際のところ、半分は冗談――半分は本気――である。
ネヴァンジェリンが塞ぎ込んでいたとき、ルゥは側にいてくれた。怪物が隠れていることを教えてくれたこともあったし、勇者の剣から守ってもくれた。
その事実以上に大切なことなど何もない。
差別は差別でも、れっきとした時間と付き合いの差なのである。
（言わないけど）
「あなたより猫のほうが信頼できます」なんて、人狼（かれ）の誇りを著

しく傷つけるに違いない。いたずらっぽく微笑んで、冗談めかして流すことにした。

「ねえねえ、ルゥ。この狼さんが、わたしが一人で歩くのは危ないって言うの。ついてきてくれる？」

頷くかわりに、ルゥはネヴァンジェリンの腕の中から飛び降りた。数歩歩いて、早く来いとばかりに振り返る。

「うぅ、相変わらずオトコ前。本気で惚れそう……」

「俺も行く！」

力強く宣言する狼を、ネヴァンジェリンは困り果てつつ窺った。

「ですから――」

見上げた先に彼の顔がなかった。

「あれ？」

辺りを見回すが、ヴァーリヴァルグの巨体が見当たらない。不思議に思って首を傾げていると、足元から声がした。

「ここだ」

「ここ、って……！！」

地面に目をやり絶句した。

そこに仔犬がいた。

――もとい、正確には仔狼。ふわふわの毛並みに丸いお目々。全身的に黒毛が主だが、首と手首付近の毛は白い。体格にしては大き

めな手足をちょこんと揃え、ふさふさの尻尾を振っている。

「この姿なら問題な」

「かぁわいいいーっっっ！！」

姿に見合わぬ低い声を遮って、ネヴァンジェリンは仔狼に抱きついた。

「おい、待」

「可愛い可愛い可愛いーっ！！　大歓迎ですオーケーです！　どこへでも一緒に行きましょう、ヴァーリヴァルグさん！」

左手で撫で回しながら、右手の親指をグッと立てる。

（仔犬グッジョブ！）

ネヴァンジェリンは前世から続く、筋金入りの仔犬好き仔猫好きだ。特に今世においては愛玩動物になど縁がないので、興奮も二割増し。

「この姿ならいいのか。やはり差別だ……」

「差別じゃなくて区別です」

可愛いは特別枠！

きっぱり答えたネヴァンジェリンは、逃げようとしたルゥをはしっと捕らえ、ヴァーリヴァルグと共に力いっぱい抱きしめた。

「夢のダブル抱っこ～！！」

「やめんか、放せ！」

吠える仔犬と肉球パンチを繰り出してくる黒猫に頬ずりし、ネヴァンジェリンはしばし至福の時間を味わった。

「さて、では元気よく行きましょー！」

意気揚々とネヴァンジェリンは、傘を持った手を振り上げた。

悲しいことに相槌はない。ヴァーリヴァルグは左腕に抱かれたままげっそりと嘆息し、腕から逃げ出したルゥはせっせと毛繕いに余念がない。

ルゥの毛繕いを見て、ネヴァンジェリンは自分の格好を思い出した。

（騎士さんたちのところへ行く前に、着替えたほうがいいかな）

怪物に襲われて、泣いて、正座して。ソックスの一部が破れてその部分の肌が見えているし、スカートもシミと泥だらけだ。雨に濡れた髪が頬に張り付いて鬱陶しい。

（でも、あの人たちは着替えなんてもってないだろうし。わたしだけ綺麗な格好してるのも、感じ悪いよね）

それに、彼らの扱いも気になる。

ネヴァンジェリンが預けられたのは勇者（エリオット）だけで、騎士たちは魔王様預かりになっている。魔王様がご自分で世話をされるわけがないから、紫執事（チェーザレさん）の仕事だろう。

屍鬼族は人体に詳しいが、死体専門なので激しく不安だ。最悪「まだ死んでない」だけの状態で放置されているかもしれない。

うーんとうなるネヴァンジェリンに気づき、ヴァーリヴァルグが

蒼い目で見上げてきた。

「どうした？」

「着替えようか急ごうか、どうしよっかな～と」

ネヴァンジェリンの服装に一瞬目をやり、いまは仔犬な狼は断言した。

「着替えろ」

「でも心配なんですよね～。思わぬところで時間使っちゃったし。――わたしのせいですけど」

しゅんと項垂れたヴァーリヴァルグに気づき、一言付け足す。

人狼族はその巨体に見合わず、意外と繊細な一族らしい。

「……エリオット王子も、気にしてましたしね」

王子でありながら、部下である騎士たちの身を案じていた。

そう、

「チビで童顔で不浄で魔性なわたしにキスしてくれちゃうくらい、心配してやがりましたもんねぇ。ええ、優先してやろうじゃないですか。女失格な清潔感ゼロ状態で牢屋行ってやりますよ。笑われてやりますよ、ふんっ」

「な、何だと？　キ――」

「余計なこと訊くと抱き潰しますよヴァーリヴァルグさん！」

腕にぐっと力を込める。

本気を悟ったらしい狼は、目線を逸らして口を閉じた。よろしい。

こんなことを話しながらも、ネヴァンジェリンとルゥは歩き始め

ている。先導しているのはルゥで、ネヴァンジェリンはついていくだけだ。
怪物が跋扈する視界の悪い森の中でも、彼が選ぶ道を行けば危険はないと、ネヴァンジェリンは知っている。
だから気楽に注文もつけてみる。
「着替えはあきらめたけど、手と顔は洗いたいな。ルゥ、水場寄ってー」
長い尻尾の先っぽが、一度だけ揺れる。
こんな目印もない場所の、ましてや魔王様の庭をよく知っているなと思うが、ルゥはどこの地理にも詳しい。進む方向を斜めにかえて、迷いなく進んでいく。
神出鬼没で魔族並みの頭の良さ。つくづく不思議な猫である。
騎士たちが囚えられている牢屋は、ヴァーリヴァルグと出くわした場所からU字に進んだ先にある。いまは外に出てしまったので、U字の先端と先端をショートカットで突っ切っているわけだ。距離的には短いが、足場が悪いので早くは進めない。
足元の凹凸につまづいたり、枝に傘を引っ掛けられているネヴァンジェリンを見て、ヴァーリヴァルグが言った。
「飛んだほうが早いのではないか？」
「傘が差せないからイヤです」
だいたいの魔族は雨など気にしないが、ネヴァンジェリンは元日本人として、断固として傘の使用を継続する。
「傘、か。魔界ではあまり見かけぬものだが。その服装といい、お前は変わっている」
「服はお兄様に言ってください。……うっかりゴスロリを口にしち

ゃったのは、わたしだけど」

ネヴァンジェリンはうな垂れた。

初めてネヴァンディーンが持ってきた服は、控えめなフリルのついた黒いワンピースだった。

着ると自分がどのように見えるか、正確に予測できたネヴァンジェリンは「ゴスロリみたいだから他の服ないかな？」と訊いたのだ。

無論ゴスロリなど存在しないこの世界。「どんな服か描いてみて」と言われ、前世で友達が着ていた――そーいう趣味の子だった――服を絵に描いた。

結果、ネヴァンディーンが異様に食いついた。

飛んでいったと思ったら、その手の服を両手いっぱい抱えて戻ってきて、さあ着ろやれ着ろこれも着ろーと……

以来こうした格好である。

「似合っていると思うが」

「褒められても嬉しくないんですよ、こんちくしょー」

むしろ、似合っているから着せられているのだと思うと腹立たしい。

「……お前は意外と口が悪いな」

「よく言われま……した。見た目ほどおとなしいわけじゃないんです、本当は」

やがて灰色の視界が開け、水場に辿りついた

「ふわー」

それは大きな湖だった。

水底の小石が見えるほど高い透明度を有した湖。柔らかな月明かりを反射して、全体が仄かに光って見える。広さはドーム一つ分くらいだろうか。遺跡と化した廃墟が半ばほど沈んでいて、ところどころから石柱の枝葉が水面に突き出ていた。

「すごーい、ルゥ！　綺麗！　よくこんなとこ知――あれ？」

いつの間にか黒猫の姿が消えている。

少しだけ驚いたが、またかとネヴァンジェリンは流した。彼は一緒にいても、ふらりと姿を消すことがよくある。

（おみやげはいらないからね！）

心の中で声をかけておく。以前ゴキブリとムカデが合わさったような虫を持ってこられ、泣いたことがあった。「猫に泣かされる魔族」と、兄は笑いを堪えていたが。

ネヴァンジェリンは靴下を脱ぎ、湖に足を浸した。

キンとくるほど冷たい水だったが、生ぬるい雨に濡れたあとではそれが気持ちいい。

手を洗うついでにヴァーリヴァルグもと腕の中の彼に視線を落とす。

彼は真ん丸い目を見開いて、湖の一点を凝視していた。

「ヴァーリヴァルグさん？」

固まったままのヴァーリヴァルグを不思議に思い、ネヴァンジェリンは視線の先を追った。

そして彼女も硬直する。

石柱の一つに寝そべる、優美にしてしなやかな黒い姿――

「魔王様！？」

第十三話：万人にとっての当然と、魔王様にとっての不可能ごと

「……ネヴァンジェリンか」

石柱に頬を乗せたまま、魔王様がこちらを見た。

気だるげな流し目に、思わずネヴァンジェリンは後退る。

「何をしている！　名を呼ばれたのだぞ、早く御前に侍らんか！」

「だ、だだだってヴァーリヴァルグさん！」

器用にも小声で怒鳴りつけてくるヴァーリヴァルグに、ネヴァンジェリンは泣きそうな顔を向ける。

ちらりと横目で魔王様を窺えば、いかにも億劫そうな仕草で身を起こしたところだった。

絹糸のように癖のない黒髪が、さらさらと肩に零れ落ちていく。

魔王様は軽く顎（おとがい）を上げて、それを背のほうへ流した。黒衣から覗く象牙色の素足が、軽く水面に触れて波紋を生じさせる。

「むむ、無理ですー！　なんかあの人フェロモン出てます！」

「お前の兄もそうだろう！」

「兄様のアレに慣れるのに、どれだけ時間かかったと思ってるんですか！」

それこそ命――と貞操――に関わるので死ぬ気で慣れたが、魔王様と対面したことは数えるほどしかない。謁見の間のように、王と臣下で明らかに区切られていれば畏怖と緊張だけで済むが、直接対面するのはネヴァンジェリンにはハードルが高すぎた。

「ヴァーリヴァルグさん、犬掻きで魔王様のところまで行って、わ

たしの代わりにご挨拶を！」
「名を呼ばれたのはお前だろう。ここで待ってるから一人で行け！」
「無理です無理です！　絶対失礼なことしちゃいますー！　せめて一緒に行ってー！」
「……すでにこうして揉めているのが失礼だ。共に行ってやるから早く行け」
ネヴァンジェリンは渋々羽根を広げて地を蹴った。
途端、よろけて湖に落ちかける。
「もっと気合入れて羽ばたかんか！」
「そ、そんなこと言われても、低空飛行は難易度が高いんですっ！」
よたよたよろよろ、実に無様な飛びっぷりで魔王様のところへ到着する。
「お、おは、おはようございます、魔王様」
魔王様の近くに浮かんで、引き攣った笑みで挨拶をする。
魔王様はいつもどおりの退屈そうな無表情――表情はないのに雰囲気だけつまらなげ――で、ネヴァンジェリンを見た。
――以上。返事も反応も返ってこない。
ネヴァンジェリンはヴァーリヴァルグに視線で訊いた。
『挨拶終了。逃げていい？』
『駄目だ』
魔王様から下がる許可をいただくか、魔王様ご自身が去られるのを待つしかないらしい。

（どーしろっていうの～！？　ってか、ホバリングはさらに難易度が……！！）

焦りが失敗を招いた。
がくんと体勢が大きく崩れる。

（た、立て直せないっ！）

ネヴァンジェリンは目を閉じて、湖に落ちるのを覚悟した。
ところが――

「……ふぇ？」

何かに受け止められる感覚があった。
優しさはなく、そこにネヴァンジェリンが落ちただけという感じではあったが。
目を開けて、おそるおそる自分が下敷きにしたものを窺うと、そこに腕がある。ついでに足もある。

（ま、まさか……）

ギギギィッと、ネジが止まる寸前のオモチャのような動きで、ネヴァンジェリンは腕の主を見上げた。
先ほど目の前にいたのはたった一人。
前髪に隠されぬ片方の深紅の目が、無感情にネヴァンジェリンを見下ろしていた。

「きゃぁあああっっっ！！　ご、ごめんなさい、魔王様ー！」
「うるさい」

慌ててネヴァンジェリンは両手で口を塞ぐ。
腕に抱いていたヴァーリヴァルグが膝に落ちたが、気にするどころではなかった。

（よりにもよって、魔王様の上に落ちちゃうなんてぇー！！）

むしろそれなら水ぼちゃのほうがいい。
向き合った状態で膝の上から見上げる魔王様は、至近距離で見ても素晴らしく美人さんでしタ。
おまけに肌の色といい顔立ちといい、どちらかといえば東洋系で、前世からの馴染みが深いぶん圧倒される。

（そ、それになんか、身体がぞわぞわする）

不快ではない。むしろ高揚感に近い感覚だ。自分の中の何かが反応している気がする。
その「何か」が分からず眉を顰めていると、魔王様がぽつりと仰った。

「魔力をコントロールせよ」
「へ？」
「余に触れると魔力が増強される。増した分の魔力が漏れている」

ネヴァンジェリンは慌てて己の魔力を調節した。
『魔力』は前世にはない概念であったが、魔族となったいまは何よりも身近なものだ。コントロールは感覚でいうなら、呼吸のようなものだろうか。息の乱れを正す要領で、ゆっくりとそれを体内に循環させていく。
ちなみに精気はエネルギー。体力のようなもので、魔力を使うのは長距離走をしているようなもの。速さは魔力に比例し、走れる距

離は体力、すなわち蓄えた精気次第。
ネヴァンジェリンは鈍足の上、開始十メートルで力尽きるといえば、ダメっぷりも分かりやすいだろう。

「ど、どうして魔王様に触れていると、魔力が増すんですか？」

ネヴァンジェリンは多少興奮気味に尋ねた。

「これって魔王様から離れても継続します！？」
「継続はしない」

即答の否定にがっくりとうな垂れる。

（あぅ、いまならミニインスタントの時間で火が出せそうなのに！）

増強されてそのレベルかと言うなかれ。低身長の者が一センチでも背が伸びれば嬉しいように、ネヴァンジェリンだって少しでも魔力を高めたい。他から見れば些細な差に過ぎなくてもだ。

「余は常に膨大な魔力を身に纏っている。そして魔族の本質は、まさにその魔力だ。
故に、余に触れた魔族は無意識に、余から魔力を吸収する」
「えっ、わたしっていま、魔王様の魔力を吸い取っちゃってるんですか！？」

ネヴァンジェリンは慌てた。魔力を吸い取るとはつまり、魔王様から酸素を奪っているようなものだろうか。
継続はしないとのことだが、触れられている間は息苦しいのかもしれない。
急いで離れようにもこの体勢から飛び立てる自信はなく、ネヴァ

ンジェリンは懇願した。

「ごめんなさい、魔王様！　わたしのこと放り出してください！　湖にぺって！」

「無理だ」

「気を遣わなくて結構ですから！　ここは魔族の傍若無人さ全開でよろしくお願いします！」

「ネヴァンジェリン、魔王様には無理だ」

膝の上のヴァーリヴァルグが、上着の裾を爪で引っ張った。

「魔王様は生き物に殺さず触れることができない。その強大なお力ゆえに、ご自分から触れたものは皆壊してしまうのだ」

「はい？」

ネヴァンジェリンはきょとんと瞬きをした。何それ。

「そんな、破壊神や魔王じゃあるまいし」

「……魔王様だ」

ぱたぱた手を振るネヴァンジェリンに、ヴァーリヴァルグがうな垂れたそのとき、湖で魚が跳び跳ねた。

キラキラと水滴を撒き散らしながら、こちらに向かって跳んでくる――角と触手と複眼の目玉を持つ魚型の怪物（モンスター）。

鋭い牙を煌かせ、ネヴァンジェリンに襲い掛かってくる。

「うきゃあっ！」

ネヴァンジェリンなど一呑みにできるような大きさだ。

魔王様の膝からネヴァンジェリン――と、もしかしたらヴァーリ

ヴァルグ――を拐って、水中に引き込むつもりだったのだろう。
思わず魔王様にしがみつくと、かの方は無造作に手を伸ばして、妖魚の牙を掴んで止めた。
突進を止められた妖魚が、ネヴァンジェリンの間近でビチビチ身体をくねらせる。

「あ、ありがとう、ござ…います……」

ネヴァンジェリンは目を瞠った。
妖魚は最初こそ元気よく動いていた。
ところが見る間に生気を失い、黒い身体が白く変わっていく。すぅっと目から光が消えたと思ったら、妖魚はバリンとガラスのように砕け散った。
その破片さえ風に溶け、跡には何も残らない。

「魔王様のお力は、触れる者の生命力に比例する。若い者、力ある者ほど早く自壊するのだ。我ら魔族に魔王様が自らお触れになれば、一瞬で砕け散ることになるだろう」

ヴァーリヴァルグの説明に、ネヴァンジェリンは呆然と魔王様を見上げた。
氷像のようなその顔には、いつもどおり何の表情も浮かんではいない。

「物も同じことだ。こちらは大きさに比例するが、特別な製法を用いた物以外には基本的に触れられん。ご不快に思われる前に、自分から早く退け！」

魔王様からの訂正はなかった。
つまり、ヴァーリヴァルグが言ったことは正しいのだろう。

ネヴァンジェリンが落ちてきても、そのまま膝に居座っても、魔王様は避けようともどかそうともしなかった。
触れる、イコール殺すことだと認識していたから、そのままで放置した。

「魔王様……」

未だ頭がその事実を理解しきれない。
誰かに触れるための力加減など、ネヴァンジェリンは意識したこともない。けれど、魔王様にはその加減が不可能で、故に何者にも手を伸ばせないというのか。
ごくりと唾を飲み込んだ口が、無意識に開かれて言葉を紡ぐ。

「どうやってご飯食べてるんですか！？」

――なんでそんな質問しちゃうの。
心の中で、ネヴァンジェリンは自分につっこんだ。

第十四話：失言不問の好意と、行為

魔王様は自分からは、人や物に触れられないそうです。
へー、どうやってご飯食べてるんでしょうね？

（って、もっと他に言うことあるでしょ、わたしーーーっっっ！！）

盛大に自分を罵る。
バカだ、バカがいる。死んでもバカは治らないって本当だ。生まれ変わって、もっとバカになっている気がする。
自分に絶望したネヴァンジェリンは、魔王様の膝の上に両手をついた。
下手な慰めなど口にできるはずもないが、それにしたってあの質問はない。

（このまま背面跳びして湖に消えよう……）

そして浮かんでこなければいいのだ。そうすれば二度と、魔王様にバカな質問をすることもない。
さあ跳ぶぞと腕に力を入れたところで、小さな笑い声が聞こえてきた。
弾かれたように顔を上げれば、魔王様が笑っている。

「そのような問いかけをしてきたのは、お前が初めてだな」

深紅の瞳が柔らかに細められる。
膝の上のヴァーリヴァルグが、仔犬状態のまま尻餅をついた。
ネヴァンジェリンはぽかんと口を開け――その後、顔中を真っ赤に染めた。

（ま、魔王様が笑ってるーーーっ！！）

それも以前見た不敵な笑みではない。明らかに好意的な笑みだ。魔王様のお膝の上から拝顔する、国宝もとい魔界宝級に貴重なその光景に、ネヴァンジェリンは先とは別の理由で湖に飛び込みたくなった。この火照った頬を冷水で冷ましたい。

「ネヴァンジェリン」

「は、はい！」

繊細な美貌に似合わぬ節くれだった男らしい指を、そっとご自分の唇に当てられて、魔王様は言った。

「ならば、お前が余に食事をさせよ」

「ふぇ？」

「立つぞ」

言葉と同時に湖面に直立される魔王様。

ネヴァンジェリンは慌てて魔王様の服にしがみついた。左腕は身体の下に残してくれているが、自分から触れることができない魔王様は支えることをしない。おかげで非常に不安定だ。

ネヴァンジェリンの上にいたヴァーリヴァルグは、ころんと転がって湖に落ちた。地上を歩くかのように、平然と湖面を歩く魔王様の後を犬掻きで追ってくる。

「え、えと、えっ……？」

ネヴァンジェリンは困惑していた。

迂闊な一言でご不興を買わなかったのはよかったにしても、何故

こんなことになっているのだろう。

（そもそも食事って……え、食事！？）

ネヴァンジェリンは硬直した。

自分に食事をさせよと魔王様は仰った。ところで淫魔の基本的な食事は、うっふ～んな例のアレなわけだが。

――またですか？

（ま、まままま待ってぇぇぇえええっっっ！？）

勇者には膝蹴りして兄は突き飛ばし、狼には石を投げたが魔王様相手ではそうもいかない。触れられた時点で終了だ。反抗の意思を見せれば、即命の針が危険粋に傾く。

（あ、でもそっか。魔王様からは触れないんだから、わたしが何もしなければ）

ご不興を買って終了だ。

かといって経験のないネヴァンジェリンでは、よしんば覚悟を決めたところでご不満しか与えないだろう。

つまり結論。

（わたしの人生詰んだーーーっっっ！！）

魔王様という死神の腕（かいな）に収まったネヴァンジェリンは、迫り来る死の恐怖に慄いた。

終わった。全部終わった。いまさら兄を呼んでも手遅れだ。なんとも残念な人生でありました。

（でも、お兄様とルゥがいてくれたもん。悪くはなかったよね。ここに案内したのはルゥだけど。
……いないし、逃げられた？　ううん、いいの。猫だもん。自由に生きればいいと思うよ。でも一言だけ言わせて）

「ルゥの裏切り者っ……！」

半泣きで恨み言を零す。
次生まれ変わったら、今度こそ猫になろう。そしてルゥに元カノヅラですり寄って、「わたしのこと忘れちゃったの？」って訊いてやろう。そして今カノ――いるのか知らないけど――と修羅場してやる。「この泥棒猫め！」って言われてやる～！

「うわぁあん！　ルゥのバカーーっっっ！！　でも愛してるー！」
「うるさい」

言葉と同時に身体が沈んだ。

「ふぎゃっ！？」

慌てて魔王様の服に爪を立ててしがみつく。
そういえばこの服、魔王様が触れられる特別製法なのだろうが、素材はなんだろうとか関係ないことを考えてみたり。
どうやら魔王様はどこかに腰を下ろしたらしいが、怖くて周囲を確認できなかった。

（ベッドルームだったら本気で死ねる……！）

でも草の匂いがするので大丈夫――だと思いたい。いや、魔王様の場合は森にベッド置いてそうなので安心できないか。

ネヴァンジェリンはそろそろと、できるだけ無害そうなところから視線を巡らせていった。

まず、魔王様の背後に湖。

先ほど湖面を――どうやったんだ――歩いてこられたのだから当然だ。水から上がってきたヴァーリヴァルグが、ぷるぷる毛を振って水滴を飛ばしている。口にはネヴァンジェリンが落としてきた傘が咥えられていた。拾ってきてくれたらしい。ありがとう。

続いて地面。

雪のように白い草に覆われている。魔界の植物は瘴気の影響か色素の薄いものが多いが、ここの植物は灰色を通り越して完全に色を失くしている。そこから伸びる木もまた白く、月明かりに照らされて上に行くほど蒼く染まっていた。なかなか綺麗で幻想的。

空を見上げれば丸い月。

魔界の月はいつでも丸く、明るさ以外変化しない。もしかすると本物の衛星（つき）ではないのかもしれないなと、ネヴァンジェリンは疑っている。明るさからして、そろそろ昼時だろうか。雨もいつの間にかやんだようだ。

そして――

（ううっ、前を見るのが怖い）

しかし硬直していても埒が明かないので、勇気を出して目を向けた。

そこには机が置いてあった。

四人家族が食卓を囲める大きさの、長方形のテーブルだ。黒いテーブルクロスが敷かれていて、フォークとナイフが一客だけセッティングされている。

「おはようございます、ネヴァンジェリン様。よい夜ですね」

きょとんと瞬いたネヴァンジェリンに、声をかけてきたのは屍鬼族の執事チェーザレだ。

相も変わらず執事服を隙なく着こなし、それでいて顔色は紫色の水死体。草の上で器用にカートを押しながら、テーブルに皿を並べていく。

いつものネヴァンジェリンなら、即行チェーザレから身を隠していただろう。

けれどいまは、並べられる料理に釘付けだった。

穀物を使ったキッシュに、温野菜のとろ～りスープ。彩りカラフル魚介マリネにサクサクカリカリなブルスケッタ。クリームベースのスパゲッティに、新鮮な野菜を乗せたピザ。主菜はもも肉のスパイスグリルだ。

無論実際の料理名や材料は、ネヴァンジェリンが知っているものと異なる可能性が高い。

しかし見た目と匂いだけは間違いなく、

（人間のご飯だ～！）

両手を胸の前で組み合わせ、ネヴァンジェリンはキラキラした目で料理を眺めた。

転生してからこっち、まともなものを食べていない。ちょい毒入りのごった煮スープが定番で、たまに兄が人間のお菓子を持って帰ってくれるのが関の山だ。

「ネヴァンジェリン様は人間の食事を好まれると、兄上様よりお聞きしておりましたので。特別にご用意させていただきました」

「えっ、わたしのためですか！？」

ネヴァンジェリンは目を見開いてチェーザレを見、次に魔王様を見上げた。

そうだとすれば、この料理は魔王様の指示で用意されたことになる。湖の上からどのようにして指示を出し、どのようにしてこの短時間で料理を用意させたのだろうか。

あるいは、だからこそ魔王様のたった一人の執事なのかもしれない。紫執事さんは実は大変優秀な人だったようです。

「さあネヴァンジェリン様、冷めないうちにお召し上がりください」

にこやか――声からするとたぶんそう――にチェーザレが料理を勧めてくれる。

魔王様を見上げたが、制止はないので食べていいらしい。

ほくほく気分でネヴァンジェリンは、まずはブルスケッタに向かって手を伸ばした。

ブルスケッタは焼いたフランスパンやバケットの上に、ガーリックやトマトソースなど好みの具材を乗せて食べる前菜だ。手に取ったそれは、こんがり焼けた堅めのパンにペースト状の赤野菜が乗っていた。

「いただきます」

ぺっこり一礼してから味見の一口目。

ネヴァンジェリンは目を見開いた。

「おいしっ！！」

外側カリカリ中もっちり。あっつあつの理想的なパンに、ガーリックのパンチとフレッシュな野菜風味が混じり合った、冷たい具材のダブルコンボ。

夢中になってブルスケッタを咀嚼する。

熱いので一口一口が小さい分、せっせと口を動かして一つ分食べ

切った。
続いて他の料理にも手を伸ばす。
野菜スープ。
胃に直接下りてくる、とろりとした食感が堪りません。
穀物のキッシュ。
中のお芋が冷えてなおほくほくです。
魚介マリネ。
出汁に味が染み込んでてもぉー！

（さいっっっこう！！）

スプーンを握り締め、じたばたじたばた足で踊る。

「満足か？」
「はいっ！！」

即答したネヴァンジェリンは、質問者に満面の笑みを向けた。
そして固まる。
こちらをじっと見下ろす、左側だけの深紅の瞳――

「……ごめんなさい、魔王様。忘れてマシタ」
「忘れられたのも人生初だな」

興味深いとばかりに魔王様は頷かれた。
気分を害された様子はないが、ネヴァンジェリンは自分が恐ろしい。
魔界の偉大なる王様をコロッと忘れていたというのもそうだが、
それ以上に――

（お、男の人の膝の上にいることを忘れて、料理に夢中になるなん

てっ……！）

まあ、食いしん坊さん――じゃない、何故いままで気づかないのだ、自分は。はしたない！

兄か、兄なのか。ネヴァンディーンはよくネヴァンジェリンを膝に抱くが、うっかりアレに慣らされつつあるのか。

慌てて降りようとしたが、魔王様の腕が回っていて降りられない。触れるでなく、囲われているだけなのだが、それだけで身動きがとれなくなる。

腕を解いてくださいとお願いしようか。

（うん、でも、ちょっと待って。いまさら降ろしてくださいって言うのも、カッコ悪いよね！？）

格好悪いというよりマヌケすぎる。

そもそも料理が用意された理由は、『魔王様の食事の手伝いをする』ためだ。ネヴァンジェリンも一緒にという好意プラス、どうせなら好物をと配慮していただいたのだから、その役目はきっちり果たさねばならない。

それさえ果たせば許されるはず。

（許されるし赦されるよね！？　膝から降ろしてくれるよね！？殺さないよねぇ！？）

ビー・クール、ビー・クール。深呼吸しろ大丈夫。

ネヴァンジェリンは自分に言い聞かせた。

手際よくご給仕して、さっさと食べ終えていただければいいのだ。それだけのことだ。うん、冷静。

魚介のマリネをスプーンで掬い、ネヴァンジェリンはにっこり魔王様を見上げた。

「はい、あーん」

……ダメだ。まだ混乱してた。

第十五話：不覚報酬は、人間食でした

スプーンを魔王様に差し出したまま、ネヴァンジェリンは硬直した。

混乱すると、とりあえず動いてから内容を考えるのは悪い癖だ。

前世含め、何度も失敗を招いているというのに、未だ直せないのだから癖とは恐ろしい。

凍りついた空気が居た堪れず、そろっと手を引こうとしたとき、魔王様が動かれた。

綺麗な顔が近づいてきたと思ったら、スプーンに乗った魚介マリネがその口内へ消えていく。

赤い舌がマリネを舐めとって、元通りに離れていった。

ネヴァンジェリンはしばし、何もなくなったスプーンを凝視して――

「ふぎゃあっ！？」

奇声と共に仰け反った。

（本当にやったよ、この人ー！！）

驚きすぎて、危うくテーブルの上に落ちるところだった。

寸前で身体をひねったネヴァンジェリンは、ぼてりと地面にお尻から落ちる。無意味にぱくぱく口を開け閉めした後、足が開いたままなことに気づいて、慌てて正座でスカートの裾を押さえた。

上目遣いに魔王様を窺えば――無表情。

口の端についたマリネを、指で拭って舐めていらっしゃるだけだ。

（な、なにか反応（リアクション）を！！）

こんなにイタ恥ずかしい思いをしたのだから、悦ぶなり蔑むなりしてくれないだろうか。……これで悦ぶ魔王様は嫌だな。蔑む一択でお願いします。

ネヴァンジェリンの心境を読んだかのように、チェーザレが質問する。

「魔王様、ご感想は？」

「味がした」

そりゃそーだ。

魔王様でなければつっこんだ。

美味しいのか不味いのか、あるいはお膝に乗って「はい、あーん」に対するコメントがほしいのに、どれにも大した感想はないらしい。

それに対して「そうですか」と、一欠片の動揺も見せずに返せるチェーザレを、ネヴァンジェリンは本気で尊敬した。プロだよ！

「まだ食事をお続けになられますか？」

チェーザレの言葉に魔王様がこちらを見る。

右手を軽く差し伸べて、魔王様はちょいちょいと指先を動かした。

（……来いと！）

しかも左手がご自分の膝を叩く。

（乗れと！？）

半泣きになったネヴァンジェリンは、視線でチェーザレとヴァーリヴァルグに助けを求めた。

二人とも無言のまま揃って首を振る。裏切り者ー！

「あああ、あの、ま、魔王様はいつもは、何を食べてらっしゃるんですか？」

ネヴァンジェリンは訊いてみた。

人間の残酷焼きとか言われたら大泣きするが、それ以外なら努力する。だからもうこの居た堪れない食事はやめようよ！

魔王様の代わりに、チェーザレから回答が返ってくる。

「魔王様は瘴気をお食べになられます」

瘴気。

ネヴァンジェリンはその単語を、鸚鵡返しに繰り返した。

瘴気は魔界を漂っている毒気――バリバリ有害な気体のこと。

「霞食（かすみ）って生きてんですか、魔王様！？」

「瘴気だ」

仙人のようだと内心でつっこみ、いやいやもっとすごいと思い直す。

つまり魔王様は、毒を吸収してくださる存在で。

さらに、触れれば魔族に魔力を与えちゃう体質なわけで。

（な、なんて魔界に優しい人！！）

そこにいるだけでエコ対策だ。

いままでネヴァンジェリンは、『魔王』とは魔界一強いから王なのだと思っていたが、違うのかもしれないと考えた。

魔王様は存在そのものが、魔族の庇護者として成立している。

ゆえに魔族たちは、本能から服従を誓うのだろう。

（そ、そんなお方のお膝の上で、もう一回「はい、あーん」って……）

ムリムリ、ムリだよ！　イタすぎる。

けれどそれが、ネヴァンジェリンに対する魔王様のご命令なわけで。催促するかのように、またお膝を叩かれているわけで。

でもそんな、いくらなんでも――……

負けました。

その一言で察してください。

「恥じて死ねるッ……！」

魔王様がいなくなったテーブルに突っ伏して、ネヴァンジェリンは頭を抱えていた。

いったい何回「あーん」をやっただろう。お優しい魔王様はネヴァンジェリンにも料理を半分分けてくれたけれど、満たされた腹のかわりに何かを失った気がする。

（厄日？　厄日なの？　食事ネタで誤解はされなかったけど、おんなじくらいヒドイ目に遭ってるよ！）

恥ずかしくて顔を上げられない。何故に人前で、兄以外にこんなことをされねばならんのか。

「そう落ち込むな、ネヴァンジェリン。愛らしかったぞ？」

「ええ、魔王様もさぞかしご堪能されたことでしょう」

ヴァーリヴァルグとチェーザレが慰めにもならないことを言ってくる。

それにしてもチェーザレの言葉は信じがたい。魔王様は終始口数少なく、にこりともされなかった。

突っ伏したまま疑惑の目だけをチェーザレに向ければ、彼は声だけ爽やかに説明してくれた。

「魔王様はご自分から生き物に触れることはできませんが、かといって触れと命じても、大抵の相手は萎縮してしまうのです」

「わたしも怯えてました」

「あなたは誰にでも怯えますし、そのわりにはすぐ気が逸れて現状を忘れます」

現実逃避が早いと言いたいのか。

悪かったなーと思いつつ、とりあえずネヴァンジェリンは黙って聞く。

「たまに触れてくる者がいても過剰な接触が主でしたし。あなたにはその手の心配がないので、随分と和んでおられましたよ。ああ見えましてもね」

「過剰な接触、ですか？」

よもや魔王様に危害を加える――もとい、加えられる者がいるとは思えない。

首を傾げるネヴァンジェリンに、チェーザレはさらりと言った。

「性的接触ですね。触れろと命じられた時点で伽か奉仕を求められていると勘違いするようです。

以前も三人の女魔族が足と背と膝の間にはべり――」
「言わなくていいですっっっ！！」
思わず立ち上がって遮った。
真っ赤な顔で睨みつけたが、紫色（チェーザレ）の水死体顔は平然と付け足す。
「その手の接触を望む者なら多いのですが、魔王様もさすがに食傷気味のご様子でして。
寝所に死体ばかり増えるからと、お庭で休まれるようになったのです」
魔王様の寛ぎスペースが庭である理由はわかったが、ネヴァンジェリンが拒まれなかった理由はぜんぜん知りたくなかった。
仔犬よろしくテーブルの上にお座りしているヴァーリヴァルグの首根っこを摘み、ネヴァンジェリンはそれをチェーザレに突きつける。
「次からはどうぞ、ヴァーリヴァルグさんを膝に抱くよう魔王様に進言してください。軽くて可愛くて癒し系です。魔王様もきっと和まれます」
「その条件ならネヴァンジェリン様にも当てはまりましょう。何より彼の様子では、固まるどころか尻尾を巻いて逃げそうですよ？」
きゅーんくーんと切ない声が聴こえてくる。
くるりと巻いた尻尾がラブリーだったが、ネヴァンジェリンはあえて無視した。
「がんばれ男の子！」
「……ネヴァンジェリン様もなかなか鬼でいらっしゃいますね。
ちなみに私（わたくし）は不気味なので触れるなと命じられております。あし

からず」

逃げられた。

ぶーと頬を膨らませるネヴァンジェリンに、チェーザレが笑った。

「どうやら私にも慣れてくださったようですね。もう怖くはありませんか？」

「あんな羞恥プレイのあとで、そんなまともな反応できると思ってるんですか。二人が助けてくれなかったこと、わたし一生忘れませんん！」

根に持ってやるー根に持ってやるー。

視線でそう伝えれば、さらに笑みが深くなった。

「ネヴァンジェリン様の御心にとどめ置かれるとは光栄です。さぞかし皆様に羨まれることでしょう。

――ところで、ネヴァンジェリン様はどちらへ向かわれるおつもりでここへ？　不都合がありましたなら、私が承りますが」

ネヴァンジェリンはますます頬を膨らませた。

話題の切替がスマートすぎる。これでは話しに乗るしかないではないか。

渋々ながらもネヴァンジェリンは、ここに来た経緯とヴァーリヴァルグとの出会いを語った。囚われの騎士たちの身が心配だということも伝える。

「チェーザレさんも魔族ですから、人間の治療は苦手でしょう？」

「人間相手でなくとも不得手ですね。我ら屍鬼族は人体には詳しいですが、健康な状態に戻せというのは些か難しい。死体の保存は得意なのですが」

「こ、殺してませんよね？」

疑いを含んで上目遣いに尋ねる。

「殺してませんし死んでませんよ。保存は得意だと申し上げたはずです。

――失敬。死体と限定してしまったのがいけなかったのですね。人間どもは皆、凍らせて保存してあります」

「こ……！？」

「生かしたまま解凍できますので、ご懸念した事態にはなりませんよ。

さすがにあの数を世話するのは手間がかかりますので、もっとも簡単な手段を用いらせていただきました。ネヴァンジェリン様がお望みなら、いつでも解凍致しますのでお命じください」

内容を頭で反芻して、ネヴァンジェリンはしばし考える。

生かしたまま凍らせる――ＳＦとかで出てくる『コールドスリープ』のようなものだろうか。

（あれって確か、仮死状態にするんだよね？　肉体の劣化を止めるとか）

怪我の状態も何もかもをそのままで維持できるなら、そのほうが都合がいいかもしれない。

勇者（エリオット）とのコミュニケーションが成功していないいま、ネヴァンジェリンは騎士たちにまで目が届かない。怪我の状態が酷い者もいるだろうし、食料の問題もでてくるだろう。なにせ彼らは二千人近くいるのだし。

（エリオット王子と仲良くなってから、彼と相談して解凍していく

のがベストかも）

ネヴァンジェリンは頷いた。

「……多少不安はありますけど、しばらくはそのままでお願いします。ぜったい殺さないでくださいね？　解凍するときに『あ、失敗』とか言わないでくださいね！？」

「かしこまりました」

慇懃な一礼にとりあえず納得。

（じゃあ、そろそろ尖塔へ戻ろうかな）

兄を回収しなければいけないし、勇者も……腹は立ったけど、やっぱり心配だし。

「お兄様と勇者のところへ戻るけど、ヴァーリヴァルグさんはどうします？」

未だ首をつかまれて揺れている仔犬――もとい人狼に尋ねる。

ヴァーリヴァルグは小首を傾げ、当たり前のように答えた。

「ついていく」

（うん、この忠犬すごい可愛い）

実寸大の姿は忘れることにして、ネヴァンジェリンは「ありがとう」と笑った。

「それじゃあ、チェーザレさん――」

「魔王様のお相手を務めてくださり、感謝しております、ネヴァンジェリン様。
城の食料庫の一つに人間用の食材を用意しておきました。人間（ゆうしゃ）の世話に必要でしょう。どうぞご自由にお使いください」
「本当ですか！？」
一番頭を痛めていたのが、その食料問題だ。
できるかぎり視界におさめたくなかったその顔を、正面から真っ直ぐに見上げる。
「もちろんです。その他、ご不自由がありましたら何なりと」
爽やかな声で優しい言葉。
濁った白目の紫水死体顔が、この上なく素敵に――はさすがに見えなかったが、顔はともかくいい人だと思った。
（これで、毒入りごった煮スープからしばらく解放される！！）
個人的にも大変ありがたい。
「ありがとうございます～！」
「いえいえ、いいんですよ」
にっこり笑ってチェーザレが言った。
「次の機会にまた、魔王様のお膝に座る謝礼です」
タダより高いものはない。
その意味を思い知ったネヴァンジェリンだった。

第十六話：不在時の尖塔で、勇者が××

灰色の蔦に覆われた尖塔の扉の前で、ネヴァンジェリンは立ち竦んでいた。

この扉の先には、魔界の王を弑さんとした勇者が――いるのは別にいいが、もう一匹困ったのがいる。

月の光度を確認し、どれくらい時間が経ったかを計算して、ネヴァンジェリンはため息を吐いた。

「どうした？」

足元からヴァーリヴァルグが、不思議そうに尋ねてくる。

「勇者が手に余るというのなら、俺が――」

「首ねじ切ったりしないでくださいね。勇者に何かしたら、魔王様のお膝にポイしますよ？」

途端に尻尾がくるんと丸まる。うむ、よろしい。

その愛らしさに少し和んだネヴァンジェリンは、「よし！」と気合を入れて扉を開いた。

途端、するりと腰に絡まる褐色の腕。

抵抗の間もなく引き倒されそうになり、ネヴァンジェリンは慌てて膝立ちでこらえる。

「お、お兄様、正座――！」

「シテるよ、ちゃんと」

口付けるような仕草で下から顔を覗き込み、蠱惑的な微笑を浮かべたのは、尖塔に置き去りにした野獣――もとい変態、いやいや犯

罪者、じゃなくて双子の兄ネヴァンディーン。

「お帰り、ネヴァンジェリン」

とろりとした甘い声が名を呼んだときには、正座した膝の上に向き合って座らされていた。

おまけに右手が上着の裾から侵入している。

（な、なんていう早業！！）

職人芸だが感心している場合じゃない！

「ただいま、お兄様。待たせてゴメンナサイ。でもセクハラしないで膝の上はもういいんだってば！！」

「おや、僕がいないからってイケナイ娘だね。どこの男に股を開いてきたんだい？」

「いかがわしい言い方しないで！　ってかそこ、ちょっ胸、足も撫でるなー！！」

反省の時間が予定より長くなったので、まあこうなるんじゃないかと薄々予想はしていたが。

予想したところで防げなければ意味はない。右手はすでに服の中を這い回っているし、左手は足を押さえ込みつつ太ももを撫でている。ところで兄よ、正座で扉ギリギリ前まで詰め寄って待つとか反則では？

「お兄様、反省！　反省はどうしたの！？」

「すごく反省してるよ、ネヴァンジェリン。こんなに靴下をビリビリにして、正体不明のシミまでつけてくるなんて」

「不明じゃない、泥！　泥だから！　見たらわかるでしょ！？」

「僕がついていけなかったせいで、君は汚されてしまったんだね。ごめんよ」
「泥にね！　具体的には雨の中で転んだせいね！」
「すぐに僕が綺麗にしてあげるからね。具体的には、大事なところに舌と指を挿れてじっくり濡らしてから――」
「妄想に具体性はいらんですよ！！　ってゆーかネヴァン兄様、今日はちょっと本気で飛ばしすぎー！」

――がぷり。
スカートに伸ばされたネヴァンディーンの手が、中途半端な位置で止まった。
がじがじがじ。ぺっぺっぺ。
ネヴァンディーンの首を噛んだ仔犬が、唾を吐いてから膝に上ってくる。
「がるる」と兄にうなりつつ、姿に見合わぬ低い声で彼は言った。
「いい加減にしろ、ネヴァンディーン。やりすぎだ」

キッっと蒼い目で睨みつける仔犬――もとい、狼。
きょとんと瞬いた兄は、まじまじとその愛らしい姿を眺め、それから吹き出した。
「あっはっは！　何やってるの、ヴァル！　何なのその姿!?　ギャグ？　ギャグなの？　体張って笑いとってるの!?」
「違う！　……これはその、お前の妹が怖がるから」

しどろもどろに答えるヴァーリヴァルグを、ネヴァンディーンは片手でつまみ上げた。
しげしげ眺め直して、ププッとわざとらしく目を逸らす。

「へぇ、そんな理由で黒狼が仔犬に……そ、それは深遠な理由だね。きっとお仲間の人狼も理解してくれるよ」
「バラすなよ!?　報告に行くくんじゃないぞ！　だいたい、元はといえば貴様が妹を魔族から遠ざけるせいで――！」
「何言ってるの、君がネヴァンジェリンに怪我させたのが悪いんでしょ。土下座して死ねばいいよ」
「お前が死ね!!」

言い合う二人の姿を、ネヴァンジェリンは呆気にとられて眺めていた。
驚きすぎて、身繕いすることさえ思いつかない。

「お兄様、友達いたんだ……」

思わず本音を呟けば、ネヴァンディーンが「こら」と額を小突く。

「お兄様はこんな駄犬と友達になった覚えはありません」
「あ、そっちの訂正なんだ」
「それは俺のセリフだ！　誰が貴様なんぞと!!」

ではどういう仲なのかと訊けば、たまに会ったら殺し合う仲だそうです。

「こいつが上空から魔力で攻撃してくるのだ」
「ヴァルたち人狼は腕力専門の力バカだからねー。近づくと首をねじ切ろうとするんだもん。おっかないよ」
「……わたしはどっちもおっかないデスが」

会ったら挨拶する程度、みたいな軽い説明をしないでいただきたい。

ともあれ、ヴァーリヴァルグの横槍のおかげで貞操を死守したネヴァンジェリンは、急いで兄から距離をとった。

よく見れば、あれだけの悪戯――で、済ませてよいかはともかく――を仕掛けてきたのに、ネヴァンディーンは未だ正座している。畳まれたままの足を眺めていると、ネヴァンディーンがにっこり笑った。

「ちゃんとイイ子で反省していたよ。そろそろ正座をやめていい？」

「反省してアレなの？」

「反省以上に心配したんだよ。怪物（モンスター）に襲われてたでしょう？　怪我確認の身体検査だよ」

「えっ、そんなことわかったの！？」

尖塔の一階に窓はなく、扉も閉まっていた。よしんば開いていても、角度的に森の中など見えようはずがない。

それなのにネヴァンディーンは事もなげに頷く。

「もちろん。僕が可愛い妹の気配を見失うわけないでしょう？」

頼りになると喜ぶべきか、ストーカー怖いと怯えるべきか。ネヴァンジェリンは悩んだが、いちおう前者にしておいた。そのほうが精神衛生上救われる。現実は変わらなくても。

「呼ばれたらすぐ助けに行こうと思ってたんだけどね。他の魔族が助けたみたいだったからさ。

魔王城内だし、てっきりチェーザレさんかと思ってたんだけどなー。まさかヴァルだったとは。ムカつく消えろ」

「最後に毒を吐くな！」

どうやら兄も、意外と口が悪いらしい。

ネヴァンジェリンもぽそっと毒を吐くほうなので、妙なところで似ていたんだなと思った。もうちょっと別のところで似ようよ。

「魔王様と会ったのもわかった？」

「基本男の区別はつかないけど、魔王様はわかったよ。粗相はしなかったかい、ネヴァンジェリン？」

ネヴァンジェリンは目を逸らした。答えにくいことを訊かないでほしい。

そんな妹をじーっと観察して、ネヴァンディーンは頷いた。

「なるほど。魔王様のお膝に座ってきたと」

「エスパー！？　心が読めるの、お兄様！？」

「そうだよ。だから、浮気したらすぐわかるからね」

青褪めるネヴァンジェリンに、ヴァーリヴァルグがつっこむ。

「いや、顔に書いてあったぞ」

「僕の妹は素直で可愛いな。ところでヴァル、ホント鬱陶しいから遠投していい？」

「いいわけあるか！　いい加減降ろせ！！」

兄につままれたままの仔犬がきゃんきゃんと暴れるのを見て、ネヴァンジェリンは慌てて兄から彼を取り上げた。

条件付で、正座解除を出す。

「ヴァーリヴァルグさんとケンカしない、あとセクハラもしないって約束するなら、正座やめてもいいよ」

「イジワルを言うんだね。ムリ」

「あっさり諦めないでよ！」

「誰しも我慢できないことってあるもんだよ」

それはヴァーリヴァルグに対する敵対心か、それともスケベ心かと問い詰めたい。

さらりとどっちもと返しそうな兄は、『この尖塔ではできるだけしない』と約束して立ち上がった。

場所限定の努力目標。近いうちにまた正座させることになりそうだ。

「勇者のところへ行くのかい？」

「うん……。怪我も気になるし、ご飯も食べさせないと」

この世界の人間の食事はしらないので、確認してから作ろうと思う。

チェーザレが用意した料理はイタリアンだったが、それが一般的なのだろうか。

（王子サマだし、もっとすごいの食べてるんだったらどうしよう。そもそもイタリアンなんて、パスタくらいしか作れないよ）

料理はそれほど得手ではないので、希望を叶えるのは難しそうだ。

しかし心を開いてもらうには、まず餌付け――もとい手料理作戦はかなり有益な気がするので、頑張ろう。

第一の問題は、食べられるほどの元気が彼に残っているかだが。

「思ったより元気そうだったけどね。勇者のところへ行くなら、僕も行くよ」

「ありがとう、お兄様」

「行こうか？」ではなく、当たり前に「行くよ」と言ってくれる

ところが嬉しい。
　にっこり笑って礼を言ったネヴァンジェリンは、しかし兄が尖塔の外へエスコートしようとしたことに首を傾げた。
「外から行くの？」
　勇者を閉じ込めた部屋は最上階にあるが、飛んでいくにしても外へ出る必要はない気がする。
　あっさりネヴァンディーンは答えた。
「うん。だって脱走したし」
「……は？　ちょっと待って」
　ネヴァンジェリンは兄の服をつかんだ。
　震える声で、おそるおそる尋ねる。
「脱走って言った？　ま、まさか、勇者が逃げ――」
「たよ。正座中だったから追わなかったけど」
「そこは追おうよ！？」
　勇者は思ったより元気なようです。

第十七話：不屈の勇者の屈服法・レベル1、抱擁

勇者を閉じ込めた最上階の窓から、白い何かが垂れ下がっている。
それはせいぜい二階分の高さにしかならないが、ちょうどそこには尖塔に絡まる蔦植物が届いていた。勇者はそれをつたって、十五階ほどの高さの尖塔から脱出したらしい。

（なんていらないガッツを出すの！）

おのれ勇者め、不屈がお前の代名詞か。
あっさり兄に敗れて囚われて、その後もう一度叩きのめされて痛い目をみたというのに、よくぞ脱出するだけの根性が残っていたものだ。
外から尖塔を眺めたネヴァンジェリンは、舌打ちがわりに数回、傘で地面を叩いた。

（肋骨ゼッタイまた折れてるのに！）

痛み止めと包帯では、しばらくは騙せても長くは保つまい。
魔王城には凶悪な怪物が多くいる。武器もなく手負い、空も飛べない人間が、長く無事でいられるわけがない。早く見つけて保護しなければ。

「お兄様、勇者の気配は探れる？」

ネヴァンジェリンの状況を察知していたのだから、エリオットの気配はわかるかと訊いてみた。
氷漬け中の騎士たちを除けば、魔界で唯一の人間だ。区別しやすいと思うのだが。

ネヴァンディーンは眉を下げ、申し訳なさそうに答えてきた。

「ごめんね、ネヴァンジェリン。男の尻を追いかける趣味はないんだ」

「ヴァーリヴァルグさん、お願いします！」

「任せろ」

深みのある低い声で頷いた人狼は、ぺたんとその場に伏せて匂いを嗅ぎ始めた。

やがて「こっちだ」と、お尻ふりふり森へ誘導し始める。

「見なさい、お兄様。これが頼れる男の姿よ」

「僕には愛玩動物のお散歩に見えるけどなぁ」

「黙れ、ネヴァンディーン！　頸動脈を喰いちぎるぞ！」

「後ろの穴に棒突っ込んでキャインキャイン言わせてあげようか？」

「ケンカしないの！」

騒がしい三人とは違い、森自体は静まり返っている。

鬱蒼と茂る灰色の草も、白い葉を散らす灰色の木々も、無言で共食いし合う虫たちさえいつも通りだ。

「森が静かってことは、まだ食べられたりしてないよね？」

「虫に動きもないしね。死んでたら群れなして齧りに行ってるでしょ。あ、酸系の怪物に溶かされてたら別か」

「やーめーてー、想像したくないー」

ドロドロに溶けて、骨だけ残った勇者様。

死因、兄に正座を命じたせい。イヤすぎる。

「勇者たちには加護がかかっている。しばらくは無事でいるだろう」

「加護？」

きょとんと首を傾げるネヴァンジェリンを、ヴァーリヴァルグが振り返る。

「知らないのか？」

「人間は弱くて瘴気で死んじゃうからね。それに魔王様のところへ来る前に、怪物と戦って消耗してたら無意味でしょ。だから聖女って呼ばれてる娘に、守りの力を付与してもらってから魔界にくるんだよ」

「へー、人間にも魔力を使える人がいるんだ」

ネヴァンジェリンは感心した。

そして少し落ち込んだ。二千人に加護を与えられる聖女と、マッチ一本に三分の自分。この差はなに。

「人間で魔力を有しているのは、ほんの一握りだけだけどね。僕たち魔族と違って、『創造』の使い方が上手いみたいだよ。あ、でもネヴァンジェリンはそっちのが得意だよね」

「マッチとホッチキスの針じゃ得意って言えないと思う……」

魔力の使い方は二通りある。

一つは魔族の得意技、破壊。とにかく壊す。全部壊す。魔力をぶつけて力づくで破壊。小説のような閃光や火花は出てこない。でも威力はマンガ級。

もう一つが、魔力を練って何かを『創造』する使い方だ。

こちらも小説と違って、呪文やなにがしかの法則なんかは必要ない。ただ『想像』して『創造』するだけだ。炎を生み出すのもこちらに入る。

ネヴァンジェリンがまだしも使えるのは後者だが、「最高傑作は

？」と訊かれて「箸と茶碗です」の現状では、口が裂けても得意とは言えない。

ちなみに破壊の力はおじーちゃんへの肩叩きレベル。自分が創ったものなら魔力に干渉して茶碗を砕けるが、それ以外なら紙の皿でも破けない。泣ける。

「おい、ネヴァンディーン」

ヴァーリヴァルグがぎろりと丸い目で兄を睨んだ。

「お前は妹に、そんなことも教えていなかったのか！？」

「そんなことって？」

「加護と聖女の話だ！　まさか、人界について何も――」

「教えてないよ。行かないのに知ってどうするの？」

不思議そうに首を傾げるネヴァンディーンに、ネヴァンジェリンは納得する。

（お兄様って自分の興味のあることしか話さないもんね）

訊けば説明してくれるが、常識を理由に教えたりはしない。

舌打ちしたヴァーリヴァルグが忌々しげに唸った。

「魔王様のことも教えていなかっただろう。お前はそうやって、その娘の世界を狭――」

「あ、ネヴァンジェリン。あそこに君の友達がいるよ」

兄が森の一角を指差した。

つられてそちらを見ると、小さめの岩の上に黒猫の姿。

「ルゥ！」

ネヴァンジェリンはパタパタとそちらへ駆け寄る。
ルゥは右だけのヘーゼルの目で彼女を見下ろすと、少しだけ不満そうに尻尾で岩を叩いた。

「なにその尻尾。置いてったのはルゥじゃない」

魔王様のところへ案内されたことを思い出し、むぅと唇を尖らせる。
おかげでヒドイ目に遭った。怒るのはネヴァンジェリンであって、ルゥではないはずだ。

（そういえば、ここ）

魔王様と遭遇した湖のすぐ近くだ。あと二、三本木を越えればたどり着く。
ルゥは音もなく岩から飛び降りて、数歩歩いて振り返った。
ついて来いと言いたいらしい。

「まさか、また魔王様のところ？」

多少の嫌味を込めて訊いてやると、少し強めに尻尾が地面を叩く。
追いついてきたネヴァンディーンが言った。

「いいから来いって態度だね。魔王様なんかどうでもいいっていうか」
「相変わらず気配のない、生意気な猫だな」

ヴァーリヴァルグはふんふんと鼻を鳴らした。

「しかし、猫の示す方向に勇者の気配がある。
案外その猫は魔王様に遭遇したからではなく、勇者を見つけて姿を消したのかもしれんな」
「ええっ！？」

あのとき勇者が近くにいたのだろうか。
ネヴァンジェリンもヴァーリヴァルグも、魔王様の姿に驚いて周囲に注意を払っていなかった。

（そういえばエリオット王子、どうして逃げ出したんだろう）

ネヴァンジェリンが泣き、兄が暴行した時点で、交渉不成立と判断したのはわかる。しかし、仲間を見捨てるわけにはいかないと、彼はあのとき言い切っていた。

（もしかして、騎士隊の人たちを自分で助けるため？）

見上げれば木々の隙間から尖塔が見えた。その最上階ならば、湖を一望することもできただろう。
そして勇者は魔王様の姿を見つけた。

（ま、まさか、魔王様に直接交渉するため！？）

ネヴァンジェリンは頭を抱えてその場にしゃがみ込んだ。
怒っていないで、すぐ話をして誤解を解くべきだった。彼が脱走したのは、七割がたネヴァンジェリンのせいだ。一割は追わなかった兄のせいで、二割は彼の自己責任。

「ルゥ！　エリオット王子の居場所を知ってるの！？」

立ち上がって詰め寄れば、「知ってるから早く来い」とばかりに、また尻尾が振り下ろされる。
頷くと、ルゥは走りだした。そのあとをネヴァンジェリンはパタパタと追う。

「あまりうるさいと、勇者に気づかれるのではないか？」
「そうだねぇ。逃げられると面倒だし、静かに走ろうか」

ネヴァンディーンがひょいと片手で妹を抱き上げる。
そのまま猫の足取り（ルゥ）を真似るようにして、仔狼と一緒に森を駆け始めた。
ネヴァンジェリンが走らないだけで、移動速度は一気に上がった。スピードを上げたルゥは軽く湖を半周し、そこから廃墟となった建物の方へと進んでいく。

（この廃墟って、遺跡……？）

複雑な模様が刻まれた壁や柱が、白い植物に覆われて朽ちている。
魔界では珍しい凝った装飾で、ネヴァンジェリンのイメージ的には教会を思い出す。

（でも魔界に教会なんかないよね）

元はどんな建物だったのだろうか。
魔王様のハーレム宮殿を思い浮かべて、即座に脳内否定した。魔王様はそんなに不潔じゃないもん！　……たぶん。
やがてルゥが足を止めた。
この周辺は特に瓦礫が多い。ネヴァンディーンは適当に足で瓦礫を避けて、そこに妹をそっと降ろした。

ヴァーリヴァルグがきょときょとと辺りを見回す。勇者が近くにいるのは分かるが、場所が特定できないらしい。これも加護の効果なのだろうか。

ルゥがじっとネヴァンジェリンを見上げる。

それからゆっくりとした足取りで歩き始めた。そこで待てという意味だ。兄と仔狼を従えて待機する。

山となった瓦礫の向こうで、何かが動く気配があった。

「……また来たのか、不吉な猫め。私に構うなと言っただろう」

聞き覚えのある声が、邪険なセリフでルゥを追い払おうとする。

ルゥは足を揃えて瓦礫の横に座った。

伸びてきた手がルゥを突き飛ばそうとして——迷う素振りを見せた後、腕の主が顔を出す。

「私は餌など持っていない。早く行け。……主人にここを知らせるなよ」

青褪めた秀麗な顔立ちの男が、優しくルゥの頭を撫でた。

それを見た瞬間、ネヴァンジェリンは叫んでいた。

「いたー！」

同時に走っていた。

ぎょっと目を剥くエリオット。逃げようとしたところで怪我が痛んだのだろう。顔を顰めて動きが止まる。

走る勢いそのままに、ネヴァンジェリンは彼の胸へ飛び込んだ。

「生きてた！　よかったぁー」

「——————っ！！」

ぎゅーっと胸に手を回して抱きつく。
押し倒す形になってしまったが、それより安堵の方が大きかった。

（死んでたらどうしようかと思った！！）

人間（ひと）が死ぬのは見たくない。
たとえいまは魔族でも、ネヴァンジェリンの中には確かに渡辺凛（にんげん）が残っている。決して記憶だけではない。それがこの想いの証明だった。

（エリオット王子とちゃんと話そう！　もう二度と、こんな危ないことさせないように）

決意を固めたネヴァンジェリンの身体が、ひょいと後ろから抱き上げられる。

「よかったね、ネヴァンジェリン。でも離れようねー」

にっこり笑って歩み寄ってきた兄が、両脇の下に手を入れて、ネヴァンジェリンを持ち上げていた。

「ちょっと、お兄様――」
「でないと勇者くん、死んじゃうよ？」

僕はぜんぜんいいけどね、そう付け足したネヴァンディーンが、楽しそうにエリオットを指し示す。
慌ててそちらへ向き直れば、ぐったり気絶した勇者の姿。
そういえば彼は、兄に肋骨を折られて――

「きゃぁあああっ！！　ごめんなさいーっ！」

ネヴァンジェリンの謝罪が廃墟に響き渡った。

第十八話：不屈の勇者の屈服法・レベル2、宣戦布告

治療の後、ネヴァンジェリンはエリオットに土下座していた。

「ごめんなさいごめんなさい、ごめんなさいぃ～！！」

肋骨五本に右腕一本、左指三本の元大怪我人は、隠しようもない不信感を顔に貼り付けて数歩後退った。

「なんだ、その体勢は。魔界流の揶揄のポーズか？」

由緒正しきジャパニーズ流完全謝罪ポーズに何て言い草だ。

しかし彼の不信感は正当なものなので、ネヴァンジェリンは「最上級の謝罪ポーズです」と訂正だけした。

（ちゃんと手当てしたんだから、そんなに怒らなくてもいいじゃない）

これも言わないでおく。

不本意ではあるが、エリオット自身からもらった精気と魔王様に分けていただいた食事のおかげで全ての骨を繋ぐことができた。『治癒』とは違うので痛みは残るが、それでもかなり改善されたのだろう。立ち上がり、逃げ場はないかと周囲の状況を探っている。

「エリオット王子、話を聞いてください。わたしはあなたに危害を加えるつもりはないし、見返りが欲しくて助けると言ったわけではないんです！」

むしろ大変失礼なことをされたわけだが、それでも見捨てるつも

りはない。
エリオットは冷たい目で言った。
「魔物が見返りもなく人間に手を貸したりするものか」
「いや結構するけどね」
さらりと否定したのはネヴァンディーンだ。
ヴァーリヴァルグも頷いている。
「そもそも人間が、我ら魔族を相手に何を提供できると言うんだ」
「モノや精気なら奪えばいいんだし、わざわざ協力仰いだりしないよ」
フォローと言えるのか、甚だ疑問であることを言う。
さらに二人は言った。
「生かしておいたほうが面白いとか、うわバカなことしようとしてる、やらせてみよ～って思ったときに手を貸すんだよ」
「その後どうせすぐ死ぬしな」
「……そういう目論見か」
「違います違います！　確かに、魔王様を倒そうなんてバカじゃないの助けるの面倒くせぇとか思ったりはしましたけど、わたしは面白いなんてこれっぽっちも思ってません！！」
エリオットの視線がさらに冷たくなった。何故だろう？
実際のところ、人間が魔王様に挑もうとすること自体、バカじゃないのかとネヴァンジェリンは思っている。何度も挑んできては、その度魔王様のところへ到達することもなく全滅したと聞いた。同じことを繰り返すのはバカの所業で、傍迷惑な集団自殺に過ぎない。
――他人事で済むのなら、そう割り切り見ないフリもできた。前

世にて、テレビの死に無関心であれたように。
けれど彼らはネヴァンジェリンの目の前で自殺しようとする。
自殺の介錯は自分の同族で、それを楽しみ待ち望んでいる。

（この世界はバカばっかりか！！）

無謀で死ぬ奴も必要ないのに殺す奴もバカだ！　全員バカばっかりだ！

人生なんて平穏が一番。地味に慎ましく健全かつ適当に、そんな風に過ごせるのが最上級。多少の屈辱なら受け流せ。受け流せないなら、流れを変える方法を考えろ。どうしてそこで直進して自殺に走るの！？　魔族は脳筋ばかりなんだから、他にやりようあるでしょう！

そうした思いを厳重にオブラートに包んで、ネヴァンジェリンはうるうる目で懇願した。

「あえて見返りを言うのなら、わたしの知るところで死なないでください。あなたたちが生きるために、一番いい方法を一緒に考えましょう？　戦う以外の方法を」

ええホント、真面目に頭を使っていただきたい。

両手を組んでお願いした平和主義者の主張を、しかしエリオットは信じない。不審の目をルゥにまで向ける。

「お前がこの魔物に知らせたのか。やはり始末しておくべきだった」

「ルゥに何かしたら、わたしが赦しません！」

立ち上がり、両手を広げてルゥの前に出る。

キッと睨みつけるネヴァンジェリンに、勇者は言った。

「使い魔を守るために私を殺すか？」
「ルゥは使い魔じゃなくて友達です。
大切なものを守るために殺すというのは確かに選択肢の一つですけど、だからこそ安易に選ぶつもりはありません」
「その前に僕にちょん切らせるって手があるもんね」
「両手足をねじ切っておけば無害になるぞ」
「二人はうるさいからあやとりでもして遊んでなさい！」

服についた紐飾りを取って、ネヴァンディーンに投げつける。
受け取った兄はヴァーリヴァルグの前に正座で座り込んだ。

「あやとり知ってる？」
「何だそれは」
「指先の拘束ごっこ。ネヴァンから教わったんだ。なんかね、こうやってー」
「だいたいですねぇ！」

ネヴァンジェリンは二人の魔族を指差した。

「こんなバ――もといノリだけで生きてる種族相手に、命懸けで張り合わなくてもいいでしょう！　人生の無駄遣いだと思わないんですか！？」

さすがに微妙な光景だったらしく、言葉に詰まるエリオット。
さらに畳み掛ける。

「自主的に魔界へ来たのか命じられてかは知りませんが、仮にも二千人の命を預かっているのなら、戦う前にそれ以外の方法を探してください！
今回のことにしてもそうです！　あんな危険な脱走の仕方をして、

落ちたらどうするつもりだったんですか！？　そのあと怪物に襲われたら？　あなたが死んだら、誰が仲間の騎士たちを助けるんです！」

エリオットが死んでもネヴァンジェリンが手を尽くしただろう。けれど彼はそれを信じない。態度と言葉でそう断言したはずだ。

「あなたが死んだら、万一にも彼らを助けるために動きそうなのはわたしだけです。わたしに期待しての行動ですか？　それなら最初から信じてください。違うなら、もっと慎重になってください」

「……私はお前の交換条件に乗ろうとした。拒絶し、私を見捨てて行ったのはお前だ」

「見捨ててなんていません！　わたしはあなたのしたことに怒って出て行ったんです！」

「同じことだろう！」

「ぜんぜん違いますよ！　何に対して怒ったと思ってるんですか！？」

やはり問題は、淫魔ゆえの誤解に戻ってくるのだ。

目の端で確認すれば、何故かネヴァンディーンがにやにやとこちらを眺めていた。ヴァーリヴァルグは紐に絡まってじたばた奮闘している。……やはり犬の足であやとりは無理があったらしい。

そしてエリオットは微妙に目を逸らし、屈辱と羞恥の混ざった複雑な表情で小さく答えた。

「私の口付けが不満だったからだろう……」

「ちがぁーーうっっっ！！」

絶望的なまでに違う。

思わずネヴァンジェリンは地団駄を踏んだ。

「キスが不満だったんじゃないです！　キスされたことが不満だったんですっ！」
「魔族は口付けをしないのか？　わ、私に、いきなり事を始めろというのか！？」
「何を始めるつもりですか何を！　わたしはそーいうのはいらないんですってば！　愛のないお付き合いは却下です！　愛があっても最初は手を繋ぐからです！」
「魔物など愛せるものか！」
「だから、あなたとそーいうお付き合いになるのは望んでないんですってば！！」

興奮しすぎて息が荒くなる。
気を落ち着けようと、ネヴァンジェリンは胸に手を当て深呼吸をした。

（お、落ち着きなさい、ネヴァンジェリン。ちゃんと話すって決めたでしょう。わたしは淫魔だけど、人間と同じ貞操観念があるんだって説明しなきゃ――って、この世界の人間の貞操観念って、どうなってるんだろう？）

魔界以外知らない――魔界のこともあまり知らないが――ネヴァンジェリンには、そこら辺がどうなっているのかが分からない。人間と同じといって通じるのか。それともヴァーリヴァルグのときのように、一から話すべきか。
ネヴァンジェリンが考え込んでいる間に、エリオットも何やら考えたらしい。最悪の答えを持ってきた。

「私を望んでいない――ということは、騎士隊の誰ぞを望んでいるのか！？」

ぶちりと、頭の中で何かが切れた音がした。

（……ああ、そう。どうしてもわたしを痴女にしたいわけね）

ふつふつ怒りが煮えたぎってくる。

勇者並びにそのお供の命を助けるために、嫌なのに狩りに参加して、怖いのに魔王様に陳情までした。

それも全て下心のためだというのか。

そーいう行為をするために、ここまで頑張っているのだと、そう言いたいわけか。

（ふ・ざ・け・る・な・よ）

このバカ勇者め！

思わず靴を脱いで、エリオットの顔に投げつける。

「なっ！　何を――」

「決闘を申し込みます！」

容易く靴を受け止めた勇者に、ネヴァンジェリンは傘の先端をつきつけた。

そして続ける。

「一対一の勝負です。あなたが勝てば、魔王様に逆らってでも騎士隊とあなたを人界へ逃がします。わたしが勝ったら、話しを最後まで聞いた上で謝ってもらいます。そして、あなたたちを正当な手段で解放するために、わたしに協力してもらいます！」

エリオットは怪訝そうな顔になった。

ネヴァンジェリンがありえないほど弱いことは、最初に会ったときに彼にも分かっている。
ぎょっと目を剥いたヴァーリヴァルグが、未だに紐に絡まったまま叫んだ。
「やめろ、ネヴァンジェリン！　お前ではその男に――いや、人間の子供にも勝てん！」
「子供にくらい勝てますよっ！　……たぶん」
この世界の子供には会ったことがないので断言できないが、それでも彼に負ける気はなかった。
琥珀の瞳で真っ直ぐに、エリオットの翡翠の目を見上げる。
「勝負はいまから。あなたの状態は考慮しません。武器も与えません。勝負の後の物言いも却下します。
王子としての誇りと人間の尊厳を賭けて、この勝負に乗りますか？」
エリオットの怪我はネヴァンジェリンが処置したが、動きの違和感は残っているだろう。痛みもかなり軽減されたとはいえあるはずだ。
――それでも、エリオットは確実にネヴァンジェリンより強い。
「……私は剣がなくとも戦えるだけの嗜みがある。一対一だと言ったな。そこの男には手出しさせぬと誓えるか。自分だけの力で戦うと。負けたときは、先の約束を必ず守ると。
魔族としての誇りと己から勝負を挑んだ者の矜持を示し、自らの王に誓えるか！？」
魔族は魔王様への誓いを謀らない。元より嘘を吐くことは少ない

が、魔王様への誓いは絶対のものである。
ネヴァンジェリンは頷いた。

「いいでしょう。魔王様と兄ネヴァンディーンに誓います。わたしはわたしの力だけで戦います。約束は必ず守ります」
「ならば私も亡き父母と、聖王に誓おう。聖王は人間の守護者。誓いを破れば、私はまさに人間としての尊厳を失う」
「やめさせろ、ネヴァンディーン！　勝てるはずが――」
「勝つよね、ネヴァンジェリン？」

ヴァーリヴァルグの言葉を遮って、琥珀の瞳を煌かせたネヴァンディーンが楽しそうに訊く。
ルゥは足を揃えたまま、静かに成り行きを眺めている。

「悶絶させて地面に転がしてやります」
「じゃあ僕も魔王様と、妹ネヴァンジェリンに誓うよ。手出しはしないし口出しもしない。妹が負けたら、僕もその約束を守るため力を尽くそう」

あっさり誓いを言ってのけた兄に、ネヴァンジェリンは微笑する。
キッと表情を引き締めてエリオットに向き直り、ネヴァンジェリンは傘を振り下ろした。

「勝負です！！」

第十九話：不屈の勇者の屈服法・レベル3、拷問

戦いは二秒で終わった。
地べたに這い蹲って呻き声を上げる敗者を見下ろして、勝者は腕を組んで鼻を鳴らす。

「ふーん、だ」

ぷいと顔を逸らせば、乱れることさえなかった黒髪が肩に触れた。
わざとらしく大仰な仕草で払って、傘の先端を敗者の額に突きつける。

「わたしの勝ちです」

賭けに従ってもらいますからね、と付け足せば、勇者は倒れたまま憎々しげに魔物の娘を睨みつけた。

「卑怯、者がっ……！」
「あなたが単にバカなんですよ」

ネヴァンジェリンはきっぱり言い捨てた。
あっという間に終わった決闘を、横で見ていたネヴァンディーンが爆笑する。

「あっはっは！　ネヴァンは怒ると容赦ないよねー」
「当然です。少しはいい薬になったでしょ」

ヴァーリヴァルグが驚きの目で兄を見上げた。

「お前はこうなることが分かっていたのか？」
「ううん、ぜんぜん」
あっさり否定して、でもと笑う。
「ネヴァンジェリンは意外とずるいからね。自分が不利になる勝負は絶対受けないでしょ」
呻いていたエリオットが突然動いた。
折れた右腕で足を払い、お尻から転んだネヴァンジェリンの首を、青く腫れた力ない左指で絞める。
苦痛で青褪めたエリオットに、ネヴァンジェリンはにっこり笑った。
「別にエリオット王子の勝ちでもいいですよ？　わたしの目的は最初から、あなたたちを助けることなんですから」
勝とうが負けようが、ネヴァンジェリンがすることに変わりはない。彼らを無事逃がすために、全力を尽くすだけだ。
魔王様のお言葉に逆らって、ご意見を翻してくださるよう進言までしている以上、負けたときの誓いはすでに実行済みとも言える。
――けれど怒っていたので、首を絞められたまま足を上げ、肋骨を狙って蹴ってやった。
「～～～～っ！！」
途端、手を離して悶絶するエリオット。
もう一度鼻を鳴らしてやろうかと思ったが、その余裕のない表情に心配になる。ちょっとやりすぎたかも。

「勝負はついたってことで、いいですよね？　ね？　わたしの勝ちです。文句は聞きませんよ。もう一回処置しますから、おとなしくしてください」

暴れる身体を押さえて、頭を膝の上に乗せる。

未だ根性だけはあるエリオットが、抗うように膝に爪を立てた。

「いたっ！」

「ちょっと、僕の可愛い妹の身体に君の徴なんてつけないでくれる？」

すかさず勇者の後頭部を拳骨で叩くネヴァンディーン。

べしゃりと膝の上に潰れたエリオットは、顔だけ動かして兄を睨んだ。

「貴様は、手を、出さない約束だ……！」

「どう見たって勝負はもうついたでしょ。ネヴァンジェリンの白い太ももに、荒い息で顔乗せながら何言ってるの妬ましい。

聖王様に誓ったんだから、物言いなしで負けを認めなよ、人間として、ね」

にっこり言われたのがトドメだった。

屈辱に歯噛みしつつも抵抗をやめ――ただし頭を無理やり膝から降ろしてから――、エリオットはおとなしく横になる。

ほっと安堵の息を零して、ネヴァンジェリンは魔力を流し込んだ。

一つ一つ、元のように骨を繋いでいく。

「……私が逆らうことを見越して、そのような治療をしていたのか？」

「そんなわけないじゃないですか」

不信感あふれるエリオットの言葉に、ネヴァンジェリンは頬を膨らませる。

「反抗的な人とそうでない人用の手当てなんてありません。魔力はそーいうものだってだけです」

勝負が始まったと同時に、エリオットは一気に距離を詰めてきた。拙い身のこなしのネヴァンジェリンが、まともに戦えるはずがない。ならば考えられる戦略は、空を飛んで頭上から魔力で攻撃することだ。

そう考えたらしいエリオットは、飛び立つ前に勝負をつけるつもりのようだった。

まあ、実際のところは、空を飛べば魔王様の膝に落ち、破壊の力は紙の皿以下なネヴァンジェリンなので、それは絶対取れない戦略だったわけだが。

エリオットの全身に力が入った瞬間を狙い、ネヴァンジェリンは自分の魔力を破壊した。

紙の皿さえ壊せなくても、自分の『創造』したものなら『破壊』することができる。だから、彼の骨を繋いだ針全てを、もっとも負荷がかかったときに壊してやった。

結果、宣言どおり勇者は悶絶して地面に転がったのである。

「この状態で一ヶ月も安静にしてたら、自然に骨が繋がりますよ。そうなったらあの手段は使えません。

言ったでしょう？　勝負はいまから。あなたの状態は考慮しません。いまの状態のあなたになら勝てるって意味です」

逆に言えば、いまの状態以外では勝てない。

全ての骨を繋ぎなおして、ネヴァンジェリンはふぅと吐息を零し

た。魔力の使いすぎで、さすがにお腹が空いてきた。勇者を叱ったら一緒に何か食べよう。

「賭けの内容を覚えていますよね？
勝っても負けても、わたしはあなたたちを助けます。助かるために、あなたも協力してください」

動けるようになった勇者は、戸惑いの表情を浮かべて魔物の少女を見る。
いま改めて、どちらの誓いでも助けると宣言していたことに気づいたらしい。

「何故だ……？　何故私たち人間を、魔物のお前が助けようとする？」
「あなたがルゥを殺さなかったのは、何故ですか？」

ネヴァンジェリンは逆に尋ねた。

「ルゥがわたしに関係があることは、最初からわかってましたよね？　それでもあなたは殺さなかった。それと同じです」

前世を話しても信じてはもらえないだろう。
だからネヴァンジェリンは、元渡辺凛（ネヴァンジェリン）としての価値観で答える。

「殺すのに理由は必要ですが、助けるのに理由なんてどーでもいいんですよ。
助けたいから助けるんです。黙って助けられなさい、バカ勇者」

ばんと地面を平手で叩いた。
ネヴァンジェリンは正座して、に～っこりと笑顔を浮かべる。

「何はともあれ勝者はわたしです。さあ、お説教の時間ですよ、王子サマ。正座でここにお座りしなさい」
「星座？」
「わたしと同じ座り方です。なに空を見上げてるんですか！」
エリオットはネヴァンジェリンの座り方を確認し、嫌そうに眉を顰めた。
「罪人座りか。私にそのような――」
「これは由緒正しきジャパニーズお話しを聞くポーズです！　いいからお座りっ！！」
もう一度地面を叩けば、エリオットが渋々正座をする。
その背後にいたネヴァンディーンは静かに静かに場を離れ、ルゥはひらりと姿を消し、ヴァーリヴァルグは肉球で耳を押さえて伏せのポーズになった。
こほんと一つ咳払いして、ネヴァンジェリンは可愛く微笑む。
「では、清く正しい男女のお付き合いについてお話します」
お説教は三時間に及んだ。
「というわけで、イヤよイヤよも好きのうち、という言葉は男の迷信であって、現実はただキモイんだよ勘違いヤロウってなものなんです。ですから――」
「わ、わかった。お前の主張はよくわかった。だから、そろそろっ……！」

半ば地面に崩れ落ちながら、ぷるぷる震える足を押さえるエリオット。
ネヴァンジェリンはつんとその足を突いてやった。
「ぅあっ！！」
「あ、いい反応」
ばしばし地面を叩いて潤んだ目を向けてくる。
（いやん、ちょっと萌え――もとい、燃えるかも）
「えいっ」
「あっ！」
「ここら辺とかぁ～」
「待っ――！」
「こ～んなとこもグリグリ～って。あは、涙目。痛い？」
「げ、限界だ！　頼む、もう――！」
「我慢のない男はモテませんよ？　頑張って、王子サ・マ」
「っ……！」
足を庇って逃げようとする男の姿に、ネヴァンジェリンは左手を頬に当て、右手をわきわきさせながら熱い息を吐いた。
「トゲとか痺れた足を見ると、こううずうずってするんですよね～。か・い・か・ん」
「実はドSだろ、貴様！！」
半分泣いちゃってるエリオットの言葉に、ネヴァンジェリンはムッと頬を膨らませる。

「魔界最弱にして平和主義者なわたしになんて失礼なこと言うんですか。血を見るのも暴力も、わたしは大嫌いです」

前世幼少時、近所の男の子を泣かせまくっていた過去は黙っておく。あれは向こうが勝手に泣いたんだよ。

抗議を込めてふくらはぎをつねってやれば、エリオットは声にならない声で叫んで、ビクンと跳ねて地面に倒れた。

ヴァーリヴァルグがぼそりと呟く。

「いま初めて、お前がネヴァンディーンの妹なのだと実感した」

「言い回しがちょっと僕に似てたよね」

「うわ、それはヤバイ。自重します」

ネヴァンジェリンは慌てて居住まいを正す。

こほんと咳払いを一つして、そっとエリオットの顔を覗き込む。

「そんなに暴れて、身体は大丈夫ですか？　安静にしてなきゃダメですよ」

「いまさらお前がそれを言うか……！？」

「言います」

遺恨はきっちり果たさねばならない。

信じてもらえなかったのは悲しかったし、淫魔だからと誤解されるのもムカついた。脱走で心配したし、あのときのキスのことは、とてもとてもとーっても根に持っている。

「エリオット王子、もう一度だけ正座してください」

「断る！　あんな拷問は、もう――」

「すぐ終わりますから」

首を振って拒もうとした彼に、両手をわきわきさせてお願いする。
エリオットは悲壮な顔つきで正座姿勢をとった。

「両手を前についてください」

ちらちらネヴァンジェリンの手を気にしながら、彼は素直に従う。
少し下がった金の頭を、ネヴァンジェリンは片手で押さえつけた。

「はい、ごめんなさ～い」

頭を押さえられたまま、しばらくエリオットは硬直していた。
数秒後、ようやく我に返って押さえつける手を振り払う。

「何をっ――！」
「わたしもいろいろごめんなさい」

顔を上げたエリオットに、今度はネヴァンジェリンが頭を下げた。

「これは土下座。誠意を込めた最上級の謝罪ポーズです」

身を起こし、ぽかんとこちらを眺めるエリオットに笑いかける。
仲直りするときは、きちんとお互いに謝り合うこと。ネヴァンジェリンはそう決めている。

「これでお相こです。
絶対助けますから、一緒に頑張りましょうね、エリオット王子！」

屈託なく微笑むネヴァンジェリンを、エリオットは呆然とした様子で見下ろしていた。

やがて戸惑うように視線を揺らし、小さな声で「ああ……」と頷く。

ネヴァンジェリンはますます笑顔になって、そっと彼に手を伸ばした。

「えいっ」

「っ……！！」

痺れた足を、もう一度だけつっつく。途端ビクリと飛び跳ねるエリオット。

これで本当にお相こにしてあげる。

第二十話：不信への謝罪と、新不信疑惑について

エリオットへのお説教を終わらせて、立ち上がろうとしてみれば、思ったより空腹がひどいことに気づいた。

「お腹空いたよぅ……」

ネヴァンジェリンはお腹を押さえて情けなく呟く。
きゅうとお腹も情けなく鳴いた。

「魔力の使いすぎだね」

ネヴァンディーンがそう言って、立てた片膝の上に妹を座らせる。
決闘前に投げつけた靴を履かせなおし、歯で己の指を切って差し出してきた。

「お兄様、わたしは――」
「飲みなさい」

拒もうとしたネヴァンジェリンの唇に、血玉の浮き出た指先を押し付けてくる。

「いま倒れたら困るでしょう。勇者サマの世話を、全部僕たちに任せるつもり？　どうなってもしらないよ」

そう言われれば、拒否することは許されない。
ネヴァンジェリンは渋々兄の指を口に含んで血を舐めた。

「何をしている？」

エリオットが戸惑ったように訊いてくる。

「精気の補充。君の治療で力を使いすぎて、倒れそうだったからね」

淫魔としての食事をしないネヴァンジェリンは、食物から精気を摂取する。

しかしこれは体質的に、とても効率が悪いのだ。満腹になったと思っても、またすぐ空腹を覚えるし、そもそも満腹になること自体が滅多にない。

貧血を起こして倒れるたび、兄はこうして直接精気を分けてくれる。

「男女の違いはあるけど、僕たちは双子だからね。血液からでも精気を分けてあげられる」

「普通はできないのか？」

「淫魔族は本来、性的に興奮した異性の体液から精気を奪う。ただの体液では意味がない」

説明したのはヴァーリヴァルグだ。ネヴァンジェリンの足元へ来て、心配そうに見上げてくる。

その頭を一撫でし、ネヴァンジェリンは手を振った。

自慢じゃないが、貧血でふらつくのには慣れている。大事をとっただけで、まだ倒れるほどではなかったから問題ない。

「偏食してないで、おとなしく僕ら流の食事をしてくれれば一番いいんだけどね。どうせ精気をあげるなら、そのほうが僕も楽しいのに」

からかうように、ネヴァンディーンが太ももを撫でる。

抗議と感謝を込めて、ネヴァンジェリンは口に含んだ兄の指に歯を立てた。

「ありがとう、お兄様。もういいわ」

「どういたしまして」

くすくす笑いながら首筋に手を当て、互いの額をくっつけて熱を測る。

精気を分けてくれたあとの、兄のいつもの行動だ。そのあとしばらくは片腕で横抱きにされ、自分で歩かせてはもらえない。

いつものことではあるのだが、他人の目があると少し恥ずかしい。

「そこまでして何故、淫魔としての食事を拒む？」

抱き上げられたネヴァンジェリンに、エリオットが尋ねてくる。

その質問にはヴァーリヴァルグも興味があるようで、じっと蒼い目で見上げてきた。

「私たち人間には迷惑なことだが、それが淫魔族の生態だろう」

「意地です」

ネヴァンジェリンだってよく分かっている。

前世の自分を捨てれば——渡辺凛を捨てれば、今世の自分はもっと生きやすいはずだ。

元人間としての価値観を捨てて、他の淫魔族の真似をして、そうしていつかなりきってしまえば、兄にかける迷惑も半分以下に減るだろう。

（でもそうしたら、わたしはわたしでなくなっちゃう）

「意地に合理性なんてあるもんですか。不合理上等！　途中で曲げるなんてカッコ悪いですから、一度張った意地は最後まで貫きますよ。ええ、意地で」
「ネヴァンジェリンは弱いのに、妙に意思の強いとこあるよね。頑固っていうか」
「だってお兄様」
ぶうとネヴァンジェリンは頬を膨らませた。
「肉体的に弱いのに心まで弱かったら、よってたかって喰われるだけだと思うんですが！」
「うん、喰われるね。性的に。まず僕に」
「ネヴァン兄様がお兄様な時点で、わたしの人生二択しかないもんね！」
すなわち、前世の価値観を持った今世の自分でいるか、ネヴァンディーンに喰われるかだ。
……人生開始時から茨の道か貞操放棄の二択。つくづく淫魔として生まれたのが運の尽きな気がする。
（でも負けない！）
前世で守り抜いたこの貞操、今世で喰われてなるものか。
なんとしても守り抜いて、いつか素敵な彼氏をゲット――は、できない気がするなぁ、この兄がいる時点で。
「とにかくエリオット王子、意地でもあなたたちには生きて帰ってもらいますから！　頑張るから、頑張ってくださいね？」
「分かった」

エリオットは一つ頷いて、自分の胸に右手を当てた。

「魔物を信用する気はないが、お前の誓いと意地は信じよう。
――誤解し、不埒な真似をしたことを正式に詫びる。すまなかった」

胸に手を当てたまま、きっちり四十五度腰を曲げて目を伏せる。

「これが私の国流の謝罪だ。受け取ってもらえるか？」

「へ？　あ、はい。ご丁寧にどうも……」

思わずこちらも頭を下げる。

クスリと、初めてエリオットが笑った。

「君は、どうにも魔物らしくないな」

そう言って、翡翠の瞳を柔らかく和ませる。

（お前じゃなくて君って！）

美形で笑顔でその呼び方はどうなんだ王子サマ。

険悪な雰囲気が消えると、その秀麗で華やかな美貌が際立った。

魔界に似つかわしくない、清廉さを感じさせる微笑――

「分かってもらえてよかったね、ネヴァンジェリン」

熱くなった頬を両手で隠すネヴァンジェリンに、兄がにっこり微笑みかける。

「ところで、不埒な真似ってキスだけだよね？　ちょっぴり精気も

らってたみたいだけど、それ以上はされてないよね？」
「当たり前ですっ！」
ただでさえ頬が熱いのに、これ以上赤面するようなことを訊かないでほしい。
ところが、何故かヴァーリヴァルグが半眼になってエリオットを見上げた。
「口付けだけで精気を得たのか」
「え？　はい。もらいました、けど……」
「つまりはいきなりベロちゅーだよね」
兄の言葉にネヴァンジェリンは固まった。
そういやそうだ。
「僕たち淫魔は性的に興奮した異性の体液から精気を得るからねー。誤解してたとはいえ、君って結構思い切りいいね」
ぽんと肩を叩かれて、エリオットの頬が朱に染まる。
ネヴァンディーンの手を振り払い、うろうろ視線を彷徨わせつつ、小さな声で言い訳した。
「その、淫魔が体液から力を得るのは知っていたし、いきなり事を始めるよりは、まだ口付けのほうが……」
「うん。でも、性的に興奮してないと、無意味なんだけどね？」
ネヴァンジェリンは半眼になってエリオットを睨んだ。
ぐるるとヴァーリヴァルグが唸る。
気圧されたように数歩後退ったエリオットは、自棄になったようにきっぱりと叫んだ。

「あ、あの状況下で女淫魔（サキュバス）といて、興奮しない男は単なる不能だ！！」

「ヴァーリヴァルグさん、噛み付いちゃえ！」

「任せろ！」

エリオットの悲鳴とネヴァンディーンの爆笑が響き渡った。

第二一話：不認識の改訂と、押さえるべき認識

「まあ、淫魔の体臭には催淫効果があるから、実は勇者サマの言葉は正しいんだけどね」

ネヴァンディーンはそう言って、あー面白かったと笑いを収めた。

そのときにはすでに、勇者は足首をがっぷり仔狼に噛まれていた。

噛み跡を押さえる手の隙間から、血がダラダラ流れている。

「そういうことは、もっと早く言え……！」

恨みがましくエリオットが唸る。

知らなかったネヴァンジェリンは、びっくりして兄の顔を見上げた。

「え、そうなのお兄様！？」

「そうだよ。淫魔にとって性交は、食事であり狩りだからね。体質的に獲物を惹きつけやすくなっているんだ。

でも僕は同じ淫魔だから大丈夫。他の男には近寄っちゃダメだよ。挑発しちゃうからね」

ネヴァンジェリンはうんうん頷いた。それは大変だ、気をつけなければ。

思わずぎゅーっと兄にしがみつけば、ヴァーリヴァルグが抗議の声をあげる。

「ネヴァンディーン！　そうやって自分の都合のいいように教えるな！」

「嘘は言ってないよ？」

「事実でもないだろう！」

ぷんすか駆け寄ってきた仔狼は、ネヴァンジェリンに説明する。

「淫魔族は確かに異性を惹きつけるが、襲われることはまずない。何故なら、淫魔との交わりは破滅を意味するからだ」

曰く、淫魔との交わりは天国から地獄への直通便。あまりの快楽に気が狂うこともあれば、精気を奪われすぎて衰弱死する恐れもある。

まともな理性と判断力があれば、まず近づく異性はいない。

「そうした理性を暴力的な媚態で抑えつけ、魅了し屈服させるのが淫魔の狩りだ。だが、お前には無理だろう」

「ヴァーリヴァルグさん、そこは『無理』じゃなくて『しない』と言ってください」

「お前じゃ欲情しねぇよ」と言われているようで腹が立つ。

痴漢に遭うのはイヤだが見向きもされないのは悔しいという、微妙な乙女心なのだ。

――いや、体質的に媚薬効果があるから、欲情しようと思えばできるのか。

（でも、その程度なら問題ないかな）

ネヴァンジェリンは頬を膨らませ、兄に抗議した。

「お兄様、大袈裟に言って脅かすのはやめて」

「僕はまんざら大袈裟じゃないと思ってるけどね」

肩を竦めたネヴァンディーンが、いきなりばさりと羽根を動かす。
軽く浮かんだその足元を、緑の触手が通過していった。
触手が伸びてきた方向を見れば、人の五倍はありそうならラフレシア――似の怪物が三体。酷い悪臭と消化液を撒き散らしながら、うぞうぞ森の中から湧き出るようにして現れる。

「ほら、ネヴァンの魅力につられて怪物が三体も」
「餌としての魅力でしょうか！？」

怪物の出現に、ヴァーリヴァルグが身構え、ぐるると唸った――仔狼の姿のままで。
ネヴァンジェリンをちらと見上げて、困ったように耳を下げる。
エリオットは構えたものの、少し戸惑っているらしく、ネヴァンジェリンたちと怪物を交互に見て訊いた。

「魔物が魔物を襲うのか？」
「魔物は魔族と怪物の総称だが、俺たちは同族でも何でもない」

答えたのはヴァーリヴァルグだ。
足元を払うように伸びてきた触手を跳んで避け、勇者の側へ着地する。
植物型の怪物が手当たり次第に触手を振り回し始め、ネヴァンディーンはさらに高く浮かび、ヴァーリヴァルグとエリオットは隙間を掻い潜るようにしてそれを避けた。

「何やってるの、ヴァル。本性現してねじ切っちゃえ」
「それをするとネヴァンジェリンが怖がるだろう。お前がやれ！」

空から野次を飛ばすネヴァンディーンに、ヴァーリヴァルグが忌々しげに叫ぶ。

えー、と笑いながら言うネヴァンディーンは、どうやら戦う気はないようだ。ネヴァンジェリンを腕に抱えて、傍観者に徹している。

「ネヴァン兄様！」

「大丈夫だよ、ヴァルは結構強いからね。いざとなれば本性に戻るでしょ」

「でも、エリオット王子か！」

触手の一つがエリオットの左腕を絡めとった。

力任せに引っ張られ、エリオットの身体が怪物に引き寄せられる。

ネヴァンジェリンは青褪め口元を押さえたが、エリオットは冷静に、その勢いを利用して自分から怪物に接近した。

「はっ！」

大きく開いた花弁に飲み込まれる直前、方向を変えて蹴りを放つ。

衝撃で飛び散った消化液が、隣にいた怪物にかかった。

耳障りな悲鳴を上げて、怪物がのた打ち回る。さらに撒き散らかされる消化液と触手の乱舞。同士討ちを煽るように、エリオットは三体の怪物の間を縫って動いた。

「……あれ？　意外と、強い？」

「いちおう勇者だからねぇ」

呆然と驚くネヴァンジェリンに、ネヴァンディーンはのんびりと言う。

「僕が横槍入れたから一階で脱落しちゃったけど、本来なら魔王城の三階くらいまでは侵攻できたんじゃないかな。そこらの怪物程度には負けないと思うよ」

「えーっ！？」

なんてことだ。兄のレベルが高すぎて、エリオットは弱いと思い込んでいた。

ネヴァンジェリンは空から叫んだ。

「ごめんなさい、エリオット王子！　口先だけのむっつり野郎だと思ってました！」

「黙って認識を改めろ、そういうときは！　いちいち口に出して言うな！！」

怒られた。

ネヴァンジェリンはしゅーんと落ち込んだ。

エリオットが自分より強いことは分かっていたけれど、こんなに差があるなんて知らなかった。

（守るって言ったのに……）

実際は自分だけがネヴァンディーンに守られて、彼だけを戦わさせている。

「落ち込まないの。ネヴァンが貧弱なのはみんな知ってるよ」

「貧弱言うな」

いい子いい子と兄が頭を撫でるけれど、このままではいけないのではないかとネヴァンジェリンは思った。

魔力は低いし体力はないし、精気も不足気味でふらふらだけど、人間のエリオットが頑張っているのだ。見ているだけでいい理由にはならない。

（そうよね、参加することに意義があるっていうし）

守るという誓いだ。ここから援護くらいできないか、考えてみよう。

ネヴァンジェリンはまず、魔力を使ってできることを考えた。

三分かけて火を放つ――マッチ程度の火でなんになる。仮に燃えても勇者も巻き添えだ。

茶碗と箸を投下する――もったいない！　食器は使うものであって投げるものじゃありません！

極小ホッチキス――何を繋ぐつもり？

（我ながら使えねぇ～！！）

思わず男言葉で嘆いてしまった。

頭を抱えたネヴァンジェリンは、次に持ち物を探ってみた。

傘――は、腕に掛けてある。投げてみようか。

「えいっ！」

くるくる縦回転しながら、傘が怪物の上に落ちていく。

当たるかな～と思ったら、触手でぺしっと弾かれた。ぽーんと遠くへ飛ばされて、ヴァーリヴァルグが反射的に追っていく。

――あれ？　いざというときの味方が消えたよ？

「てやっ！」

今度は靴を脱いで投げてみた。

ばくんと花弁に食われて終わる。あれれ？

「よし、じゃあ最後の靴を投下――」

「余計なことをしないで、君はおとなしく見ていろ！」

地上からエリオットが叫んだときには、もう投下していた。

狙いが外れて、エリオットの脳天を直撃する。

「……君は、何がしたいんだ？」

「ご、ごめんなさいぃ～！」

頭部を押さえたエリオットが、不機嫌にこちらを見た。

ネヴァンディーンは大爆笑だ。

そんな兄を睨みつつ、背後から襲ってきた触手を、エリオットはネヴァンジェリンの靴で振り払う。

「あ、意外と武器になった？」

「なってない！　いいからそこで反省していろ！！」

その後、勇者は一人で怪物三体を片付けた。

「――で、何がしたかったんだ？」

戦闘後、改めて訊かれてネヴァンジェリンは、上目遣いにエリオットを見た。

怪我らしい怪我はないようだが、元々各所の骨をネヴァンジェリンの魔力で繋いでいるだけの状態だ。無理はあったらしく、息切れしているし顔色もよくない。

「ごめんなさい……」

「謝らなくていい。理由を訊いている」

「エリオット王子を助けたかったの」

でも逆に邪魔をしてしまった。

しょんぼり落ち込むネヴァンジェリンに、エリオットは深いため息を吐く。

「君に対してそうした助けは期待しない。他の魔族も当てにできないことは理解した。この程度の敵ならば、私は自分の身は自分で守れる。君は不意の接触以外で、私が襲われる機会を減らしてくれればいい」

「……はい」

「それと、そこの男に同意するのは癪だが、君は兄の側にいたほうがいいと思う」

苦々しく兄を見るエリオットに、ネヴァンジェリンは首を傾げる。

「弱いからですか？」

「危なっかしいからだ。弱いくせに無駄に行動派で性質（たち）が悪い。さらに淫魔らしくない」

前半はともかく、後半が分からない。

ますます首を傾げるネヴァンジェリンに、エリオットは言い辛そうに口を開く。

「つまり、その……君を見ていると、大丈夫な気がしてくる」

「はい？」

「だから……」

そこで言いよどみ、黙ってしまった。

くすくす笑ってネヴァンディーンが、その先を口にする。

「ネヴァンジェリンは淫魔だけど、手を出しても大丈夫な気がしちゃうってことだよ」

ぽかんと口を開けてエリオットを見たネヴァンジェリンに、彼は慌てたように言い繕った。

「そうではなくて、君を見ていると男は庇護欲を抱くか支配欲を抱くかの、どちらかだと思ったんだ！」

「なるほど。それはすごくよく分かる」

ヴァーリヴァルグが力強く頷いた。

「どうにも喰われる気がしないというか、こちらが喰う側な気しかせん」

「君が淫魔だというのは、まったく抑止力にならないと思う。だから、不用意に男には近づかない方がいい」

ネヴァンジェリンはすすすと兄の後ろに隠れた。

「……分かりました」

「いや、そこで私たちを警戒されると居た堪れないんだが！」

「俺は庇護欲派で支配欲派ではないぞ！？」

口々に言う二人の男を、ネヴァンジェリンは半眼で見やる。

その発想が出てきた時点でもうアウトだ。警戒対象に認定です。

おめでとう。

「えーと、帰ってお風呂入りたいんで、お兄様と先に戻ります。お二人は歩いて、ゆっく～り尖塔のあの部屋に戻ってください」

「の、覗き防止みたいなことを言われたんだが、どうしよう犬くん」
「犬じゃない。ヴァーリヴァルグだ」

うん、二人は仲良しになれそうだし、遠慮なく放置しよう。
ネヴァンディーンは羽根を広げると、妹を腕に抱いて再び空に舞った。
ネヴァンジェリンは兄の腕の中で、ぶぅと頬を膨らませる。

（男なんてケダモノだよ。狼だよ――あ、ホントに一匹狼だった）

ネヴァンディーンがくすくす愉快そうに笑った。

「大丈夫だよ、ネヴァン。僕がついていてあげるから」
「お兄様……」

にっこり微笑むネヴァンディーンに感謝して、その顔を見上げ――ふと気づく。
ついていてあげるって、どこまで？

（あれ？　よく考えたら二人より、ネヴァン兄様のほうがヤバイ気が――）

「お、お兄様も、覗かないよ、ね？」

頷いてほしいと思ったら、迷いなくきっぱり頷かれた。

「覗くだけなんて慎ましいこと、僕がするわけないでしょう？
服を脱がすところから始めて見て触れて、舐めて味わって入れて啼かせてのぼせさせて記憶飛ばすまでがワンセットだよ」
「警戒対象間違えた！　二人とも助けてぇえええっっっ！！」

本当の敵は身近にいるという話。

第二二話：保身からくる、知識と扱いの不干渉

貞操は守り抜きました。念のため。

（ヴァーリヴァルグさん、エリオット王子、ありがとう！）

自分たちよりネヴァンディーンのほうがまずいと、途中で気づいてくれたらしい。彼らが慌てて助けにきてくれなければ、何をどこまでやられたか考えたくもない。

それでも一つだけ押し負けて、これだけは許す羽目になった。

すなわち――

「んっ……」

「どうしたの、ネヴァン。感じちゃった？」

撫でられるくすぐったさに声を洩らすと、ネヴァンディーンがくすくす笑う。

ネヴァンジェリンは膝の間にいる兄を潤んだ目で見下ろした。

「お兄様、早く終わらせてっ」

「自分から催促だなんて、はしたない娘だね」

「この格好がね！」

兄を傅かせて片足を膝に、もう一方を肩にかけているこの状況。

羞恥心で涙が出そうだ。

長い指先が足の付け根へ向けてゆっくりと進んで行き、太ももの半ばを過ぎた辺りでネヴァンディーンの唇が近づく。

「ネヴァン兄様！」

その頭を両手で押さえ、ネヴァンジェリンは叫んだ。

「どうして靴下履かせるのに、いちいち口を使うのよ！？」

一緒にお風呂を却下されたネヴァンディーンは、せめてこれだけはと靴下を脱がすのと履かせるのはやらせてと主張した。

何故そこまで靴下にこだわる。しかもまた縞靴下か！　兄の性癖に妹は引いたが、エリオットはドン引いていた。

口を使って靴下を脱がされ、口を使ってガーターの留め金をはめられる。新たに兄が選んだ着替えは、白のブラウスに黒のコルセット付スカート。つま先の丸い厚底ショートブーツ。コンセプトはゴスロリお嬢様ですか？

靴下以外は自分で着たが、その後お膝に乗せられて、ネクタイを結ばれたり小さな帽子をかぶされたりと、装飾が増えていく。最後に黒猫のぬいぐるみ型をした鞄を手渡されたときには、もう何を言えばいいのかわからなかったネヴァンジェリンだ。どこで調達してくるのだ、こんなもの。

自分も着替えたネヴァンディーンは、裾が燕尾服のように広がった白のカッターシャツに黒のズボン、妹とお揃いのネクタイ。イメージを揃えたかったらしいが、彼が着るとゴシックというよりまるでホストだ。自分でもあれー？　と思ったらしく、妹を膝に乗せたまま、鏡を見て首を傾げている。

「男の服は難しいね」

「服のせいじゃなくて、お兄様のイメージが強すぎるのよ」

ピンクな夜イメージが。

自分とお互いの格好を鏡で確認した後、双子は着替えたもう一人に目をやった。

エリオットだ。風呂にも入って髪はさらさら、白い肌はうっすら桃色がかっている。服はネヴァンディーンのものを借りたため、一回り大きく、袖や裾が余っていた。そして腕に仔犬状態のヴァーリヴァルグを抱いている。どこの乙女だ、貴様と言いたい。

幾重にもベルトが絡みついた、鋲で留めるタイプの黒い上着に、これまた装飾としてのベルトが多い黒のズボン。感想を述べるなら、それは一言。

『似合わない』

「うるさい」

気分を害したらしく、ぷいとエリオットが顔を逸らした。

いまネヴァンジェリンたちは、尖塔最上階の部屋に戻ってきている。

部屋に入ってまず目に付いたのが、どどーんと壁に立て掛けられたベッドだ。その壁の上部には、明かり取り用の四角い窓が一つ、豪快に割られていた。

なんとも躊躇いのない脱出方法に、「雨吹き込んで寝具びっしゃびしゃですけど、床で寝るんですね？」と確認したら、エリオットは即座に謝った。

ちゃんとゴメンナサイを言えたので、替えの寝具を持ってくるついでに、鏡と椅子を部屋に追加。窓も兄に塞いでもらった。

「謝らなかったら、濡れた床で寝かしましたよ」と笑えば、「君は意外と手厳しい」とうな垂れていた。謝罪は人として最低限の礼儀だと思うのだが。

エリオットとヴァーリヴァルグはベッドに、ネヴァンディーンは椅子に、ネヴァンジェリンはその膝に座って、今後についての話し合いを開始だ。

「とりあえず、エリオット王子の着替えは必須よね。兄様の服似合わないし」
「僕の服が可哀想だもんね」
「何度も似合わないと言うな」
不快そうに言うけれど、実際似合っていないのだから仕方ない。
「食材はチェーザレさんが用意してくれたから大丈夫。あ、エリオット王子、あとで食材の名前と調理法を教えてください」
「私はあまり詳しくはないが、それでよいのなら」
「食べるのはエリオット王子とわたしだけですから、問題ないです。他に何か必要なものとか、困ることってありますか？」
エリオットはしばし、微妙な顔で沈黙した。
ヴァーリヴァルグの頭を撫でてから――ルゥといい、勇者は動物好きらしい――、窺うように尋ねてくる。
「捕虜の身ゆえ贅沢は言えないが、できれば塔内くらいは出歩かせてほしい。逃げないと約束する」
「分かりました」
騎士たちがチェーザレにより凍結されていることは話してある。初めは難色を示したが、二千人も世話できないと言えば渋々納得してくれた。彼らのことがある限り、おそらくエリオットは逃げないだろう。
（だからって完全には信用しないけどね）
人間はずるい。魔族は楽しむ目的以外で嘘を吐かないが、人間は

弱いから嘘くらい吐く。
　ネヴァンジェリンはそれを知っているので、ヴァーリヴァルグに本性については黙っているように言っておいた。監視兼護衛。彼の安全のためにも、これくらいの秘密は必要だ。
　この尖塔は元々人間の捕虜を閉じ込めるために用意されていたらしく、最低限の設備はあった。風呂や手洗い場も向かいの部屋に完備。トイレを見たときには驚いた。魔族はトイレにいかないが、美形はトイレに行くのだったと思い出した。ただし仕組みは底にゲル状怪物（モンスター）を入れただけ。自分が使うんじゃなくてよかったと、ネヴァンジェリンは心底思う。

「あと……騎士隊との面会許可を。一目確認するだけでいい」
「チェーザレさんにお願いしておきます。他は？」
「魔王に謁見を」
「会うと特攻しそうなので、とりあえず却下で。他は？」

　エリオットは憂鬱そうにため息を吐いた。

「君は本当に手厳しいな……」
「ネヴァンはこう見えて現実主義だからね。嫌なことは全力回避で、逃げられないことにだけ、抜け道探しつつ立ち向かうタイプだし」
「人生平穏が一番だもの。お兄様のセクハラ対策だけで、わたしの許容量はもういっぱい」

　ネヴァンディーンは笑って、膝の上の妹を抱きしめた。

「勇者サマの服は僕が調達してきてあげる。ネヴァンにもおみやげを持ってくるよ。何がいい？」
「ふわふわクッション！　あと、可愛いランプが欲しい！」
「了解」

エリオットが再びため息を吐いた。
どこかうんざりした口調で言う。

「魔族は双子でべたべたするのが普通なのか？
それと、いい加減勇者呼びはよしてくれ。馬鹿にされているようにしか聞こえない」
「こんな双子はこの二人だけだ」
「馬鹿にしてるのは間違ってないけどね」

さらりと言ったネヴァンディーンは、ムッと眉を顰めたエリオットに微笑む。

「では、王子殿下とお呼びしましょうか？」
「エリオットでいい。敬う気もないのに敬称を使うな」
「了解。じゃあエリス、服のサイズを測るから立って」
「待て！　何故女名になる!?」
「僕が呼んで楽しいから」

妹を椅子に降ろしたネヴァンディーンは、立てと言いつつエリオットをベッドに押し倒した。
どこからかメジャーを取り出して、エリオットの服を脱がせにかかる。

「ああ、男を脱がしてもぜんっぜん面白くない……ちょっとエリス、せめて色っぽく喘いでよ。僕が僕を騙せるように」
「出すか！　こら、やめろ、離せっ！！」
「そこはいやーんくらい言ってよ」

欠伸をしたヴァーリヴァルグが、ネヴァンジェリンの足元に寄っ

てくる。
ネヴァンジェリンは彼を膝に乗せて、訊いてみた。
「ねえ、ヴァーリヴァルグさん。魔族は服とか家具をどこから調達するの？」
「知らないのか！？」
目をかっ開いて訊かれる。
人界から盗んでいるんだったらどうしようと、実はネヴァンジェリンは追求したことがなかった。
（必要なものはお兄様が用意してくれたし、ご飯の心配だけしてればよかったんだもの）
けれどこれからは、そうはいかない。エリオットの世話をし、彼を魔王様に認めさせなければいけないのだ。
それにヴァーリヴァルグの反応からして、自分の世間知らずっぷりは相当な気がしてきた。
（もしかしてわたし、お兄様にいろいろ騙されてる……？）
嘘は吐かずに、うま～く丸め込まれていた予感。
せっかくなのでこの機会に、いろいろ学んでみるべきかもしれない。魔界のことはヴァーリヴァルグに、人界のことはエリオットに教われば、嘘もごまかしもないだろう。
（でも――）
「ネヴァン兄様は、わたしがいろいろ知りたいって言ったら困るかな」

「困らせればいいだろう、あんな奴！」
「それはダメです」
だってネヴァンディーンは、ずっと自分を守ってきてくれたのだ。
そしてネヴァンジェリン自身、その腕の中から出たいとは思わなかったし、いまも実は思っていない。
「お兄様の腕から出て、自分ひとりでやって行くっていうなら別ですけど、わたし、ネヴァン兄様の手を離すつもりないですから」
一人で生きられないネヴァンジェリンには、誰かの庇護が必要になる。
そしてネヴァンディーンを選んだのは、ネヴァンジェリン自身だ。
魔界に生まれたあの日に、彼を選んだ。
「ヴァーリヴァルグさんとチェーザレさんには慣れましたけど、他の魔族はまだ怖いし……
それに、守ってもらうなら、やっぱりお兄様がいいんです。他の人じゃイヤ」
ネヴァンディーンは妹に、自分の都合のよいことしか教えないけれど、ネヴァンジェリンだって兄を利用している。お互い様というものだ。
何より――
「セクハラって対価を支払ってるんです。やられた分だけきっちり元とってやると思えば、わがままも言いやすいですからね」
ふっふっふっとネヴァンジェリンは笑った。
生まれてからこっち、兄にはそりゃーもういろいろいろいろいろ

いろなセクハラをされてきたのだ。

「他の人じゃこうはいきません。申し訳なさ過ぎて萎縮しちゃいますけど、ネヴァン兄様なら遠慮は無用です。むしろガツンと行かないと、タダ食いされます。貞操かかってますからねー。絶対負けませんよ、わたしは」

「お前は本当に、意外と逞しいな……」

「喰われるだけの人生はゴメンですから！」

ヴァーリヴァルグはあきれたように言ったが、弱いからこそ柔軟に、逞しくないといけないと思うのだ。

「エリオット王子ももうちょっと、臨機応変に対処してくれればいいと思うんですけどね」

「脱がされる前に自分で脱いで、サイズを測ればよかったのにな」

ベッドの上の二人を見やる。

力に力で対抗しようとしたエリオットは、完全にネヴァンディーンに押さえ込まれていた。

「あのさ、僕さ、ほんっとーーーに、男はヤなんだけど。襲われたいんなら他当たってくれる？　変な趣味に目覚めたらどうしてくれるの。男淫魔（インキュバス）の沽券に関わるんだけど」

「襲われたいわけがあるかーーーっっっ！！」

ネヴァンジェリンとヴァーリヴァルグの視線が生暖かいものになる。

Ｓっ気入ったお兄様は、イヤだイヤだと言いつつ少しばかり楽しそうだ。エリオットは泣いてるけど。

「……ジャパニーズ文化には、ＢＬと呼ばれるジャンルがあってですね」
「びーえる？」
「まあ、あんな感じの男のプロレスを、女の子が妄想して楽しむ特殊分野で」
「楽しいか！？」

ネヴァンジェリンは首を振った。
その手の趣味があれば、鼻血噴いてサムズアップしたい光景かもしれないが、いかんせん渡辺凛はその手の本コーナーに通りがかるだけで迂回していたタイプだ。

「でも兄様がそっちに目覚めてくれれば、わたしへのセクハラが減るかな～とか、考えちゃうわたしは鬼でしょうか？」
「鬼だ！！」

肌蹴た服で暴れるエリオットの腕を、ネヴァンディーンがネクタイでベッドにくくりつけている。
尻尾巻いちゃってるヴァーリヴァルグを撫でながら、ネヴァンジェリンは天井を見上げて呟いた。

「助けるべきか、助けざるべきか」

それが問題だ、と――

第二三話：所有のそれは、不可抗力

「はい、全サイズいただきました」

ネヴァンディーンが立ち上がったときには、エリオットは完全に泣いていた。

両手に顔を埋めてしくしくすすり泣いている。

ネヴァンジェリンはその光景に瞑目し、そっと手を合わせた。

ごめんなさい。

（邪魔すると、わたしが押し倒されそうだったんだもの）

触らぬ兄に祟りなし。

平穏な人生を目指すにあたり、これほど厳守すべき格言はないと思うのだ。

服の留め金を全て毟られ、屈辱にむせび泣く勇者の姿は、男のくせに艶かしい。どうにも犯され感満載だが、いちおう脱がされただけです念のため。

ベッドを離れたネヴァンディーンは、軽快な足取りで数歩歩き――いきなりしゃがみ込んだ。

口元を押さえて苦しげに呻く。

「ううっ、やっぱり男はキモチワルイ……」

「じゃあ脱がすな！」

至極もっともなつっこみをエリオットが入れる。

素振りでなく、本当に気分が悪そうなネヴァンディーンは、青褪めた顔でこう言った。

「エリスがあんまり抵抗するものだから、嗜虐心が疼いちゃって……でも無理。男は無理。男淫魔（インキュバス）としての本能が否を叫ぶんだよ。硬いしでかいし触ってもぜんぜん楽しくない。女の子の名前で呼ぶだけじゃ無理。耐えらんない」

「だから、じゃあするな！！」

性癖が本能に負けたらしい。

兄のセクハラ対象を増やそう計画は、早々に頓挫したようだ。

（残念。……じゃない、よかったね、エリオット王子）

生きて国に帰れても、大切な何かを失っていたら王子として大問題だ。下手すると舌を噛み切りかねない性格でもあるし、ここは素直に祝っておこうとネヴァンジェリンは思った。うん、本当にヨカッタネ。

やがて嘔吐きながらも立ち上がったネヴァンディーンは、大きく深呼吸をしてから羽根を開く。

「じゃあ僕は、エリスの服とネヴァンのおねだり品を調達してくるよ」

「待って、お兄様」

飛び立とうとしたネヴァンディーンの上着を、きゅっと掴んで引き止める。

貰った猫の鞄に半分ほど顔を埋め、上目遣いにネヴァンジェリンは訊いた。

「わたしも行きたい。行っちゃダメ？」

「駄目」

可愛く訊いても無理だったか。
チッと舌打ちするネヴァンジェリンに、ネヴァンディーンがくすくす笑う。

「嘘だよ。いいよ、連れてってあげる」
「ほんと!?」
「ホント。舌打ちが面白かったからね」

実に微妙な理由だが、許可が出たなら何よりだ。
ネヴァンジェリンは笑顔になって、エリオットとヴァーリヴァルグを振り返った。

「二人も一緒に行っていい？」
「ヴァルはいいけど、エリスはどうかな。危ない気もするけど」
「お兄様とヴァーリヴァルグさんがいても？」

どうやって物を調達しているかを知らないネヴァンジェリンには、どんな場所へ行くのか推測できない。
目を離すのが心配で言ったのだが、それなら二人は置いていったほうがいいのだろうか。

「首輪をつければ問題ないだろう」

ヴァーリヴァルグの言葉に、エリオットがぎょっと目を見開く。
首輪という単語がショックだったのか、犬にしか見えない彼に言われたのが衝撃的だったのか。身繕い途中の姿で固まっている。
ネヴァンジェリン自身驚いて、思わず後退った。

「ヴァ、ヴァーリヴァルグさん、実はそういう趣味が……！」
「趣味？　俺は何かおかしなことを言ったか？」

仔狼はこてんと可愛らしく首を傾げた。
その姿に騙されそうになるが、『首輪をつける』という行為はかなりのマニアックプレイだ。しかも対象は男である。
兄の袖を握っておそるおそる見上げると、ネヴァンディーンが噴出した。

「ネヴァンジェリンも、僕の首輪をつけてみる？」

ぶんぶん首を振る妹の手首を握り、ネヴァンディーンはそっと魔力を流してくる。
手が放されると、蔓が絡み合ったかのような模様が肌に浮き出ていた。
文字には見えないのに、見た瞬間一つの名前が読み取れる。『ネヴァンディーン』。

「これを首につければ首輪。所有物の証だよ。持ち主がいれば、勝手に手出しはされないからね」
「落としても届けてもらえるしな」

持ち物に名前を書く行為と同じらしい。
所有物を傷つければ、当然持ち主にケンカを売る行為になるし、欲しければ交渉するなり力ずくなり、持ち主と話をつけることになる。
つまり、力ある魔族に所有されれば、持ち物自体が被害を被ることはないわけだ。

「でもお兄様、これ……」

ネヴァンジェリンは手首の模様を指で擦った。

擦った場所から簡単に模様が消えていく。

「すぐ取れちゃうよ？」

「所有物には消せるんだよ。望まない相手に、無理やり所有されたりしないようにね」

エリオットが微妙な顔つきになった。

おそらくネヴァンジェリンも複雑な顔をしているだろう。

なんでも力押しのバカ揃いなのに、どうしてこういうところは公正なのだ、魔族。

「首輪はもっとも目立ちやすい所有の証だ。ネヴァンディーンの印をつけておけば安全だろう」

「嫌です、却下します」

ヴァーリヴァルグの言葉を、ネヴァンディーンがきっぱり拒絶した。

ネヴァンジェリンを抱き寄せて――というより縋るようにしながら、首を振る。

「男に所有印をつけるなんてご免だよ、おぞましい。ヴァルがやりなよ」

「この姿でどうしろと？　我慢しろ」

「ヤだよ！」

珍しくむきになるネヴァンディーンに、ネヴァンジェリンはぱちぱち瞬きをする。

それから自分の手首に目を落とし、琥珀色に光る蔦の文字を眺めた。

（綺麗だし、不思議）

自分の所有印はどのようなものなのだろうか。

兄と同じなのか、それでいて自分の名が浮かぶのか。

好奇心に突き動かされて、「はい」っと元気よく手を上げてみる。

「わたしやりたい」

ネヴァンディーンとヴァーリヴァルグは同時に沈黙した。

「ムリ？　わたしじゃできない？」

「んー、いや、エリスは人間だから、できないことはないと思うけどね」

微妙に言葉を濁される。

首を傾げるネヴァンジェリンに、当事者でありながら部外者のような顔でエリオットが言った。

「安全のためにつけるのだろう？　君の所有印で抑止力になるのか？」

「ああっ！！」

根本的な見落としに、ネヴァンジェリンは呻く。

「それに、そこまでして私を連れて行かなくてもいいように思うのだが」

「せっかくの気遣いにつっこんでやるな！」

ヴァーリヴァルグがびしっと肉球ぱんちをエリオットの足に入れる。

落ち込むネヴァンジェリンの頭を、ネヴァンディーンがなでなでした。

「お兄様たちの真似がしてみたかったんだよね～。僕につけさせてあげてもいいんだけど、自分より魔力が上の相手には、所有印はつけられないんだよね」

「ううっ、じゃあわたし、誰にもつけられないんだ……」

所有者になってどうしたいわけではないが、自分の印がどんなものかは見てみたかった。

単なる好奇心だが、できないと言われるとがっかり感が倍増する。

あんまりしょんぼりして見えたのか、ヴァーリヴァルグがエリオットをつついた。

「おい、人間。お前も男だろう。空気を読め」

「魔族が空気読めとか言うな、犬くん。誇りあるシュッティンベルグランド国王子として、魔物に屈するわけには――」

「僕にボロ負けした子が何言ってんの。

ほら、ネヴァン。エリスに可愛くおねだりしてみなさい。きっと叶えてくれるから」

兄に背を押され、ベッドに腰掛けたエリオットの前に立つ。

「可愛く」という指示に従い、イタイな～と内心思いつつ、唇に指を当てて首を傾げる。上目遣いとうるうる目は標準装備だ。

「エリオット王子、わたしの印、つけちゃダメ？」

両手に顔を突っ伏して、エリオットが何やら呻いた。

さすがとネヴァンディーンが頭を撫でてくる。

「よくできました。ちなみに男の二の腕を掴むと効果倍増だよ。覚えようね」
「何を教えてるんだ、貴様は！」
「淫魔的必須技能と僕がやられたいこと全て」
「たまにあの娘の言動がアレなのは、お前のせいか！」
牙を剥くヴァーリヴァルグを、ネヴァンディーンがひらりと避ける。
ネヴァンジェリンは教えられたとおり、エリオットの二の腕を掴んでわくわくと覗き込んだ。
やっていい？　やっていい？
視線でひたすら訴える。
こういうとき、幼い容姿は得だとネヴァンジェリンは思っている。兄のような性癖を持つ男は少ないかもしれないが、子供のおねだりには弱いはずだ。
かくして、エリオットは眉間の皺を指で解しながら顔を上げ、渋々了承した。
「……すぐに消してもいいのなら。それと、せめて手首にしてくれ」
「はい！」
にっこり笑ってネヴァンジェリンは、エリオットの手首を掴む。袖をめくると女性のような、肌理細やかな白い肌が現れた。それでいて男の腕らしく、筋張っていて触り心地は硬い。
なんとなく血管をなぞりながら、ネヴァンジェリンは訊いた。
「お兄様、どうすればいいの？」
「これは自分のものって思いながら、魔力を流すだけだよ」
言われたとおりにやってみる。

（わたしの、わたしの～）

触れた肌がほんわり暖かくなった気がして、ネヴァンジェリンは手を開いた。

キラキラ光る金色の模様が、手首に――ない。

「ネヴァン兄様ぁ～」

「うーん、ネヴァンは魔力が低いからねぇ。もう一度やってみたら？」

「人間、お前も今だけと思い、支配を受け入れるつもりでいろ。精神的な抵抗が強いと、魔力のとおりが悪いこともある」

エリオットに視線で訴えてから、ネヴァンジェリンはもう一度挑戦した。

ぎゅっと両手で手首を掴み、真剣に睨みつけてからそっと手を開く。

今度は上手くいった。

ピンクがかった金色の模様が、エリオットの手首を取り巻いている。

絡み合う蔦を思わせる、兄とよく似た不思議文字。それでいて模様はネヴァンディーンのものよりも細かい。

そして目を凝らせば浮かび上がる、『ネヴァンジェリン』の名のイメージ。

「できた！　可愛いー」

「よかったね～」

ネヴァンディーンが頭を撫でてくれる。

ネヴァンジェリンはにっこり微笑んで、エリオットにお礼を言っ

た。

「ありがとうございます、エリオット王子！　満足しました！」
「そうか。それはよかった」

嘆息に近い表情で、エリオットは手首に触れる。
しげしげ模様を珍しそうに眺めてから、「消すぞ」と前置きして擦り始めた。
しかし何故か、一向に模様は消えない。
眉を顰めるエリオットに、ヴァーリヴァルグがふと言った。

「そうか。人間は魔力がないから消せないのだな」

ぎょっとエリオットが目を見開く。
慌てて何度も指で擦り、袖でも拭ってみるが、薄れもしない。

「つけた本人は消せるんだろうな！？」

ネヴァンディーンとヴァーリヴァルグは顔を見合わせ首を傾げた。
焦ったネヴァンジェリンはエリオットの手首を掴み、指で何度も擦ってみる。
……消えない。

「所有印の主の同意があれば、所有者の上書きはできるんだけどね」
「それ以外の方法で、所有権放棄の仕方など知らんぞ」

エリオットが青褪める。
当然だ。淫魔に所有の証をつけられましたなど、絶対に国に知られるわけにはいくまい。
空気を読まない魔族二人は、さらにぽーいと爆弾を投下した。

「ちなみにその所有印だけど、主が念じたらもげるから」
「も、もげる……？」
「不要な道具は廃棄するものだ。所有者の意思で、その箇所を切り離せるようになっている」
「分かりやすく言うと、手首ぶちーってできるってこと。手首でよかったね」

エリオットはぱくぱく口を開け閉めした。
よくない。ぜんぜんよくない。声には出ないが確実にそう言っている。

「ち、ちなみにエリオット王子って、利き腕どっちですか？」

ネヴァンジェリンの問いに、エリオットは黙って右腕を――所有印の刻まれた腕を指差した。
駄目だ。対策もそうだが、フォローの言葉一つ浮かばない。
ちょっとした好奇心で、王子一人の人生を手中に収めてしまったネヴァンジェリンは、焦りつつ困りつつ口を開いた。
愕然と凍りつくエリオットを、せめて和ませたい一心で。冗談めかしてにっこりと。

「女王サマとお呼び、なーんて……えへ？」

もちろん和むはずがなかった。

第二四話：誓いは本意、気遣いは不本意

「終わった……私の人生は今日終わった。もはや皆に合わせる顔がない」

ベッドに突っ伏して嘆くエリオットに、ネヴァンジェリンは慌てた。

女王サマ発言につっこみもないとは、かなりやばいかもしれない。

「だ、大丈夫ですよ、エリオット王子！　ほら、わたし魔力低いですし、手首なら隠せます。そのうち自然に消えるかもしれないし！」

「ああ、そうだな」

エリオットは己の手首を見て、遠い目で笑った。

「いざとなれば切り落とすか……」

「ぎゃー！　ごめんなさいごめんなさい、ごーめーんーなーさーいいいいっっっ！！」

声が明らかに本気すぎる。

どうやら所有の証をつけられたのは、彼にとってかなりのショックだったようだ。

（そりゃそうだよね。奴隷のマークみたいなものだもん）

状況で言えば、魔族との戦いに敗れて奴隷にされた、となるわけで。

それでも騎士たちを救えれば、ある程度は名誉挽回に――なりそ

うな気がしたのだがどうだろう。

（身体使って取り入ったんだーって苛められそう……）

他の魔族の印ならともかく、淫魔の印である。

人間にそれが読み取れるかは分からないが、王子としても勇者としても、この上ない屈辱ではないだろうか。奴隷は奴隷でも肉奴……とにかく不名誉すぎる。

ネヴァンジェリンは半泣きで、ネヴァンディーンの袖を引っ張った。

「どうしよう、お兄様ぁ！」

「うん、そうだね」

兄は腕を組み頷いた。

「出掛けるのは明日にしようか」

「空気読んだようでまったく読んでない発言！！」

そもそも彼は行きたいとも言っていない。

行きたいと思ったのはネヴァンジェリンで、所有印をつけたのはネヴァンジェリンの好奇心だ。

それなのにエリオットが被害を被っている。

「ご、ごめんなさい……」

「構わない」

身を縮めてしおしお謝るネヴァンジェリンに、エリオットは淡く笑った。

「私は騎士らを助けるために、一度は君に身を捧げるつもりだったのだし。結果としてこうなったのだと思えば許容できないこともないような気がしないでもないからな、女王様」
「ホントすみません。女王サマ発言は忘れてください」
「君が呼べと言ったんだろう、女王様。悪気がなかったのは分かっている。不可抗力と理解しよう。
――ああ、敬語を使ったほうがよろしいでしょうか、女王様？」
「怒るならふつうに怒ってほしいデス、王子サマ……」

エリオットは答えず、座った姿勢からそのままベッドに仰向けに寝転んだ。
目を腕で隠し、そのまま動かなくなる。
おろおろするしかないネヴァンジェリンに、お座り姿勢でヴァーリヴァルグが言った。

「気持ちの整理が必要なのだろう。しばらくそっとしておいてやれ」
「でも……」
「大丈夫だ。自棄になっておかしなことはしないよう、俺が見張っておく。お前は暖かい飯でも運んできてやるといい」

寝返りを打ったエリオットが、ヴァーリヴァルグを腕に抱きしめる。
ヴァーリヴァルグは非常に迷惑そうな表情だったが、抵抗はしなかった。さすがはイヌ科、魔族でもそこそこ空気を読むらしい。
悩んだ末にネヴァンジェリンは、猫鞄をエリオットの枕元に置いた。

「本当にごめんなさい……」

一度だけ彼の頭を撫でてから、兄を引っ張って部屋を出る。

無言のまま階段まで歩き、それから兄をキッと睨めつけた。

「わざとやらせたわね、ネヴァンディーン」

そうとしか思えない。

硬い声で言えば、ネヴァンディーンはどこか楽しそうに答えた。

「うん」

「ちょっとは否定しようよ！」

ハートマークがつきそうな笑顔で肯定され、ネヴァンジェリンはうな垂れる。

（ごめんなさい、エリオット王子）

不可抗力じゃなくて、確信犯がここにいます。

脱力するネヴァンジェリンを、ネヴァンディーンが覗き込んでくる。

「ネヴァンは賢いから、理由もわかるよね？」

「わたしに咬みつかないための首輪」

「うん、正解」

今はネヴァンジェリンが、魔力でエリオットの負傷を補っている。

だから彼は逆らえない。

でも怪我が治ったら？

「人間の誓いに強制力はないからね。ネヴァンを人質にして、仲間を助けようとするかも」

「そういうのはわたしが考えることよ。お兄様は魔族らしく、ただ

楽しんでればいいのに」
「可愛い妹がいると、兄は過保護になるんだよ」

正確には『弱い妹がいると』、だ。
魔族は基本、頭を使わない。それはあまり魔族と関わらなかった、ネヴァンジェリンでも知っている。決して知能の問題ではなく、何かに気を遣う必要がないからだ。
強くて丈夫でどこででも生きられる。だから警戒することも、誰かを慮る必要もない。
そんな中、妹を守るためにと頭まで使い出した兄は、確実に淫魔の分際（レベル）を超えている。

「強くてずるくてエロいって、お兄様は最凶でも目指してるの？」
「いいね、最強。魔王様の代わりに人界征服して、ネヴァンを女王サマにしてあげようか」
「女王ネタはもういいってば！」

じわじわネタにするくらいなら、その場でガツンとつっこんでほしかった。
頬を膨らませるネヴァンジェリンを追い越して、ネヴァンディーンは階段を降りる。
一歩、二歩。
そこで足を止め、ネヴァンディーンは問うてきた。

「ネヴァンは世界を見たいんだよね？」
「ヴァーリヴァルグさんとの話を聞いてたの？」

振り向く口元に刻まれた笑みが、その答えだ。
ネヴァンジェリンは頷いた。

「うん、見たいし知りたいよ。ダメ？」
「いいよ」

ネヴァンディーンが二段下にいることで、ようやく双子の目線が真っ直ぐに合う。
いつもは見上げる兄の顔が正面にあることを新鮮に思いながら、ネヴァンジェリンは言葉の続きを待った。

「ネヴァンがネヴァンジェリンのままでいられるなら、鳥籠の鍵を開けてあげる」
「変わるなってこと？」
「壊れないでってこと」

ネヴァンディーンの大きな手の平が、慈しむように髪に触れてくる。
褐色の指は髪を梳き、そのまま滑るように片頬を包み込んだ。

「僕は君の君らしいところを気に入っている。だから、ネヴァンの望みを僕は断らないよ。変わるならそれも、君としての選択。僕は君が失われないように、先回りして守るだけ」

指がさらに滑り、首に回る。

「でも範囲が広くなれば、その分守るのも難しくなる。常に傍にはいられないかもしれない。
――誰かに壊されるくらいなら、僕が君を壊す。僕以外に壊されないって、約束できる？」

僅かに力の入った指と、睦言を囁くかのように甘い声。
まさに兄そのものの仕草で、怖いと思うよりむしろ、ネヴァンジ

エリンは笑ってしまった。

「壊される前に、ネヴァン兄様の鳥籠に逃げ込むわ」

「じゃあ鍵を開けて、帰ってくるのを待っててあげる」

双子は額をくっつけて笑い合う。

そして――

「でもだからって、さっきのは赦さないわよ、ネヴァンディーン」

ネヴァンジェリンは両手を伸ばし、兄の首を絞めあげた。

「あ、ネヴァンジェリン。結構力入って――」

「わたしに何てことさせてくれるのよーっっっ！！」

消せない所有の証を、よりにもよって庇護した勇者（おとこ）に刻ませるとは。

まったく不本意なこの事態、いかにネヴァンジェリンの安全のためとはいえ赦せない。

「どう考えたって、そういう目的にしか見えなくなるでしょう！？」

「そういえばそうだねぇ。ネヴァンもやっぱり女淫魔（サキュバス）だったんだって思――あ、全力で指に力入れてるね。苦しい苦しい、さすがに苦し、ぐぇ」

「お兄様のバカ！！」

ネヴァンディーンとヴァーリヴァルグは経緯を知っているからいい。

けれどもし、紫執事ことチェーザレに知られたら？

あまつさえ、魔王様に知られてしまった日には――

「探しなさい」

据わった目つきでネヴァンジェリンは兄を睨んだ。

「所有印の消し方を探しなさい。ダメなら兄様が上書きしなさい」

「え、ヤだよ！　男淫魔（インキュバス）の僕が印つけるほうが、よっぽど外聞悪――」

「元はと言えば、ネヴァンディーンが悪いんでしょうが！」

魔王様に知られればあのお方のことだ、無表情のままに奇天烈な答えを持ってくるに違いない。

（『なんだ、餌としての人間（おとこ）が欲しかったのか』とか言って、勇者ご一行ハーレム作って渡されかねないよ！）

魔王様に知られる前に、あの所有印は何としても消さなくてはいけないのだ。

一切目を逸らさないネヴァンジェリンに、珍しくネヴァンディーンが視線を彷徨わせる。

そして「あっ」と何かに気づいたように、突然頭上を指差した。

「魔王様からお手紙」

「へ？」

ネヴァンジェリンの鼻の上に、ぽてりと紙切れが降ってくる。

闇を介して届けられたのだろう。二つ折りの、飾り気も封筒もない手紙。

和紙のような手触りのそれを、ネヴァンジェリンは震える手でそおっと開いた。

書かれていたのは一文にも満たない一言。

『来い』

「もうバレた！？」

アンテナ広すぎませんか、魔王様。

第二五話：墓穴掘りには不可避の罠、でした

癖のない黒檀の髪が頬に触れる。
象牙色の指に挟まれたピンクの丸いお菓子が、ネヴァンジェリンの唇に強引に押し当てられた。

「口を開けろ」

そして耳朶を打つ、氷のように冷たい美声。
一切の甘さを含まず、淡々と声は命じる。

「あーん」

ネヴァンジェリンは半泣きで口を開いた。

魔王様からの召喚状は、同時に案内役を兼ねている。
手を離せばふわりと浮かび、魔王様の下へと飛んでいくのだ。受け取った者はそのあとを追えば、一つ所に落ち着かない魔王様の下へ参上できる。
屋根のない廊下を抜けて、モノクロの居館（パラス）に入り、いくつか階段を上った先の部屋で召喚状は燃えて消えた。
どうやら魔王様は広間で双子をお待ちらしい。

「バレてないといいねー」
「バレてたらもう一度首絞めてやるー」

あははウフフと小声で微笑み合って、双子は同時に広間に足を踏

み入れた。
広間に入るとまず、長テーブルが目についた。床には黒い敷物が広げられ、その上に青色の草花が散らされている。テーブルに掛けられたクロスもまた黒く、並べられた青い食器が映えていた。天井を見上げれば、何故かシャンデリアではなく竜の骨がぶら下がっている。
そして長テーブルの向こう側に、移動式玉座に座った魔王様のお姿が。

「ネヴァンディーン、仰せによりただ今まかりこしました」
「ネ、ネヴァンジェリン、来ました」

優雅に会釈するネヴァンディーンに倣って、ネヴァンジェリンもぺこりと一礼。
焦っていたので日本式のお辞儀になってしまったが、叱咤や失笑はこなかった。おそるおそる顔を上げれば、魔王様の隻眼とばっちり目が合う。
慌ててもう一度頭を下げる前に、魔王様が手招きした。

（……あれ？　なんかイヤな予感がするよ？）

先ほどまでもしていたが、予想のベクトルが違う悪寒が。
テーブルに並んだ食器の上に、ケーキやマフィンなど可愛いお菓子が並べられていく。給仕をするチェーザレと目が合えば、「分かっているでしょう？」とばかりに生暖かい眼差しを向けられた。
慄き動けないネヴァンジェリンの肩を、ネヴァンディーンがそっとつつく。

「何やってるの、ネヴァン。魔王様が呼んでるよ」
「お、お兄様を呼んでるんじゃ……」

「明らかに君を見てるでしょ」

あの方の見ている先なんて分かりません！

――そう言うには魔王様は目力がありすぎる。ネヴァンジェリンにも見られているのは明白で、ごくりと喉を鳴らして、そろそろ魔王様の側近くへと歩み寄った。

「お、お呼びでしょうか～……？」

おそるおそる問いかければ、魔王様はご自分の膝を指差す。

断じて意味を分かりたくなく、ネヴァンジェリンは目を逸らした。孫を可愛がるおじーちゃんでもシスロリコンの兄でもないのだし、きっと魔王様は膝に座れなんて言ってない。言ってないったら言ってない！

素晴らしい手際でお茶をサーブしたチェーザレが、やんわりと諭してくる。

「ネヴァンジェリン様もネヴァンディーン様も、どうぞお席にお着きください。魔王様は午後のお茶をお二人と楽しみたいそうです」

テーブルにセットされた食器は、魔王様の斜め左に一人分、正面に何故か二人分ある。

ネヴァンディーンは一礼して、斜め左の席に着いた。

冷や汗をかくネヴァンジェリンに、魔王様が指で、チェーザレが眼差しと右手で、魔王様の膝を勧めてくる。

ぶんぶん首を振ってネヴァンジェリンは言った。

「わ、わたしは兄様――ネヴァンディーンの膝の上で結構ですっ！」

「ネヴァンジェリン」

（ひぃっ！）

兄の元へ逃げようとした瞬間、氷の美声がネヴァンジェリンを急速冷凍した。

爪先から頭まで、悪寒を伴う震えが走り抜ける。

「余の膝よりも、ネヴァンディーンの膝を選ぶ、と？」

「選ばせてよ～」とはとても言えない。

しかし首を振れば、末路は一つだ。凍った頭を無理やり温めて、ネヴァンジェリンは気の利いた返しを探す。

もっともネヴァンジェリンの頭では、この程度の答えしか出てこなかった。

「魔王様がお呼びになったのは、所有印の件ですよね！？」

すなわち特攻。

さっさと本題に入って叩かれるだけ叩かれてしまおうという、捨て身の戦法だ。お膝に乗って先延ばしにするより、斬られてへこんで瞬殺されて退散するほうがマシ――だと思う。

魔王様は軽く首を傾げ、頬杖をついたまま数回瞬きをした。

「余の所有印が欲しいのか？」

「え？　いりません」

唐突な質問に、反射的に返事をする。

カラーンと耳障りな音が鳴り、振り向けばトレイを落としたチェーザレが固まっていた。兄に目を向ければ、ネヴァンディーンまでもが硬直している。

ネヴァンジェリンは首を傾げた。

奴隷などご免だと思っただけなのに、何なのだろう二人の反応は。

「ま、魔王様のご寵愛を断る魔族がいるとは……」

慄くような視線でネヴァンジェリンを見ながら、チェーザレがぎこちなくトレイを拾う。

魔王様のネヴァンジェリンに対する扱いは、寵愛というよりせいぜい愛玩だと本人は思った。どちらにせよ別に欲しくない。

「あのぅ、あれ？　わたし、勇者の件で呼ばれたんじゃ？」

「いえ、魔王様は昼頃、城内で人間の気配がしたから気をつけるようにと、ネヴァンジェリン様に忠告するために――」

「勇者が逃げた件ですか？」

「……逃したんですか？」

ネヴァンジェリンは慌てて口を塞いだ。

しかし時すでに遅し。盛大に自爆したあとだった。

（もしかして所有印の件、バレてなかったのー！？）

あまりにタイミングがよかったので、てっきりバレたかと思っていたが。魔王様のアンテナは別のものを察知中だったらしい。

「あ、あああの、でも、勇者はちゃんと捕まえて――！」

「ネヴァンジェリン」

「ひゃい！」

感情を含まぬ冷たい声に、ネヴァンジェリンは飛び上がる。

勇者に逃亡されかけたなんて、思えば大変な失態だ。おそるおそる振り返れば、深紅の隻眼がネヴァンジェリンだけを見据えている。

「どちらだ？」

恐怖に震えるネヴァンジェリンに、魔王様は淡々と尋ねてきた。

「ど、どちら……？」

「余の膝とネヴァンディーンの膝、どちらを選ぶ？」

（まだそこにこだわってたんですか！？）

危うくつっこむところだった。

魔王様は間延びした話し方をするわけではないし、決して察しも悪くない。ただ、ご自分の興味外のものは完全排除されているので、時に言動が突拍子もなかったり、ずれていたりする。

世に言う『天然』とはまた違うが、これはこれで絡みづらい。

「あ、あの、できれば一人で座りたいんですけど……」

ぽそぽそ本音で答えると、魔王様は眉間にシワを寄せられた。

「ご、ごめんなさい～！」

たったそれだけの変化で、ひどく不機嫌そうに見える。

普段表情を動かさない方だけに、小さな変化が何倍もの感情を帯びて映るのだ。

ネヴァンジェリンは角を押さえてしゃがみ込み、魔王様に背を向け丸くなった。

（ごめんなさい、ごめんなさい！　でも魔王様のお膝がいいとか言えません～！！）

ぴるぴる震えていると、苦笑しながらネヴァンディーンが歩み寄ってくる。

「ほら、ネヴァンジェリン。顔上げて」
「お兄様～」
「泣かないの。はい、あーん」

顔を上げると指で涙を拭われ、口にお菓子が放り込まれる。
優しい甘さが口内に広がって、ネヴァンジェリンは思わず唇を綻ばせた。

「美味しい」
「よかったね」

ネヴァンディーンがにっこり笑う。

「このお菓子もケーキも、魔王様が命じて用意してくださったんだよ。ちゃんとお礼を言おうね」
「……はい」

確かに、泣いて拒絶するのは失礼だ。
ごしごし目を擦って立ち上がり、ネヴァンジェリンは魔王様に向き直った。

「ありがとうございます、魔王様」

（でもお膝はイヤなんです）

後半は黙っておいた。

ぺこりと頭を下げると、魔王様は頬杖をやめて、テーブルの上に手を伸ばした。
ネヴァンディーンがくれたマカロンに似たお菓子――でも味はチョコレートだった――をつまんで、矯めつ眇めつ興味深そうに眺める。
眺めている間に、菓子はぼろりと壊れて消えた。
魔王様はもう一度お菓子を手にって、ネヴァンジェリンに差し出してくる。
ネヴァンジェリンがすかさず両手を差し出すと、何故か一瞬眉を顰めたものの、ネヴァンジェリンの手の平にお菓子を落としてくれた。
食べるとやはり美味しい。
甘いモノが大好きなネヴァンジェリンは、幸せな気持ちになってにっこり笑う。

「ありがとうございます」

魔王様はしばしの間、何かを考えるように沈黙した。
やがて思いついたらしく、ゆるりとした仕草で右の手の平を差し出してくる。
その手の上に、蒼く輝く美しい紋章が現れた。

「もしかしてそれ、魔王様の所有印ですか？」

破壊や創造の魔力は、ゲームのような見た目の派手さがなくて、ネヴァンジェリンはちょっぴり不満だった。
けれど所有の証や今魔王様が浮かべている紋章は、それっぽくて少し楽しい。

「欲しいか？」

「いりません」

ネヴァンジェリンの肩に置かれたネヴァンディーンの手がぴくりと動く。

きょとんと兄を見上げてから、ネヴァンジェリンは魔王様に目を戻した。

「でも、もう少し近くで見ていいですか？」

「許す」

ネヴァンジェリンは兄から離れ、魔王様の近くへ寄った。

魔王様の蒼い紋章は常に回転していて、二重円の中で象形文字に似た模様が踊っている。

（ゲームの魔法陣だ！）

何か出てくるんじゃないかとワクワクしてしまう。

興味深く眺めていると、魔王様がいきなり手を引っ込めた。

「あっ」

つられて一歩踏み出した――そこに、魔王様の足があった。

「ふみゃっ！？」

思い切り蹴躓いて、ネヴァンジェリンは前のめりに倒れる。

肌触りのいい上等の布が受け止めてくれたが、危うく床と鼻でキスしてしまうところだった。

（び、びっくりしたよぅ）

ドキドキしながら顔を上げると、ばっちり魔王様と視線が合う。
――至近距離で。
ネヴァンジェリンは硬直した。
魔王様の足に躓いて、その膝に倒れこんでしまったのだ。

（ってゆーか今、明らかに魔王様に誘導されたような……）

魔王様の薄い唇が、ゆっくりと口角を上げる。
まさしく魔王の微笑みに、ネヴァンジェリンは青褪め離れようとした。
しかしそれより一瞬早く、唇に何かが押し当てられる。

「口を開けろ」
「魔王様、お見事」

ぱちぱちと、背後でネヴァンディーンが手を叩いた。

第二五話：墓穴掘りには不可避の罠、でした（後書き）

※９月１０日
第十三話に魔王様の「触れると壊してしまう」力について加筆しました

第二六話：不可侵の力、その1

魔王様の指に触れぬよう、そっとお菓子を噛んで頭を引く。
唇に当てられていたお菓子は、口に含めば甘く舌の上で溶けた。

（うん、美味しー……じゃない！）

この期に及んで甘いモノにつられそうになり、ネヴァンジェリンは慌てて口角を引き締める。
お菓子なんかに騙されちゃダメだ。指を使って「はい、あーん」はさすがに犯罪だ。魔王様でも許しません！
精一杯眼差しをきつくして、ネヴァンジェリンは魔王様を見上げる。
「これってパワハラだと思います！」と主張しようと思ったものの――深紅の隻眼が僅かに和んでいるのを見て撃沈した。

（おのれ美形め。兄といい魔王様といい、無体をやらかしても顔で合法か！）

セクハラ含め性犯罪は、相手を不快にさせたかどうかが基準になる。
眼差し一つで赤面させられたネヴァンジェリンは、両拳を握って魔王様の膝に突っ伏した。突っ伏してから、ここに伏せてどうすると気づく。
慌てて立ち上がるより一瞬早く、魔王様が再びお菓子を口元へと差し出してくる。

「口を開けろ」

「あのっ、お菓子くらい自分で食べれま」

す、の一音を発する前に、口にお菓子を放り込まれる。
もぐもぐこくんと咀嚼してから、ネヴァンジェリンはもう一度口を開いた。

「っていうかですね、魔王様が食べればいいじゃないです」

か、の前にまた一つ。
もぐもぐ。うまうま。こっくん。

「そーですよ！　お菓子なら食器も要らないし、ご自分で食べれます」

よ、と言いかけたところで、目の前にお菓子を差し出される。
ぱくり。
思わず食らいついてから、ネヴァンジェリンは硬直した。

（やっちゃったー！）

自分から食べに行っちゃったよ。食い意地に負・け・た！

「あっはっは！」

背後でネヴァンディーンが爆笑している。
「やると思ったー」という心の声が聞こえたのは気のせいか。それとも双子の以心伝心か。
ネヴァンジェリンは羞恥で震えながら、お菓子を咥えて身体を引く。
もごもごと飲み込んで、そろっと魔王様を窺うと、魔王様は満足

そうに頷いていた。

「餌付けは有効のようだ」

「よかったですね、魔王様。ただ、手元には充分にお気をつけくださいますよう」

にっこり笑ったチェーザレが、追加のお菓子を魔王様の前に置く。

ネヴァンジェリンを小動物扱いしているのがよく分かるやり取りだ。屈辱と羞恥に身を震わせ、ネヴァンジェリンはそっぽを向いた。

（っていうか、成功してませんから！　餌付けされてませんから！）

あれは単なる条件反射で、決して魔王様に懐いたわけではない。

反抗を示してつーんと顔を背けたままでいると、魔王様はまたお菓子を差し出してくる。

（イヤですよー。食べませんよー。そっち向いたりしないですよー）

「ネヴァンジェリン」

名を呼ばれただけで、ネヴァンジェリンの反抗心はすぐ折れた。

土台魔族は魔王様に逆らえるようにはなっていないらしい。

それでも頑なに口を噤んだままでいると、また唇にお菓子を押し当てられる。

「口を開けろ」

そして命じられれば恥ずかしくとも、従うことしかできないのだ。

ネヴァンジェリンは目を閉じて、渋々口を開いた。

（逆らえない女の子にこんな命令するってひどい！）

バカップルや幼子でないかぎり、こんな真似はしないだろう。

もっとも魔王様にしてみれば、ネヴァンジェリンは幼子どころか小動物だろうが。それはそれで酷い。

（ちょっとくらいは反撃したいな）

ここは一つ、過失のフリしてお菓子ごと、魔王様の指に噛み付いてやろうか。

ネヴァンジェリンは考えた。もちろん魔王様相手に怪我をさせるつもりはないが、少しくらい驚けばいいと思う。

適当に指の位置を予測して、瞑目したまま口を閉じる。

歯に、お菓子とは違う感触が触れた――

「ネヴァンジェリン！」

刹那、妹の名を呼んだネヴァンディーンが、ネヴァンジェリンを抱き上げた。

そのまま慌てて魔王様から離れる。

「ネヴァン兄様？」

珍しく焦っている兄に驚き、きょとんとネヴァンジェリンが瞬きをすると、いきなり口に親指を突っ込まれた。

（な、何なのー！？）

「口を開けなさい！」

そう言いながら、すでに強引に開かせている。
何故か口内を覗き、次いで床に降ろして前から後ろからネヴァンジェリンの全身を確認すると、兄はほーっと息を吐いて脱力した。
そのまま疲れたように、ネヴァンジェリンの頭に顎を乗せてくる。

「勘弁してよ、ネヴァンジェリン。心臓止まるかと思ったよ……」
「まったくです」

チェーザレまでもが脱力して同意する。

「え？　……ふぇ？」

ネヴァンディーンとチェーザレを交互に眺め、ネヴァンジェリンは困惑した。

（もしかして、魔王様に噛み付いたのまずかった！？）

魔王様といえば魔『王様』なわけで。その上魔族の絶対的な庇護者なわけで。たとえ危害を加えるつもりでなくとも、あの行動は反逆と取られるのかもしれない。
なまじ日本人（わたなべりん）としての記憶があるだけに、王という存在に対する接し方が分からない。魔王様が気安く振舞っておられるから、この程度は許容範囲内だろうと勝手に判断していたのだが。
お膝であーんは許されて、甘噛みは許されないものなのだろうか？

「魔王様……？」

おそるおそる魔王様の表情を窺う。
特に表情はなかったが、ネヴァンジェリンが噛んだ指を凝視している。

ネヴァンジェリンは青褪め、慌てて頭を下げた。

「ご、ごめんなさ――！」

「もうよい」

魔王様はそうとだけ言って、玉座の肘置きに頬杖をついた。

そのまま目を閉じてしまう。

おろおろしている間にネヴァンディーンに連れ出され、チェーザレが広間の扉を閉じた。

二人の表情はどこか硬い。

「あ、あの……」

「今日はもうお帰りください」

チェーザレがそう言って一礼する。

「ありがとうございました」

第二七話：不可侵の力、その2

「待ってください！」

魔王様の下へ戻ろうとしたチェーザレを呼び止める。

思い余ってチェーザレの執事服を掴み、ネヴァンジェリンは問い詰めた。

「ありがとうございますって、ぜんぜんありがたそうに聞こえません！

魔王様、怒っちゃったんですか！？」

「いいえ、魔王様は驚かれたのでしょう。私も驚きましたが……」

少し困った声でチェーザレは答える。

意味が分からず眉を下げると、ネヴァンディーンが腰を屈めて視線を合わせた。

「ネヴァンジェリン、魔王様のお力を挙げてごらん？」

言われるままに、指を折りつつ答えてみる。

ネヴァンジェリンの知る魔王様の力は三つ。

「闇を介して空間を操れる。魔族から触れると魔力を増幅する。魔王様から触れると壊される」

「さっきのはどれに当たる？」

「二番でしょう？」

ネヴァンジェリンが噛み付いたのだから。

「三番だよ」

チェーザレが頷いて同意する。

戸惑うネヴァンジェリンにネヴァンディーンは言った。

「触る触られたの定義はね、触れた順番ではなくて、魔王様が受け入れたかどうかなんだよ」

魔王様から触れられる前に、こちらが触れればいいというのではなくて。

魔王様が他者からの接触を認識して、触られることを受け入れなければ『触られた』ことにならない。

「魔王様は絶対なる不可侵の存在。許可なく触れること自体、許されないんだよ」

「え……？」

ぽかんと目と口を開いて、ネヴァンジェリンは硬直した。

つまり、噛み付こうとしたのは――

（魔王様が気づいて許してくれてればいいけど、不意打ちだったらアウトってこと……？）

サーっと顔から血の気が引くのを自覚する。

ネヴァンジェリンは仰け反って叫んだ。

「ええっ！？　じゃあ後ろから、膝かっくんとかやったら死亡ですか！？」

「魔王様相手にそんなことをする人がいたら、超見てみたいけど。

まあ、アウトだね」
「その例を思いつくあなたに驚きますが、死ぬでしょうね」
二人して肯定され、顔からどころか全身から血の気が引く。
指先まで冷たくなってきた自分の身体に視線を落とし、ネヴァンジェリンは首を傾げた。
「わ、わたし、生きてますけど……？」
おそるおそる言ってみる。
自分では死んでいないと思うのだが、実は幽霊ですとかいうオチ――は、ないと信じたい。
「生きてるんだよねぇ」
「生きてるんですよね……」
二人も納得しかねるようだ。
「ギリギリ触れる前だったのかな、って思ったんだけど」
「あ、ああ、なるほど。そっか。そうね。触ってなかったのかも」
魔王様に触れた気がしたが、あれはお菓子だったのかもしれない。
……そのわりには、一切味がしなかったが。口の中にお菓子が残ることもなかったが。
「あの、魔王様が食べさせようとしたお菓子って、どうなったの……？」
「ネヴァンが口を閉じる直前に、消滅して消えたよ」
ヒィと自分で自分を抱く。

では何だ。触ったのはいったい何だったのだ。
混乱するネヴァンジェリンの両肩に手を置き、ネヴァンディーンは膝を伸ばした。
「魔王様のお力について、一度ちゃんと説明したほうがよさそうだね」
うんうんと何度も頷きを返す。
ネヴァンディーンは懐から、魔獣紙――獣型の怪物から作った、魔界版の羊皮紙――のノートを取り出した。
どうしてそんなものを兄が持ち歩いているかと言えば、ネヴァンジェリンに着せたい服を、ふと思いついたときに書き留めるためらしい。
……そう、このゴスロリ服、全てネヴァンディーンのデザインなのである。
創造系思考は苦手なのが魔族なのに、趣味のためなら種族的欠陥さえ克服する。ネヴァンディーン、当年三歳。種としての壁に挑戦しながら、まったく生産性は含まない、結局は魔族らしい兄である。
フリフリの服が書かれたページを数枚めくり、新しいページを表にすると、ネヴァンディーンはそこに天秤の絵を描いた。
ちなみにペンは使わない。爪にちょっと魔力を込めて、紙をなぞるだけで線が浮き出る。
「この世界には一つの天秤があってね、片側には聖王様と呼ばれる人間の守護者が、もう片方には魔王様が乗ってるんだ」
それは聖と魔の天秤。
ネヴァンディーンは左の秤に、デフォルメした魔王様の絵を描いた。右には白い版魔王様の絵を描いて、『聖王様（想像）』と注釈をつける。

やたらと絵がロリ可愛いのはつっこむべきか。

「ちなみに聖王様は、魔王様と対をなす存在。光を操り、自ら触れれば死を遠ざけ、触れられれば魔力を吸収する」

「魔王様と正反対なのね」

「うん。魔王様と同じ、不可侵の絶対者だよ」

兄は新しいページを開くと、元気に歩いている魔王様と、寝ている聖王様の絵を描いた。

何故か幼児にお話を読み聞かせる口調になって、ネヴァンディーンは二人の絵を指差す。

「この二人は常に、片方しか動けません。魔王様が活動しているときは、聖王様は眠っています。魔王様が眠れば、聖王様が目を覚まします。今は魔王様が起きている状態です」

天秤のページに戻り、絵を左へ傾ける。

「魔王様が起きて何かをすれば、天秤は魔王様の方へ傾きます。そうすると、世界に魔の要素が少し増えます」

「増えるとどうなるの？」

「僕たち魔族が強くなるね。怪物も増えるかな」

今度は絵を右に傾ける。

「魔王様が寝ちゃうと――人間流に言えば倒されると、聖王様が目覚めます。聖王様が動けば、世界から魔の要素が少なくなって、聖なる力が増えていきます」

「倒すって……」

「殺されたらってことだね。そうしたら聖王様が現れる。で、聖王

様が死んだら、また魔王様が」

ネヴァンジェリンはしばし沈黙し、おそるおそる尋ねた。

「確か、現魔王様は最長君臨期間を更新中……」

「ええ、八千年は君臨し続けていらっしゃいます」

チェーザレが頷いて補足する。

「魔王様が眠りにつけば、魔界は消えてなくなり、聖界と呼ばれる世界が現れます。魔族や怪物も消え、今後は天使と聖獣が生まれます」

「勇者が魔王様をピンポイントで攻めるわけが分かるでしょう？魔王様が起きて、世界に影響を与えているかぎり、魔族はどんどん強くなって、聖王様は目覚めない」

他へ侵攻して、まず足掛かりを――などと、悠長に言っている場合ではないらしい。なるほど、人間との力差はこれが原因かと理解した。

「世界に影響を与えるっていうのは……ええと、人間を殺したり、領土を増やしたりってこと？」

「ううん。普通に起きて、そこら辺歩き回るだけでいい。魔王様が自分から活動すれば、それだけで天秤は動くんだよ」

新しいページにまた天秤の絵が描かれる。秤は左に傾いていて、魔王様がその上で、楽しそうに飛び跳ねていた。

「そんな簡単に動いちゃうんだ」

「動くんだよねー、これが。でもちょっぴりだから、世界には大し

て影響ないよ。一年やそこら散歩し続けても、目に見えるほどの変化は起きないし」

「……でも魔王様、いつもふらふらしてるよね？」

「数千年単位でね。さすがに天秤も、かなり傾いちゃったよね」

（魔王様ー、ちょっとだけ散歩控えてあげてください！　人間が可哀想ですっ！！）

広間に居る魔王様に向けて、心の中で叫ぶ。

ついでにエリオットを思った。健康優良児かつ野次馬根性に溢れた魔王様ですが、きっと悪気はありません。動きまくってるけど、力差広げてやれなんて、別に思ってないんだよー……たぶん。

「さて、世界にはちょっぴりの変化ですが、魔王様が触った対象はそうはいきません」

兄は先生口調に戻り、飛び跳ねる魔王様の足元に、小さな点のような絵を描いた。

点のようなものなのに、犬の絵に見えるのは気のせいだろうか。ヴァーリヴァルグを思い出すのは穿ち過ぎか。

「この、取るに足らない点みたいな存在が、魔王様の上を這っても意味はありません。でも、魔王様に踏まれたら、点にとっては一大事です。点にとってはね」

「分かった！　魔王様から触れたかそうでないかで、差が出るのはこのせいね？」

「そのとおりー」

ネヴァンディーンは賢い賢いと大げさに妹の頭を撫でる。

「魔王様が触れたときの力は、実はこの天秤が動くときに起こる変化なんだ。魔王様が活動した。天秤が傾く。その変化は触れた対象にもっとも強く現れる」

それはまるで波紋のように。

触れた箇所から変化は広がっていく。もっとも波打つのは、触れたその部分。

「魔王様が触れれば、生命力と魔力は死と滅びに変換される。チェーザレさんが執事なのは、有能なのもあるけど、屍鬼族だっていうのが一番の理由だね」

「ええ、屍鬼族は死体を食み屍を纏う者。この身体は屍ですから、触れられてもすぐには消滅しません。変化の力が本体に及ぶ前に、脱ぎ捨てれば命は助かります」

「そっか。チェーザレさんは死体を着てるだけで、本性は別なんですよね」

すっかり紫色の水死体で認識していたが、本性は他にあるのだ。

「ちなみに、どんな姿なんですか？」

「ヒミツです。屍鬼族は滅多なことでは本性を見せませんので。まあ、女性に見せるほどのものではないですよ」

ネヴァンジェリンは水死体を着ようとする小人さんを想像し、ぜんぜん可愛くないと即廃棄した。それ以前に改めて考えると、死体を着るとか怖すぎる。

「えと、生命力と魔力が変換されるのが問題なんですよね。死体なのに壊れちゃうんですか？」

「形ある限りはどんなものでも、一定の生気を含みます。まあ、新

鮮な死体ほど早く壊れますね」
「ああ、だから水死体なんですか……」

できるだけ状態の悪い死体を選んでいるのかもしれない。

「物体や食べ物なんかもそうだね。鮮度や大きさに比例して早く壊れる。小さなお菓子くらいならしばらくは触ってられるけど、魔王様がお城に触ったら一瞬だよ？　結構圧巻」
「よくこのお城、壊れてないね」
「壊さないために、いつもちょっとだけ浮いてるらしいからね」
「日常空気イス！？」

歩くときに足音がしないのも、水面を歩ける謎もこれで解けた。
すごい大変なんだなぁと感心するネヴァンジェリンの頭に、ネヴァンディーンが片手を置く。

「和んだところで話を戻します」
「死体と空気イスで和むはずないけど、どうぞ」

ネヴァンディーンがさらさらとまた、可愛らしいデフォルトイラストを描く。
ネヴァンジェリンは眉を顰めた。それは魔王様と、その膝に乗ったネヴァンジェリンの絵だった。

「魔王様のお膝でご機嫌なネヴァンジェリンちゃんですが――」
「ぜんぜんご機嫌じゃない！」
「これは魔王様が受け入れ、ネヴァンジェリンちゃんから触れたので問題ありません。むしろ、魔王様が放出している魔力がもらえてウハウハです」
「う、うはうは……」

美形が真顔でそんな言葉を使わないでほしい。
脱力するネヴァンジェリンをよそに、ネヴァンディーンは片足を上げた魔王様を描いた。

「魔王様は足が痺れてきたので、足を組み替えようとしました。魔王様が自分から動くので、天秤が傾きます。ところが膝にはネヴァンジェリンちゃんが乗っています」
「ええと、もしかして、その場合はアウト……？」
「魔王様がネヴァンジェリンちゃんを受け入れていればセーフ。変化がかかる対象は、魔王様がしようと思ったことに関わるものだからね。乗っていても邪魔じゃないって、そう思ってくだされば変化は起きない」

ほっと息を吐くと、チェーザレが補足してくれた。

「つまりですね、魔王様が能動的に変化を求めたか、受動的に受け入れたかで変わるわけです。
魔王様があなたに触れられていることを認識し、問題ないとした上で動けば影響はありません。それは受動ですからね。認識していなかったり邪魔だと感じた場合は、能動的行為途中での接触ですから、即死です」
「そ、即死……」

思わず心臓を押さえるが、動いている。うん、生きてる生きてる。

「それなのに何故、あなたは生きてるんでしょうねぇ……」
「そ、そんな、ゾンビ見たみたいな目で見ないでください！」

死体を着ている人に、そんな目を向けられる謂れはない。

失礼なと頬を膨らませると、ネヴァンディーンが呟いた。

「実は三人とも死んでて、幽霊同士でお話ししてるのかも？」

もう一度胸を押さえる。

――だから、生きてますってば！！

第二八話：不可侵の力、その3

死んでいるのに、生きているつもりでいるのかもしれない――
それは転生時の記憶を持つネヴァンジェリンには笑えない話だ。

（でも生きてる！　……生きてる、よね？）

心臓はいつもより激しく鼓動を打っている。
胸を押さえてドキドキしていると、ネヴァンディーンがその手を離させた。
きょとんと見上げると――

「うん、動いてるね。生きてる生きてる」

大きな男の手が左胸を揉みしだく。
ぷるぷる震えたネヴァンジェリンは、股間目掛けて右足を振り上げた。

「お～に～い～さ～ま～！？」
「ネヴァンに魔王様の力があったら、今ごろ僕は死んじゃってるねー」
「部分破壊で男として死なせてやるー！！」

あっさり受け止められた右足に力を込めるが、ネヴァンディーンの手はびくともしない。
兄は爽やかな笑顔で魔王様に関する説明を締めくくった。

「というわけで、こちらから触れても、受け入れられない接触なら

魔王様には排除されます。死にたくなかったら、不快行動や不意打ちはやめましょう。分かったかなー？」

「先生、不快行動（セクハラ）してくる変態兄様を排除する方法が分かりません！」

「甘んじて受け入れると気持ちよくなれます」

「排除です、排除！　受け入れるなんて選択肢はないんですってば、バカー！！」

ネヴァンジェリンの怒りを笑っていなし、ネヴァンディーンは妹の額にキスをする。

そのままぎゅっと抱きしめて、優しい声でこう言った。

「何にせよ、ネヴァンが無事でよかったよ。僕はそれだけで充分。理由なんてどうでもいい。でも心臓に悪いから、二度とあんなことはしないでね」

（お兄様の卑怯者……）

こうして心配してくれるから、何をされても排除できずに終わるのだ。

頬を膨らませて足を下ろす。そんなネヴァンジェリンの頭を、兄は楽しそうに撫で回した。

「魔王様に関する説明は、こんなところかな。ね？　僕たちが驚いたわけが分かったでしょう？」

「分かったけど……」

大変危なかったのは理解したが、ネヴァンジェリンは今生きている。

自分に特別な要素があるとはまったく思わないので――転生補正

をもらえるほど恵まれた人間なら、そもそもあんなマヌケな死に方はしていない――、ネヴァンジェリンは現実的に考えた。
魔王様に噛み付いたつもりだったが、触れていなかったのか。あるいは――

「魔王様が噛まれる寸前に気づいて、受け入れてくれたんでしょうか？」
「なるほど、そうかもしれませんね」

納得とばかりにチェーザレは頷いた。
そしてくすりと小さく笑う。

「だとしたら、本当に寸前で気づかれたのでしょうね。あんなに動揺なさるなんて」
「動揺……してらしたんですか？」

少なくともネヴァンジェリンには、いつもの魔王様に見えたが。

「ええ。驚かれた後は何事もなかったとご自身に言い聞かせるため、逆に平静を装われるんです」
「猫ですか、魔王様は！」

動揺すると、猫は平静を取り戻すために毛繕いを始める。
一人広間に残り、髪を手で梳く魔王様を想像して、ネヴァンジェリンは吹き出しそうになった。チェーザレの言うとおりだとしたら、凶悪な能力と裏腹に随分と可愛い魔王様だ。ギャップ萌えるじゃないか、けしからん。
緩みそうな唇を押さえて堪えていると、チェーザレが何かに気づいた素振りを見せて広間を振り返った。

「魔王様がお呼びのようです。申し訳ありませんが、少々お待ち下さい」

言い置いて広間に戻っていく。

再び出てきたときには、両手で包みを大事そうに携えていた。

「魔王様からネヴァンジェリン様へと言付かりました」

「わたしにですか？」

中を覗くとお菓子が入っていた。

マカロンに似た丸いお菓子だ。魔王様がネヴァンジェリンに食べさせようとしたもの。

甘いモノが好きなネヴァンジェリンは素直に嬉しかったが、少し量が多すぎる気がした。テーブルにあったお菓子全てを包んでくれたのではないだろうか。

「魔王様は食べないんですか？」

「魔王様は元々飲食はなさいません。あなたが食べさせようとなさらないかぎり、これからもお食べになることはないでしょう」

食べさせようとしたのではなく、食べさせようとしろと強要されたのだが――

反論しようとして、あのときの魔王様の言葉を思い出す。

ネヴァンジェリンは今さら気づいた。

「もしかして、魔王様の『自分に食事をさせろ』っていう言葉の意味は、食べたいと思う気にさせろ、ってことだったんですか……？」

食器が壊れるから食べられないとか、そういう意味でなくて。

おそるおそる尋ねると、微笑が返ってきた。

「まさか口元に持ってこられるとは、予想されていなかったでしょうね」
「ぎゃー！」
ネヴァンジェリンは頭を抱えた。
なんてこった。恥の上塗りだ。いや、もうすでにしたことだから、知らなかった恥に気づいたというべきか。
（そ、そうだよね。瘴気を食べてるって仰ってたし。それだとチェーザレさんが『あーん』をやってたってことになるもんね）
お母さん的空気を振りまきながら、魔王様に「あーん」をする紫色の水死体――
ないな。ないない。ホラーなんだかほのぼのなんだか、よく分からない光景になってしまう。
浮かんだ光景を必死で消去していると、チェーザレがいきなりネヴァンジェリンに傅いた。
「って、何ですか！？」
「此度の危機に際し、恐怖を感じられたことでしょう。しかしネヴァンジェリン様、どうか魔王様を恐れないでください。魔王様ご自身は大変気さくな方なのです」
それはネヴァンジェリンも知っている。
そもそも、そうでなければ膝の上に呼んだり、魔界中を散歩して回ったりはしていないだろう。
「それなのに、全てを拒絶するお力ゆえ、誰にも触れられず、触れてくる者さえなく。魔王様はいつもお寂しそうでした」

「え、でも……」

触れることはできなくても、触れてもらうことはできるはずだ。

チェーザレはやんわり首を振り、ハンカチでそっと目頭を押さえた。

「魔王様が不要と感じれば、瞬時に滅びることになるのです。それと知りながら手を伸ばせる者がどれほどおりましょうか。ましてや媚びでなく、命を賭した奉仕でもなく、ただ触れた者は私が知るかぎりあなただけです」

ネヴァンジェリンは知らなかったし、最初は落っこちて、次からは手招きで呼ばれただけだ。そんな葛藤、権利さえもらっていない。

憮然となるネヴァンジェリンの前で、チェーザレはさらに情感を込めて言葉を紡ぐ。

「いつもお独りの魔王様が、私はとにかく不憫で不憫で……」

「チェーザレさん……」

「せめて御心を慰めるべく、様々な娯楽を用意させて頂きましたが、あれも飽きた、これも飽きたとわがまま放題。いい加減めんどくさくなってきたところにあなたが現れ、これは押し付けてしまえと個人的誘惑に駆られまして……。食事にはいつも苦労なさっていたようですし、親切めかして餌付けできれば一石二鳥。魔王様に任せれば、暇潰しにもなって一石三鳥。そう思ったのです」

「……ぶっちゃけ過ぎです、チェーザレさん」

前半はいい話だったのに、半ばから後半にかけて台無しだ。

ネヴァンジェリンは半眼になった。しょせんは魔族。最終的にはオチがないとダメなのか。

「さっそく茶会を提案したところ、魔王様は了承なさいました」
「チェーザレさんがわたしを呼んだんですか！？」
「あくまで提案ですよ。魔王様は伝えることがあるから丁度いいと……城内で人間の気配がしたと仰っていましたが、魔王様も本心ではあなたにお会いしたかったのでしょう」
そういえばそんなことを言っていたなと、ネヴァンジェリンは今思い出した。
（人間の気配……エリオット王子が逃げたときのことならいいけど。ちゃんと調べなくちゃ）
記憶に付箋を貼り付けている隙に、右手をがっしり握られた。手袋越しに、水気過多のぶよぶよした肌の質感が伝わってくる。ぞぞぞと背筋を走ったネヴァンジェリンの悪寒を無視し、チェーザレは真摯に懇願した。
「ですからお願いです、ネヴァンジェリン様。魔王様を避けないでください」
「お願いですから、とにかく手を放してー！！」
ぶんぶん握られた手を振るが、両手でがっちり固定されていて離れない。
「これからも魔王様の御心を慰めるべく膝に乗り、手ずから食事を補助して差し上げてください」
「分かりました！　分かりましたからっ！」
「ではさっそく、今いただいたお菓子を魔王様に――」
「何でもやりますから、手を放してよーーーっっっ！！」

泣きながら首を縦に振ると、ようやく右手が解放された。
慌ててネヴァンディーンの後ろに隠れると、にっこり笑顔でチェーザレが立ち上がる。

「ありがとうございます。魔王様もきっと喜ばれることでしょう」

ありがとうも何も、激しく脅された気しかしない。

「さすがは魔王様の側近、手強いね」
「手強いじゃなくて、あざといだと思います！」

ネヴァンディーンの背中に張り付いて、じーっと恨みがましく睨みつけたが、温和な――だと思う――笑顔は変わらなかった。
恭しく一礼し、広間の扉を指し示す。

「ではネヴァンジェリン様、さっそくお願いします」
「はい……？」

ネヴァンジェリンは首を傾げ――青褪めた。

（い、今わたし、何を了承しちゃったんだっけ……！？）

確か、お菓子を魔王様に食べさせるようにと――

「え、えええいや、その、さっき追い出されたばかりですから！」
「驚かれただけで、決してお怒りになったわけではありません。大丈夫ですよ」
「わたしが大丈夫じゃないんですっ！」

これまでは魔王様の力の詳細を知らなかったので、羞恥心以外の

葛藤は少なかった。
しかし今度はそれに恐怖心が重なってくる。
魔王様が身動ぎしただけで、ネヴァンジェリンの動きを魔王様が見過ごしただけで、自分は消滅してしまうのだ。膝に乗れと言われて頷けるわけがない。
怯えるネヴァンジェリンの肩に、ネヴァンディーンが優しく手を置いた。

「安心して、ネヴァンジェリン」
「お兄様……」
「よっぽど変なことをしないかぎり、魔王様が君の動きを見過ごすなんてありえないから。だって君とろいし。すぐ顔に出るし。あ、いきなり噛み付くとか右ストレートとかはダメだからね」
「もうしませんよっ！」

二度やったらただのバカだ。
ネヴァンディーンは満足そうに頷いた。

「じゃあ、問題ないね」
「……あれ？」

（え、そうだっけ？　あれ？　そーいうことに――ならないでしょ、やっぱり！！）

騙されるものか。
確かに魔王様なら、ネヴァンジェリンの動きくらい簡単に把握できるだろう。不要だ鬱陶しいと拒絶するくらいなら、最初から膝に乗れなどと強要するわけもない。
しかしだ、恐怖心を除けばやはり羞恥心が残るし、それ以前に自分の人権はどこに行った。

「わたしはペットでもオモチャでもありません！！」
「ネヴァンジェリン様、魔族は皆魔王様の忠実なる下僕（しもべ）であり、道具です」

基本的人権など存在しないこの世界。言われてみればそのとおりだ。
愕然とするネヴァンジェリンに、チェーザレは恭しく片手を差し出した。

「それともネヴァンジェリン様、もう一度跪いて懇願したほうがよろしいのでしょうか。あなたの手を握りながら、分かっていただけるまでじっくりと」

生理的嫌悪に震え、ネヴァンジェリンは高速で首を振る。
にっこり微笑んだチェーザレの手が、再び扉を指し示した。ネヴァンディーンまでもが一礼し、軽く口付けを落としてネヴァンジェリンの右手を取る。

「ではどうぞお嬢様」
『行ってらっしゃいませ』

二人ハモったその声が、逝ってらっしゃいませと聞こえた――

第二九話：不貞寝した、次の日

魔王様とのお茶を終え、拗ねた勇者にご飯を運んで――ネヴァンジェリンは眠った。

寝るには早い時間だったが、くたくたに疲れきっていた。

初っ端からイベントを連続でこなし過ぎだ。ゲーム発売日に速攻クリアを目指す、小中学生男子のよう。

（わたしはゲームはやり込み派なのに……）

ＲＰＧならコレクターを、シミュレーションなら予備セーブデータまで確保して、パーファクトクリアを目指す。完璧主義すぎて逆にほとんどゲームはしなかったが、一つのゲームをじっくりと楽しむタイプだった。

（でも今の状況って、ある意味プロローグが終わったばかりよね）

勇者と和解はしたものの、肝心の『人間の価値の証明』がまだ糸口さえ掴めていない。

夢をたゆたいながら、ネヴァンジェリンはため息を吐く。

淫魔は別名『夢魔』とも呼ばれる。実際に交わる以外でも、夢を介して異性に接触し、性的な夢を見せて精気を奪うことができる。

他人のエッチな夢など見たくもないネヴァンジェリンは、自分の夢の中でぐだぐだするか、夢でさらに寝るだけだが。

乳白色の何もない世界で、ごろごろ怠惰に寝転びながら、ネヴァンジェリンはぼやいた。

「負けるケンカなら最初から売るな、人間ー」

「魔王様の世話ぐらい一人でしろ、水死体ー」
「魔王なら魔王らしく玉座いろ、暇人ー」
「妹に盛るんじゃねぇですよ、バカ兄貴ー」
「仔犬可愛いー」

ぼやきというよりもはや暴言だ。
そんなに不満なら、勇者を助けるなどやめればいいのだが、そうはいかないのが渡辺凛（にんげん）の意識。
「最近自殺者多いんだって」「へぇー」と軽く聞き流していたくせに、実際目の前で飛び降りそうな人を見つければ、出てくる言葉は「早まるな！」の心理だ。

（人間って実はツンデレ？）

あ、あんたのことなんか、どうでもいいんだからね！
……でも仕方がないから助けてあげる。

（……ダメだ。脳みそまで疲れてる）

ネヴァンジェリンはがっくり項垂れた。
夢を見るのも打ち切って、そろそろ完全に寝てしまおうか。

（弱くて引篭もりで世間知らずなわたしに、なんかいろいろ無理難題すぎるんですよ）

形ばかり参戦して退治されかけて発言してムチャぶりされてキスされて狼に出会して魔王から逃げられず勇者に逃げられて捕まえて戦って機嫌とってまた機嫌とって……
せめてもう少し、試練レベルを下げてほしいと思う。
ゲームの勇者がおつかいクエストから始めるように、村周辺から

ゆっくり進めさせてくれないか。

（いっそ冒険ランクとか振ってくれてさ、無理な冒険は「レベルを上げてからどうぞ」とか言って追い返してくれればいいのに）

レベルが足りないので、勇者救出イベントは挑戦できません。

そう言ってくれれば――

（……ランク誤魔化して潜り込むんだろうなー、わたし）

弱いのに諦めだけは悪い自分。もはや苦笑するしかない。

（もういい、寝ちゃおう）

現実はゲームとは違うのだ。

やり直しの利かない、たった一回の人生ゲーム。負けたくなければ無理をしてでも進むしかない。たとえそれが無理ゲーでも、どんなに理不尽なゲームでも。

目覚めればまた、こちらの都合を無視した現実（リアル）が始まる――

――とはいえ、こんな現実（リアル）はさすがに予想外だった。

「あれ……？」

目覚めれば何故か、目の前に鉄格子。

上を見ても、下を見ても、左右後ろ三百六十度確認しても、鉄格子。

（何これ、鳥籠！？）

屋根部分が優美な曲線を描いて、太い枝にぶら下がっている。

しかも鳥籠は一つではなかった。樹齢数千年を数えそうな大樹の枝に、無数に吊るされている。そしてその一つ一つに、魔族が囚われ眠っていた。

足元を見ればたくさんの穴。木の周辺を囲う鉄条網。おまけに武器を持ち、見廻りよろしくうろつく影が――

（もしかしてわたし、寝ている間に誘拐された……！？）

ネヴァンジェリンは青褪めた。

魔王城の一室で、兄と眠りについたはずなのに。

――いや、兄は食事に行くと言っていたから、その間にネヴァンジェリンだけこっそりと……

「え、ええーっっっ！？」

ネヴァンジェリンは焦った。

いくらなんでもこの試練はないだろう。なんて強烈な目覚めの一発だ。

このまま他大勢の魔族と一緒に、どこぞのスケベおやじに売られちゃったりするのだろうか。

「だ、だだ出して、出してぇー！！」

思わず騒いでしまったが、それで出してもらえるなら苦労はない。むしろ悪者たちの商売あがったりだ。それなら最初から拐うものか。

格子を握ってしゅんと肩を落としたら――

「……え？」

（開いちゃったよ！？）

鳥籠の扉はいとも簡単に開いてしまった。

ぽかんと口を開けて固まるネヴァンジェリンの下へ、バサバサ羽根音を鳴らして魔族が一人飛んでくる。

「お客さん、どうかしましたかい？」

威勢よさげな鳥人族の男が、かくっと小首を傾げて尋ねてくる。

顔の周りだけ赤い緑色の巨大インコ――鉤爪あるけど腕付き――を見上げ、ネヴァンジェリンは呆然と気になった単語を繰り返した。

「お、お客さん……？」

（売り物じゃなくて、わたしが？　わたしが買い手なの？）

鳥籠内からお買い物って、どんな斬新な奴隷市場だ。

アレか、売られる気分を味わいながら、人買いやろうぜいって趣旨か。そんな馬鹿な！

そもそもにして、こんな恐ろしげな買い物に手を出した覚えはない。魔界転生して三年、確かに「お買い物してストレス発散したーい」と思ったことはあったが、物の調達はいつも兄が行っていた。

魔界に売買が存在するかさえ、ネヴァンジェリンは知らないのだ。

「あ、あのぅ、わたし、どうしてここにいるんでしょう……？」

その鋭い嘴（くちばし）で、いきなりつつかれたらどうしよう。

怯えつつおそるおそる尋ねると、巨大インコ――もとい、鳥人族

の男は素早い瞬きを繰り返した。
ネヴァンジェリンは寝起きが悪く、寝惚けることも多いが、いくらなんでも自ら鳥籠に入ったりはしないだろう。
ましてや、現在地にまったく心当たりがないわけで。

（現在地――）

ふとネヴァンジェリンは顔を上げ、足元ではなく、広がる光景全てに目をやった。
くねくね曲がった木々が絡み合う、よくあるタイプの魔界の森。空から見れば同じなので、どこも似たようなものだと思っていた。
けれどこの森には、そこそこに明かりが灯っている。
巨大な切り株の内部を繰り抜き、窓と扉をつけた家。丸い石を積み上げた、生垣のような形の住居。人が出入りする巨大な穴に、呑んだくれて水をかけられる魔族の姿。

「魔族の、街……？」

そんなものが存在するなど、ネヴァンジェリンは想像さえしたことがなかった。
群れを作るタイプの魔族はともかく、他は協調性ゼロの、空気を読めない社会不適格者集団だ。たまに集まる程度ならともかく、近所付き合いや共同生活が成り立つとは思えない。
そう、思っていたのだが……

「魔族の街？　――ああ、人狼の村ですか。それなら、ここから一里ほど東に飛べば、鉄の森（イアールンヴィズ）に着きますよ。あそこには人狼の群れが三十はあるそうです。まあ、街と言えなくはないですよね」
「え？　いえあの、下に見えるのは……？」
「あれはエルフ族の街ですけど」

何言ってんのこの子。
鳥人族の男の目が、無言でそう言っている。
まったく事情が掴めず、ネヴァンジェリンは泣きそうになった。
どうして一夜明けたら鳥籠の中で、それも木から吊るされているのだ。
下には『エルフ族』という何ともファンタジーな種族の街があり、ネヴァンジェリンはこの扱いで『お客様』なのだという。
涙ぐむネヴァンジェリンを見て、鳥人族の男は明らかに慌てた。

「ちょ、待って、待ってくださいよ！　なんで泣くんです！？　客に泣かれたとあっちゃ――
ってゆーか、魔族が簡単に泣くな！？」
「う、うぅ、おに、おにいさ」
「待った待った待ったぁーーーっっっ！！　アンタまさかアレか、琥珀の悪魔の妹か！」

ネヴァンディーンを呼ぼうとしたネヴァンジェリンは、ピタリとその口を閉じた。

（琥珀の悪魔って……）

ピースサインを斜めに翳し、琥珀色の瞳を煌めかせてキラッと笑う兄を思い浮かべる。

――お兄様ぁ、なんか悪役丸出しな二つ名が付いてるんですけど！
妹の知らないところで、いつも何しちゃってるんですか！？

第三十話：兄の行為には不介入、希望で

琥珀の悪魔――

初めて知った兄の二つ名に、ネヴァンジェリンはしばし唖然としてしまった。

（魔族に悪魔呼ばわりされるって、ホント何をやらかしたのネヴァン兄様！）

暴力・乱闘を肉体言語（ボディーランゲージ）と称するのが魔族たちだ。相当酷いことをしなければ、こんな悪名はつけられないだろう。

しかもその妹として、自分まで噂になっているらしい。

「あ、あのぅ、ネヴァンディーン兄様って有名なんですか……？」

「知らねぇのか！？」

遠回しに二つ名の由来を訊こうとしたら、信じられないとばかりに叫ばれた。

巨大インコは黒目を点にして――もとい、鳥人族の男は目を瞠って驚いている。

「元はと言やぁ、全部アンタが原因だろーが」

「わ、わたし！？」

「アンタ寄越せとか言った魔族を――」

男の言葉はそこで途切れた。

何か降ってきたなと思ったら、鳥人族の男が落下して、代わりにその場所に兄がいる。

「おはよう、ネヴァンジェリン」

コウモリの羽根を広げて優雅に宙に静止した兄は、とろりと甘く微笑んで、ネヴァンジェリンを抱き上げた。

そのまま鳥籠から出されるも、落ちていった男が気になって仕方ない。

身を乗り出して下を覗けば、地面に激突する前にどうにか羽ばたけたらしい。怒った様子で急上昇してくる。

「おい、てめぇ！　いきなり何しやがる！？」

「こんばんは、店員さん。よい夜だね」

にっこり微笑んだネヴァンディーンの言葉に、鳥人族の男は身を強張らせた。

「こ、琥珀の悪魔……！？」

「え、誰それ。妹の前で何て不穏な呼び方してくれてんの鳥頭。羽根を一本一本毟り取ったあと、敏感になった肌を爪でぐっちゃぐちゃに愛撫してあげようか？」

ぶぶぶと高速で首を振った男は、「すんませんした！」と頭を下げて飛び去っていく。

ネヴァンディーンは妹に視線を戻して、あはっと笑った。

「変な人だったねー」

「ソウデスネー」

二つ名の由来は訊かないほうが幸せでいられそうだ。自分も関わっているのなら特に。

咄嗟に判断したネヴァンジェリンは、質問を切り替える。

「お兄様、ここはどこ？　どうしてわたしは鳥籠なんかにいたの？」

「ここは王侯の森（スカタルンド）。エルフ族の街の一つだよ。エリスの服を調達に行くなら一緒に行きたいって、昨日言ってたでしょう？　ちょっと遠い場所だから、籠を頼んだんだ」

「籠……うん、まあ、確かに籠……」

主に空を飛べない魔族を対象に、目的地まで運んでくれるサービスがあるらしい。

魔界版タクシーかと納得したが、驚いたのは、この場所が送迎屋兼、宿屋だという事実だ。

「寝心地がよくないのと完全個室なのが残念だけど、エルフ族の街には、魔族が泊まれる施設はここしかないんだよね」

空を飛ぶ魔族は鳥籠で、地を駆ける魔族は下に見える穴で寝泊りする。

武器を持ち見回っているのは宿屋スタッフで、揉め事があれば即武力鎮静するそうだ。

（お兄様、どう考えてもこれって隔離されてます！）

空気の読めない魔族たちは、ある意味素直に受け入れているようだが、明らかにエルフ族から隔離政策を受けている。

さらに、街を歩ける時間帯まで決められているらしい。

「どうせならいろいろ見て回りたいでしょう？　だから、寝ている間にネヴァンを運んだんだよ」

「そんな決まり守るかーって、暴れる魔族とかはいないの？」

「暴れても他の魔族に排除されるだけだしねぇ。エルフ族は誰かしら魔族の所有物になってるから、下手したらフルボッコだよ」

なるほど、自重せざるを得ないわけだ。

ネヴァンジェリンは納得し、改めて街を見下ろした。

魔族的でない建物は見えるが、歩いているのは魔族ばかりだ。エルフ族とやらはあまり出歩かないのだろうか。

（エルフっていったら耳が長くてスマートで、金髪知的美人さんなイメージだよね）

少なくとも、渡辺凛（ぜんせ）が知るエルフ知識ではそうなっていた。

状況を掴むにつれワクワクしてきたネヴァンジェリンは、ネヴァンディーンの袖を引っ張った。

「ネヴァン兄様、早く街に行ってみたい！」

「いいよ。それじゃ、ヴァルとエリスを回収に行こうか」

羽根を閉じ、重力に任せてネヴァンディーンは自由落下する。七階くらいの高さから、妹を抱いたまま平然と着地して、地面に開いた穴の一つに向かった。

「二人も連れてきてくれたのね」

「いちおうね。ちょっとここで待ってて」

ネヴァンジェリンを腕から降ろし、通りかかった店員から武器――地獄の鬼が持ってそうなトゲ付きこんぼう――を借りて、ネヴァンディーンは軽く振りかぶった。

「えいっ」

のんきな掛け声と共に、こんぼうを穴目掛けて全力で投げ込む。
こんぼうは一直線に穴に突き刺さり、中からくぐもった悲鳴が聞こえた。三秒ほどの沈黙を挟んで、穴から狼が這い出してくる。

「ネヴァンディーン！　貴様、俺を殺すつもりか！！」
「あは、そのつもりならもっと容赦ないよ」

片手にこんぼうを掴んだ巨大狼は、豪腕の筋肉を膨らませてそれを投げ返した。
ネヴァンディーンは避けもせず、手を翳しただけで容易くこんぼうを破壊する。

「あ、壊しちゃった。ごめんね」
「困りますよ、お客さん。それと、乱闘なら他所でやってください」

竜人族の店員に渋面を向けられて、ネヴァンディーンは軽く片手を挙げた。
獰猛な唸り声を上げた狼は、今度は両足に力を込めてネヴァンディーンに跳びかかろうとしたが、その前にネヴァンジェリンを指差されて目を見開く。
焦ったように殺気を消し、体勢を取り繕って、狼はネヴァンジェリンに挨拶をした。

「おはよう――いや、こんばんはだったな。よい夜だな」

近づいてくる二メートル超えの狼に、ネヴァンジェリンは思わず後退った。
途端、狼の耳がしゅーんと下がる。

「やはり、この姿は怖いか……」

狼の姿が仔犬――もとい、仔狼に変わる。

ちょこちょこ寄ってきた仔狼はネヴァンジェリンの前で両足を揃え、もう一度挨拶を繰り返した。

「よい夜だな、ネヴァンジェリン。よく眠れたか？」

「おはようございます、ヴァーリヴァルグさん」

ほっと安堵の息を零して、ネヴァンジェリンは挨拶を返す。

あの巨大狼が彼の本性だと分かってはいるが、やはり間近で見ると怖い。この姿が安心する。

姿を変えさせていることのお礼とお詫びを込めて頭を撫ぜると、仔狼は気持ちよさげに目を細めた。ふさふさの尻尾がぱたぱた振られ、鼻が嬉しそうにぴすぴすする。

「愛玩犬が板についてきたねー」

ネヴァンディーンが揶揄したが、ヴァーリヴァルグは耳を動かしただけで黙殺した。えらい。今は仔狼の姿だが、兄よりよほど理性的だ。ついでに首周りも掻いてやる。

「エリオット王子は？」

「エリスは別預かり。人間だし、穴の中だと窒息しそうだって言うからね。鳥籠は不安定で寝れないって言うしさ。王子様はわがままだよね」

「そうかなぁ……」

人間としては、至極真っ当な要求だとネヴァンジェリンは思った。むしろ、自分も起きていれば鳥籠は遠慮したいと訴えたはずだ。

――果たしてエリオットは、大樹の根元で檻に入っていた。
人間の客は珍しいのか、わいわい魔族が檻を取り囲んでいる。
檻の側には立て看板が一つ。
『餌をやらないでください　※お客様からの預かり物です。持ち主以外は接触禁止』

「まさかのパンダ扱い！？」
「魔界で生きた人間はレアだからねー」

こちらを振り返ったエリオットの目は、尖塔で拗ねていたときよりも荒んでいた。

「早く私をここから出せ……！」
「ぎゃー！　ごめんなさい、ごめんなさい～！」

急いで檻の扉を開けてもらう。
のっそり出てきたエリオットは、ネヴァンジェリンの肩を掴んでネヴァンディーンを指差した。

「この悪魔をなんとかしろ！！」

周囲の魔族までもが一斉に頷く。
――ネヴァンジェリンはさっと目を逸らした。
兄の行為には不介入で済ませたいんですが……ダメですか？

第三一話：初めてのおつかいと、不戦敗の確信

寝ている間に兄に連れてこられたエルフ族の街は、森に溶け込むようにして、ただ静かに佇んでいた。

建築物は全て木や石など自然物のみで構成されており、遠目に見ただけではそこに街があると見破れまい。しかし一度認識すれば、その美しいまでに整然した街並みに目を瞠ることになる。

立ち並ぶ木々は均一かつ等間隔。濃い緑から白へと移り行く、魔界の木々の濃淡さえ一定法則に基づいていて、足元に散る葉と組み合わせてグラデーションのトンネルを表現している。ぽわりぽわりと街を漂う、小さな灯りだけが不規則で、むしろそれが計算され尽くしたかのように神秘的な彩りを与えていた。

素朴でありながら凛として毅然。まさに、王侯の森（スカタルンド）の名に相応しい。

その印象がそのままエルフ族の在り方を示すのならば、かの種族はさぞ誇り高くも美しい、超然とした者たちであるのだろう。

転生して初めて見る街風景に、ネヴァンジェリンはただただ感嘆の吐息を零した。

なんて美しい。

そして……

（文明の匂いがする～！！）

――それだけで感涙寸前だった。

どんな劣悪環境さえ物ともしない脳筋族――もとい魔族には、生産意識や技術の確立、精神的成長に倫理・規律が欠けている。魔族が従うのは魔王様のお言葉のみで、あとはやった者勝ち言った者勝ち、戦って勝った奴が一番エライの弱肉強食（サバイバル）社会だ。外観にこだわ

った街づくりなど、夢のまた夢である。
歩けばサクサク音を立てる、乾いた葉っぱの道路さえさり気なく整備されていて――落ち葉の重なりは一定の厚さ以下。滑り止めとして下に小石も敷いてある――、同じ魔界でこの格差かと、感涙以外の理由でも泣きたくなった。
人間から見て、この街はどうなのだろうか。
エリオットの様子を窺えば、こちらも感心した様子で街並みを見回している。

「魔族にこれほどの街を作る感性があるとは……」

技術より感性に驚くのが、魔族への評価を示している。

「いえ、作ったのはエルフ族らしいですけど」
「エルフ!?　魔界にエルフがいるのか!?」
「ドワーフ族とコボルト族もいるぞ」

ヴァーリヴァルグの補足にネヴァンジェリンも驚いた。
まさか魔族と怪物以外の種族が、三種族も魔界に存在するとは思わなかった。

「エルフもコボルトもドワーフ族も、人界では魔族に滅ぼされたはずだが」
「奴らは手先が器用だからな。魔界に拐ってくることはあっても、めったに殺すことはないはずだ。利用価値があるのに死なせるのはもったいない」

滅ぼしたのではなく、魔界に誘拐したらしい。
それはそれで酷い話だが、元々怪物や人間に襲われて、数を減らしていたそうだ。怪物から守るのを条件に、一族ごと移住を了承し

たという。

「エルフ族は布を使った工作が得意で、ドワーフ族は金属、コボルト族は木や土の細工が得意だな。弱いが役に立つ奴らだ」

「命と引き換えに日用具を作らせているわけか」

吐き捨てるようなエリオットの言葉に、ヴァーリヴァルグはきょとんと瞬きをする。

「作らんと言っても殺したりはしないぞ？　作る能力があるから生かすのに、今作らんからと殺すのは矛盾する。作る気になるのを待てばいい」

「僕たち魔族は人間より気長だからね。それに、何々しないと殺しちゃうゼ！　なーんて脅しはしない。殺す時と決めたら何をしても殺すし、何かしてほしいなら相手の要求も訊くよ」

それが魔族の美学デスと語り、ネヴァンディーンは笑って一言付け足す。

「僕はたまにするけどねー」

「だからこいつは悪魔と呼ばれるんだ」

ある意味自分の影響かもしれないと、ネヴァンジェリンは冷や汗をかいた。ネヴァンディーンの思考に人間のずるさが混じるのは、元人間の自分と暮らしているせいだ。

（わ、わたしって、魔界にろくなことをしてないんじゃ……？）

弱いわ変な主張をするわ、悪魔を魔界に解き放つわ。魔王様や魔族は見逃してくれているが、相手が人間なら排除されるレベルじゃ

なかろうか。

（上手く付き合えれば、魔族は悪い人たちじゃないんだよね）

一方的なようでいて、驚くほど律儀な面もある。

だからこそ、非道なことをする時のギャップが恐ろしく、ネヴァンジェリンは魔族に近づくのが怖かった。無邪気な暴力は、時に利害を孕むそれより恐怖心を呼び起こす。

（でもだからって、いつまでも逃げてられないし。うん、頑張ろう！）

目指せ、一人でお買い物！

――幼児の『初めてのおつかい』を目標に掲げ、ネヴァンジェリンは兄の腕を引っ張った。

「ねえお兄様、脅しじゃないんならどうやってエルフ族から物を買うの？　お金？　物々交換？」

「ん？　ネヴァンジェリンは自分でお買い物をしてみたいの？」

うんうん頷くと、ネヴァンディーンはエリオットを見た。

「じゃあエリスに実演してもらおうか。自分の服は自分で調達させるってことで」

「酔狂なことを言い出すな」

ヴァーリヴァルグが嗜（たしな）める。

「服に関しては、お前はいくらでも手に入るだろう。腕のいい女エルフに首輪をつけていると聞いたぞ」

「どうして魔族は僕の情報を流したがるかなぁ。アレをしたのコレをしたの、どこそこの女喰ったの百人斬り突破したのって、何、みんなそんなに僕のことが好きなの？」
「大いに嫌われているから噂になっとるんだが……」
「ヒドイと思わない、ネヴァン。僕は君と二人、慎ましく地味～に生きてきたのにさ！」

ネヴァンジェリン自身は引き篭もりで地味～に生きてきたが、兄は保証の限りではなかった。むしろ、出掛ける後姿を見送っていただけなのに、心当たりがありすぎて怖い。

「っていうかお兄様、百人斬り突破って……！？」
「あ、別に寝た女の子の数じゃないからね。再起不能にした男の数だよ」
「重傷で済んだのを合わせれば五百以上。寝た女は千をとうに超えている」
「だから、なんでそんなに僕のことに詳しいの。愛？　愛なの？　僕に気があったから絡んできてたの？　うわキモイ、死ねホモ野郎。カマ掘りたきゃ自分の群れでやれ駄犬」
「俺がお前に絡むのは、お前が人狼の群れを荒らしたからだ！　人狼族の女を毒牙にかけるだけかけおって……！　鉄の森（イアールンヴィズ）の人狼は皆、お前の喉笛を食い千切る日を待ち望んでいるぞ！」

ネヴァンジェリンは両耳を押さえて、それ以上聞かないことにした。

確か、魔族の総人口は三千くらい――いや、考えまい。ネヴァンディーンがどれほどの割合で魔族にケンカを売ったかなど、考えてはいけない。

そそっとエリオットのほうに逃げると、彼は耳が腐ると言わんばかりの渋面になっていた。

「いつか魔界は君の親戚だらけになるんじゃないか……？」
「ま、魔族同士の子供はめったに生まれないから大丈夫ですよ」

人間との混血はあっても、基本魔族同士の子は生まれない。
特に淫魔はその生態ゆえか、繁殖力がゼロに等しい。そうでなければエリオットの言うとおり、魔界はネヴァンジェリンの甥・姪だらけになっただろう。実に危なかった。

「魔族に必要以上の借りを作るのは本意ではない。言われずとも自分の服は自分で購入したいが、私は魔界の貨幣は持っていない。どうすればいい？」

ヴァーリヴァルグを踏みつけたネヴァンディーンは、楽しそうにエリオットに答えた。

「魔界は報酬制だから大丈夫。何メートルの穴を掘ってくださいとか、ムカつく犬野郎を殺してくださいとか、お願いを聞いてあげると貰えるよ」

なるほど身体――もとい、労働で払えということか。
下手に貨幣制度を作って単価を課すより、魔族はそれくらい大雑把な方が納得しやすいだろう。
同時にそれは、値は売り手の気分次第とも言えるが……まあ、魔族にふっかける種族はいないはずだ。いたらいたで、その度胸に対するお値段だ。まずまず妥当。

「いちおう相手を見て仕事を振ってくれるけど、王子様にはキツイお仕事かもしれないよ。ヴァルのモノマネしてワンって鳴いたら、服くらい僕があげるけど。どうする？」

「……エルフ族と交渉して働くほうがマシだ」

渋面で答えるエリオットに、ネヴァンディーンは笑った。

「じゃあ頑張って。交渉次第でだいぶ変わるはずだから。通訳はネヴァンにしてもらうといいよ」

「そうしよう」

「ええっ！？」

いきなり話題を振られ、ネヴァンジェリンは焦った。

「人間はエルフ族と話せないの？」

「逆だよ。魔族が両方と話せるの」

曰く、思考形式が似通った種族であれば、魔族は会話できるらしい。相手と同じ言葉を喋っているわけではなく、イメージでやり取りできるからだそうだ。

（道理で俗語が通じると思った！）

怪物と言葉が通じないのは、それだけ思考形式が離れているということか。

「う、でもじゃあ、わたしがエルフ族と交渉するってこと……？」

正直言って自信がない。

交渉のツケはエリオットにかかるわけで、それこそ責任重大だ。

「えーっとお兄様、エルフ族ってってどんな種族？　やっぱり耳長で金髪知的美人さん？」

「耳長だけど、白髪で……どっちかって言うと癒し系かな」

それはそれで美人の予感。

「知的」の単語が抜けたのは幸いだが、果たしてネヴァンジェリンに対抗できるだろうか。

「ヴァーリヴァルグさん、代わって――」

「俺はエルフ族とは相性が悪い。怯えて逃げられると交渉にならないぞ」

「ううっ……！」

思わず呻き、ネヴァンジェリンはエリオットを見た。

とりあえずてへっと可愛らしく笑ってみる。

「エリオット王子、最長何メートルくらい穴掘れます？」

「……交渉前から天井値を聞かないでくれ」

エリオットは深いため息を吐いて、ネヴァンジェリンを見下ろした。

「交渉事は呑まれたら終わりだ。君は何を言われても、笑って聞き流せばいい。通訳してくれれば実際の交渉は私がする」

「そ、そうですよね！　わたしは単なる通訳ですよね！」

少しばかり安心して頷くと、ネヴァンディーンが楽しそうに、近くの建物の入口を開いた。

「では主従コンビで、初めてのお買い物を頑張りましょー」

エリオットは嫌そうに顔を顰め、ちらりと利き腕の手首を見た。

そこにはネヴァンジェリンの所有印が未だ刻まれているはずだ。

（そう！　わたしはエリオット王子の――まあ名ばかりでも主なんだから、頑張らなくちゃ！）

エリオットの背を押して――決して隠れているわけではない――、そろそろと中に入る。

建物の外観は生垣のようだったが、内装はログハウスのようだった。木の匂いがする落ち着いた空間に、落ち着いたデザインの衣服が並んでいる。

「魔界の店は初めてだが、まず店員を呼べばいいのか？」

「わたしも初めてですけど……あ、好きなデザインの服を選んで、奥の部屋まで持ってきてくださいって書いてありますよ。イメージが違う場合はこの紙に描いてくださいって」

「店の者と話し合って決めるわけじゃないのか」

ネヴァンディーンたちは外で待つことにしたらしい。おかげでまさに『初めてのおつかい』状態だ。二人でうろうろ店内を見回る。

「あ、あれ可愛い」

白い合細糸で編んだカーディガンを指差すと、エリオットが困ったように言った。

「私の服を選んでくれないか？」

彼に似合うと思ったのだが、言わないほうがよさそうだ。

店内を三周ほどして、ようやく服を二、三着選び出す。

「もっと華やかなの着ません？」
「囚われの身で洒落た服を着てどうする」

王子でも騎士団を率いて攻めてきただけあって、エリオットは実用性を重視するらしい。黒のハイネックなど、まったく飾り気のない服ばかりで楽しくない。

「せめてケープ買いましょうよ。留め金が凝ったヤツ。それかさっきのカーディガン」
「だから、どうして私にカーディガン……分かった。ケープを買おう」

しかし気に入った形が見つからず、二人でデザインを描くことにした。

「こんな感じのケープで、留め金部分にこう紐をかけてー」
「だからどうしてそう可愛いデザインを……こういうシンプルなほうが汎用性が」
「……エリオット王子、絵が下手すぎて分かりません」
「うぐっ」

結局二人では上手くイメージ図が描けず、一度店から出てネヴァンディーンに描いてもらうことになった。

「どんなのがいいの？」
「腕を動かすのに邪魔にならない、シンプルなデザインを」
「留め金部分にこうね、紐とチェーンで凝った感じに――」

白い無地のインバネス・ケープに、石と細い鎖でできた留め具が描かれる。

留め具には見覚えのある紋章が刻まれていて、ネヴァンジェリンは首を傾げた。

「これ、魔王様の所有印？」

「ううん。これは聖王様の刻印。エリスは人間だからね」

色を赤に変えて、反転したような紋章だ。なるほど、魔王様と対なだけはある。

それにしても相変わらず、服のデザインには抜群のセンスがある兄だ。二人の噛み合わない部分を綺麗にすり合わせ、さり気なく気遣いめいたワンポイントまで入れてくる。

「何かたくらんでいるのではないだろうな……」

まともすぎるデザインに、疑い深くエリオットが訊いたが、ネヴァンディーンは肩を竦めて当然のように答えた。

「男女問わず、似合わない服は着せない主義だよ」

それなら裸に剥いたほうがいい。服が可哀想！

きっぱり答えたネヴァンディーンに、服のデザインに関しては悪意はないと納得したらしい。エリオットはおとなしく店内に戻り、ネヴァンジェリンも後に続いた。

さあ、とうとう会計だ。

「わ、わたし、通訳しかしませんからね！？　交渉に負けてもわたしのせいじゃないですから！」

「だから、開始前から逃げ腰はやめてくれ。奥に持って来いとあったな。どこだ？」

やがて一つの扉を見つけて、軽くノックしてから奥の部屋に入った。

「いらっしゃいませ」

キュイキュイと甲高い不思議な声が、ネヴァンジェリンたちを出迎える。

そこは本と布だらけの書斎のような空間だった。声の主は銀の片眼鏡を軽くかけ直して、ぴょんと椅子から飛び降りる。

近づいてくるその姿を、ネヴァンジェリンとエリオットは呆然と見つめた。

ひょこんと突き出た長い耳に、真っ白な髪――もとい、毛並み。くりくり赤い目の癒し系。

『ウサギ！？』

二人で叫んだ瞬間、ネヴァンジェリンは確信した。

――あ、この交渉絶対負けた。

閑話：ネヴァン兄様の妹愛日記　～その2～

某月某日、どこぞのバカ狼が妹の腕を折りました。
――とりあえず人狼族の雌を片っ端から喰ってやりましたけど、何か？

「大丈夫、ネヴァン？」
「うん……」

健気に頷くネヴァンジェリンだけど、顔色はあまりよろしくない。
当然だよね。何もしてないのに、いきなり腕を折られたんだもん。
元々怖がりなネヴァンジェリンは、完全に萎縮しちゃってる。
骨自体は自分で繋いだらしいけど、白い包帯が見るからに痛々しかった。
僕はそれが可哀想で可哀想で――

（よし、魔族に関わらせるのはもうやめよう）

そう決めた。
僕だけの傍にいて、僕だけと話して、僕だけと生きていけばいいんだよ。そうすれば怪我をさせられることもないし、怖いことも起きない。僕のことだけを考えていればいい。
だいたいあいつら、僕の妹に興味を持ちすぎなんだよね。

魔族は魔王様が呼び出す以外でも、自主的な会合を開いてる。
ネヴァンジェリンが言うところの『空気が読めない』魔族たちは、基本共同生活には向かないけど、だからって孤独が好きなわけじゃ

ない。

長く一緒にいれば壊し合うくせに、それでも誰かといたいんだよね。集まる機会があれば、みんな寄ってくるのがその証拠。

まあ、気持ちは分からなくもないかな。一人はつまらないし、一人じゃ何かを感じる意味もない。誰かと一緒にいるために、僕らは別々の存在として生まれてくるんだから。

会合の目的は情報交換だけど、正確には『自分と仲良くできそうな人の情報求む』だよ。群れを持たないタイプの魔族は、それこそ切実にパートナー――恋人とか友人とか？――を求めてる。

一人で生きられるくらい強いから、いつも独りになってしまう。

僕ら魔族もなかなか因果な生き物だよね。

そんな中、ネヴァンジェリンの存在は魔族に衝撃を与えたようだった。

まず、弱い。

見るからに弱い。魔族なのに弱い。一人じゃ生きられないくらい弱くて、だから僕と一緒にいる。

次に、淫魔なのに物慣れない。

魔族は世に言う肉食系が主だけど、特に淫魔は「私の魅力に平伏せ豚どもが！」が基本仕様（デフォルト）だから――あ、僕は違うよ？　僕は「メス豚にしてあげル」であって、最初から豚扱いはしないよ――、新鮮なんだよね。

まあ実際、一度も経験ないから新鮮も新鮮、真っさらだよ。真白の雪を穢したい衝動。これって魔族じゃなくても分かってもらえると思う。

それでいて、負けない。

弱いしすぐ泣くし、魔族なのに魔族に怯えてる。

でも嫌なことは嫌って、意外とはっきり主張するし、必要とあら

ば兄や自分の容姿さえ利用する。でも貞操だけは譲らない。弱いのに強かだ。

だから魔族は期待する。

この娘なら、ずっと一緒にいてくれるんじゃないかって……。

ましてや男はね。

ネヴァンジェリンは女淫魔だけど、そういう主導権とか取れそうにないし。与える精気の量は男側が管理できるわけで。

ちょっとの精気と引き換えに、孤独を癒す相手が快楽つきで手に入るんだよ？　そりゃあ垂涎の的でしょう。ネヴァンジェリンには迷惑な話だけどね。

ちなみに僕は、大・迷・惑！

この娘は僕のなんだってば！　僕が手出ししてないのに、何をしようって言うのさ節操なし――いや、うん。僕がこれを言うのはおかしいね。おかしいけど。

この僕が我慢してるのに、他が我慢しないって超腹が立つんだよねっ！！

八つ当たり？　上等だよ。だから何って感じ。

片っ端から去勢して、ついでに一族の女を喰い荒らしてやった。

そしたらいつの間にか、『琥珀の悪魔』って二つ名が付いてた。

悪いのは向こうのはずなのに、何で僕を悪魔呼ばわり？　微妙に納得がいかない。

でも悪名は時に妹を守る盾になるから、とりあえずは放置で。ただ、ネヴァンジェリンの耳には入らないよう気を配った。

お説教はいいけど、正座は地味に効くんだよね……。あの体勢、人体構造的に間違ってると思う。

そんな僕の地道な害虫駆除――害虫は巣から絶つのが一番――と悪名のおかげで、ネヴァンジェリンは会合に出ても無事でいられた。

僕が殺虫している隙に、声をかける魔族もいたけれど、まあぎこちないってゆーか対人スキルないっていうか……嫌がらせにしか見

えない、聞こえない。ネヴァンジェリンは怯える一方で、余計距離が開いていった。あはは、バカがいるー。

――で、話は冒頭に戻る。

群れを作るタイプの魔族でありながら、強すぎて浮いてた黒狼は、とにかくネヴァンジェリンと話したかったらしい。

群れる習性があるだけに、孤独に餓えてたんだよね。分かるよ。でもその巨体もそのぶっとい腕も、特に裂けた口から覗く鋭い牙は、ネヴァンジェリンに恐怖しか招かない。

青褪めて隠れようとしたネヴァンジェリンを、黒狼は呼び止めようとして――……

……まあね。ネヴァンジェリンが弱すぎたせいだよ。知ってる。悪気がなかったのも分かってる。黒狼はただ、ネヴァンジェリンの腕を掴んだだけだ。

だからって赦さないけどねー。

「群れにも馴染めないクズ狼が……！　妹の腕の礼に、両腕斬り落としてケツに突っ込んでやる」

――この直後のことは、実はよく憶えていない。

魔族は激情に駆られると、周囲がまったく見えなくなる。

相手だって同じだ。身を守るために力を振るい、その瞬間我を忘れる。

……ネヴァンジェリンがよく、魔族は脳筋だって言う。脳筋っていうのは『脳みそまで筋肉』の略らしい。

その間違いを僕が訂正しよう。

魔族は、『脳の全てを感情に支配されている』。

自分でやっといて何だけど、魔族ってホントどうしようもない。

会合の場所だった丘ごと、側にいた最愛の妹ごと、全部壊しちゃうところだったんだから。

おまけに周囲の魔族まで、僕らの殺気に当てられて、破壊の宴に飛び込みそうな始末だった。
高められた魔力に瘴気が渦巻いて。
魔族の顔から理性が抜け落ちて、意思の疎通ができなくなっていく。
ただ瞳だけは冴え冴えと、不気味に煌めいていた。
僕が憶えているのはそれだけだ。
そして、僕らが我に返ったのは、ネヴァンジェリンが大泣きしたからだ。

「うわぁああん！　痛いー！！　なんで痛いのー！？　ばかー！　ネヴァン兄さまァーーー！！」
「あ、はい」

泣きながら呼ばれて、僕は思わず返事をした。
それでようやく、ネヴァンジェリンのことを思い出した。
殺り合ってた黒狼を放置して、ほてほて近づいて頭を撫でると、無事なほうの腕でぎゅーっとしがみついてきた。
結構ダメージ食らってたらしく、全身が痛かったけど我慢した。

「痛いのキライ～～～！！」
「……まあ、特殊な趣味がなきゃ嫌いだよね、ふつう」
「魔族キライ～～～っっっ！！」

そのセリフで、固まってた魔族がびくぅと跳ねた。
何て言うか、まあ……本人は必死で――っていうのもおかしいけど、痛みに泣き喚いていたんだよね。別に、酔狂で泣いてるわけじゃないんだから。
でも、傍から見ると凄く場違いだった。
ここ、今から戦場になるところだったんですけど。泣くより逃げ

るか応戦しなきゃ、痛い以前に死んじゃうんですけど。
しかも、その泣き方ってアレだよね。
僕らに助けろって言ってるよね……？
一つの感情に支配される魔族は、逆にちょっとしたことで我に返る。
この時僕らが望んでいたことは、互いに壊し合うことであって、弱い生き物を泣かせることじゃなかった。
呼ばれた僕は気が抜けて、嫌いと言われた魔族は狼狽えて。
――とりあえず、原因となった黒狼をみんなが一発ずつ殴って騒動は終わった。

「妹は僕が泣き止ませるけど、こんなことは二度とご免だからね。
ネヴァンジェリンが自分から近づかないかぎり、今後一切接触は禁止！！」

ネヴァンジェリンの真似して正座でお説教をする。
集まってた魔族も僕の真似して正座して、「そんな～」とか情けない声を出しながらも、不承不承頷いた。
黒狼に至っては拒否権さえない。近くにいた魔族が耳引っ張って頷かせていた。

「向こうから近寄ってきてもらわなきゃ駄目ってことだよな。どうすりゃいいんだ？」
「あれじゃないか、ほら。好物で釣る！」
「女淫魔の好物って……アレか！」
「ぅおお、ヤる気が出たぞーーーっっっ！！」
「ってアンタたちさ、自分を喰わせようと思ったら、まず寄ってきてもらわないとムリじゃない」
『ああっ、そうだった！！』

……うん、魔族ってバカでごめんなさい。
そのあとも、挨拶を真似てみようとか、長時間正座できるようになろうとか、ズレた考えばっかり出てたみたいだ。
まあ、妹に近づいてほしくない僕としては、一生悩んでろってなものだけどね。

その後泣き止んだネヴァンジェリンは、さっきまでの素振りが嘘のように冷静に、自分で腕の処置をしている。
どうやらネヴァンジェリンは感情に支配されると、破壊衝動じゃなくて泣きたい衝動に駆られるらしい。
で、理性を失くして大泣きする。
……変な理性の失くし方するなぁ、この娘は。
たぶん魔族としての自分と、ネヴァンジェリンの中の『何か』がせめぎ合ってそうなるんだろう。
『何か』って何って？
知らないよ、そんなの。観察してそう感じただけ。
ネヴァンジェリンはその『何か』との危ういバランスの上に成り立っている。どちらかと言えば『何か』に比重が傾くようだけど、魔族としての自分も捨ててはいない。
まるで、魔王様と聖王様の天秤みたいだ。
どちらかを捨てれば天秤はひっくり返り、今のネヴァンジェリンは失われる。
僕はソレを、絶対にさせたくない。
今のネヴァンジェリンが好きなんだよね。絶妙なバランスで揺れる、魔族らしくないけど魔族なこの娘が。
どちらか一方になるなら不要だ。そうなりそうなら壊してしまおう。

そしてある日、魔王様から招待状が届いた。

身の程知らずな人間の勇者のお出ましだ。魔族としてはこの上なく愉しい、狩りの夜。

ネヴァンジェリンはどう感じるんだろう？

他の魔族とどこか違うネヴァンジェリンに、魔王様も興味を持ったらしい。力量的には歯牙にもかけられぬ――以前の問題なのに、妹も同伴でと書いてあった。

どんな反応をするのかな。

……壊れないといいな。

ネヴァンジェリンは弱いけど、それでも絶対に負けない娘だと信じてる。

壊れるのは嫌だけど、壊れるギリギリは見たいよね。

「ネヴァンジェリン、魔王様がお城においでって」

「魔王様が！？」

「そう。特別なパーティーがあるみたいだよ」

何も知らない妹に、何も教えないまま微笑んで、僕はゆっくりと彼女の髪を梳いた。

ふと、視界の端を黒い影が過る。

それは片目だけを光らせた、黒猫のように見えた。

「ネヴァン兄様、どうしたの？」

「何でもないよ、ネヴァンジェリン。

――それじゃあ、行こうか」

物語が始まる、その前の物語に。

第三二話：不鮮明な対価と、人間の価値観と

「ウサギ」と叫ぶなり硬直した二人の客に、白兎――もといエルフ族の店員は、へにょんと長い耳を曲げた。

（うわ、何それ可愛い！）

ネヴァンジェリンも思わずへにょりと耳を下げる。

身長はネヴァンジェリンの胸辺り、エリオットの腰くらいの巨大兎が、外套を着て困ったように佇んでいるのだ。おまけに銀の片眼鏡つき。これで懐中時計を持っていれば、不思議の国のアリスに登場する白ウサギだ。

うずうずする指先をスカートを掴むことでどうにか抑え、ネヴァンジェリンは口を開いた。

「あのっ」

「客じゃないならとっとと出て行ってくれませんカ？　客ならとっとと商品をお渡しくださいナ」

キュイキュイと早口で店員は言った。

（……あれ？）

ネヴァンジェリンは首を傾げる。

（見た目と違って性格きつい？）

しかも、口調からして女の子のようだ。男物の外套を着ていたの

で、てっきり雄――もとい男性かと思ったのだが。
神経質に耳をぴるぴる震わせながら、エルフ族の店員はエリオットから服を取り上げた。
近づいてきたもふもふに、エリオットの身体がぴくりと揺れて――

「王子、ストップです！」

ネヴァンジェリンは慌ててその腕を押さえる。

「気持ちは分かります。分かりますけど、エルフ族です。店員さんです。おまけに女の子だから、それをするとセクハラです！　分かります？　セクハラ。ニュアンスは伝わってますよね!?」
「ううっ……！」

エリオットの指がわきわき不穏に蠢いている。
可愛い物好きのネヴァンジェリンとしては、エリオットの気持ちはよく分かる。

（撫で回したいですよね。もふもふしたいですよね？　でも残念、セクハラです！）

それは同性として、断固として阻止せねばならない。
エリオットの腕を掴んだまま、ネヴァンジェリンはエルフ族の店員に頭を下げた。

「すみません。その服を彼のサイズでいただきたいのですが、対価はどの程度になるでしょう？」
「魔族にしては礼儀正しい客ですネ」

服をテーブルの上に置いた店員は、ネヴァンジェリンを上から下

までじろじろと眺め回した。

「その変わったデザインの服、アタシの姉の作品ですネ。アナタがマスターの妹君ですカ」

「マスターって、えっと……」

「ネヴァンディーン様ですヨ、アナタの兄でしょウ？」

「あ、はい、そうです。妹のネヴァンジェリンです。兄がいつもお世話に……」

「こちらこソ。姉ともども保護していただいてますヨ、首輪つきデ」

甲高い声で紡がれる早口は、表情が変わらなくても不機嫌に聞こえる。これが魔族相手なら、それこそ怯えて隠れるところだ。

さすがにネヴァンジェリンも可愛い兎店員さん相手に逃げたりはしないが、どう対応したものかとエリオットを見上げた。

彼は目を閉じて、苦悶の表情で拳を握っていた……。

「……エリオット王子、そんなに動物好きですか」

「いや、違う。これは……ええと、滅びたとされるエルフ族を見て感動しているだけで――」

「無理ありますから。あと、頬っぺた赤いですよ」

半眼でつっこむと、エリオットは困ったように天井を見上げた。何かに悩むように目を閉じて、やおら無言のまま早足で部屋を出て行く。

「エリオット王子！？」

驚いてぽかんと立ち尽くしていると、すぐにまた早足で戻ってきた。

その表情はどこか清々しい。

「もう大丈夫だ。交渉を始めようか」

（ああ、ヴァーリヴァルグさんを撫でてきたんですね……）

ネヴァンジェリンは生暖かい眼差しで彼を見上げ、素知らぬ素振りで頷いてあげた。

交渉に勝てる気は一切しなかったが。

「近隣の怪物を五十匹狩ったあト、街の整備を手伝ってくださイ」

「高ッ！！」

エルフ族の店員――トルテという名前らしい――に服の対価を言われて、ネヴァンジェリンは仰け反った。

エリオットは眉を顰めているが、通訳するまでもなく高すぎる。

「ええと、服を買うのは彼――人間なので、わたしも手伝いますけど、もう少し安全そうなのにしてもらえませんか？」

トルテは可愛く小首を傾げ、ぴょこぴょこ耳を動かした。

「やはり彼は人間ですカ。魔界に生きた人間とは珍しいですネ。アナタのペットですカ？」

「ペ……いえ、あの」

「餌ですカ」

「違いますっ！　ええと……」

魔王様を倒しに来た勇者だと、果たして説明していいものか。

悩んでいる間にトルテはじろじろとエリオットを眺め回し、いきなり右腕の袖をめくり上げた。
そこにはネヴァンジェリンの所有印が刻まれている。
「やはりアナタのペットではないですカ」
「あうっ！　これはそのっ、事故というか確信犯というか」
「どっちですカ」
くりくりの赤い目で睨まれる。
（短気だよ、この娘～！）
口調がせかせかしていて、結論だけを伝えろと要求してくる。
（やっぱりアリスのウサギさんは忙しいのかな）
「納期に遅れる～」と時計と布を持って走るトルテの姿を想像して、ネヴァンジェリンはしばし和んだ。
そういえばこの街は、この可愛いウサギさんなエルフ族が作ったわけで。「ここの葉っぱ重なりすぎよ！」とか「この木をくり貫いて家にするのよ」「ああっ、でも牙も爪も立たないわ！」とか言い合いながら巣作り――もとい街作りするエルフ族。
（か、可愛すぎる～っっっ！！　何ここ、夢の街！？　これでご飯が美味しかったら永住する！）
思わず拳を握って悶えると、トルテは両耳を下げて後退った。
「な、何でそんな目で見るんですカ。アナタは女淫魔（サキュバス）でしょう。アタシは女ですヨ。餌じゃないですヨ。食べれませんヨ？」

「食べるなんてそんな！」

ネヴァンジェリンは思わず大声で否定した。

「ウサギ肉がどれだけ美味しいか知りませんけど、こんな可愛い生き物食べたりしませんっ！　そりゃお肉なんて生まれて一度しか食べれてませんし、想像しただけでよだれじゅるりですけど、毛皮剥いだらふわふわファークッション作れそうだな～とか思いますけど、やりませんよ！！」

トルテは全身の毛皮をびびびと逆立てて、慌てた様子でテーブルの陰に逃げ込んだ。

「な、なんで逃げるんですかぁ！？　食べませんってば！　むしろお友達になりましょうよ～」

「その発想が怖いでス！　友達なんてなれませン！！」

「そんなぁ～」

ネヴァンジェリンはしょんぼり肩を落とした。

羽根と耳もくしゅんと曲げて、窺うように首を傾げる。

「絶対イジワルしませんから……友達、ダメ？」

「か、可愛い顔しておねだりしてもダメでス！　淫魔なんかに騙されませんヨ！」

テーブルの陰から覗かせた耳が、動揺を表してぴるぴるしている。

ネヴァンジェリンはきらーんと目を輝かせた。どうやら自分の幼い容姿は、エルフ族にも通用するらしい。

（子供に優しくは、万国異世界共通の倫理だよね！）

魔族に子供時代はないとか、前世合わせて二十余年の精神年齢でかわいこぶるなとか、いつもはロリ容姿で落ち込んでるくせにとか、そういうのはとりあえず暴投の勢いで投げ捨てることにして。
ネヴァンジェリンはスカートの裾を握り、うるうる目でおねだりした。

「わたし、生まれてからずっとお兄様と二人ぼっちだったから、女の子の友達なんかいなくて……寂しくて……」
「うウッ！」
「わたしは魔族ですけど、すっごぉ～く弱いし、淫魔だけどあーいう食事は恥ずかしくてできなくて、そしたら魔族のみんなから変な目で見られちゃって……」
「ううううゥ……」
「その上エルフのおねーちゃんにまで避けられるなんて、悲しいよぉ～。おにーさまぁー」
「わ、分かりましたヨッ！！」

（よし、勝った！）

自棄気味に出てきたトルテの姿に、泣き真似しながらネヴァンジェリンはこっそりガッツポーズをとった。

「知人以上友達未満からなら始めてやらなくもありませン」
「なんでそこで値切るんですか！？　潔く友達以上親友未満から始めましょうよ！」
「友達以上とかいきなりハードル高いですヨ！　初対面なら知人以上でも大躍進でス！」
「む～」

それはそうかもしれないが。

（友達未満じゃ、もきゅーってできないのにー！）

ネヴァンジェリンはぶすっくれて、頬をぷーっと膨らませる。

トルテも負けじと両耳をぴんぴんと跳ね上げた。

――そんな二人を眺めていたエリオットが、困った顔でネヴァンジェリンの肩をつついた。

「可愛い合戦で張り合っているようにしか見えないんだが……君は今、何の交渉をしてるんだ？」

「はっ！　そういえば商談忘れてました！」

思わず友達交渉に熱が入ってしまった。

ネヴァンジェリンはこほんと咳払いして、テーブルに置かれた服を指し示した。

「それであの、話を戻して服の対価なんですけど」

「あ、ああ、そうでしたネ」

トルテもハッとした様子で服を見てから、改めてエリオットを観察し始めた。

「彼は魔界の瘴気の中でも弱っていませんネ。何か特別な処置でも施しているんですカ？」

「ええと、魔界に来る前に『聖女様』とかいう人に加護を与えてもらったそうです。加護があると瘴気を防ぐことができて、あと怪物や魔族にも見つかりにくいみたいです」

「それは羨ましいですネ。エルフ族は瘴気に弱いですかラ」

聖女の加護に興味を引かれたらしい。トルテは爪でエリオットをつついたり、鼻を近づけて匂いを嗅いだりし始める。

エリオットは居心地悪そうに――いや、もふもふへの誘惑を堪えて身動ぎしたが、それでもおとなしく立っていた。

「聖女の加護とやらをアタシたちに移すことはできませんカ？　それなら全エルフ族が喜んで品物を提供してくれると思いますガ」

「それはちょっとムリだと思います。技術的にもそうですけど、彼もしばらくは魔界にいなくちゃいけませんから。加護がなくなると困ります」

トルテは感心したようにネヴァンジェリンを見た。

「アナタは魔族なのに、随分と理性的に話しますネ。マスター以外では初めてでス」

そのマスター――ネヴァンディーンこそネヴァンジェリンの影響を受けているのだが、それは言わなくてもいいことだ。

「そうですネ、ではこの仕事はどうでしょウ」

トルテは本棚を掻き漁り、分厚い図鑑を持ち出してきた。

紙にさらさらと何やら書き付けて、図鑑とセットで手渡してくる。

「この紙に書いてある植物を取ってきてくださイ。この仕事なら人間とアナタでできるでしょウ」

紙には三十種の名前が書き連ねてある。

魔界の植物に名前があるなどネヴァンジェリンは初めて知ったが、図鑑付きなのでどうにかなるはずだ。

（でも魔界で植物採取って、大変なんだよね）

怪物に遭遇する恐れもあるし、魔界を歩く自体が困難でもある。さらに、ここに書かれた植物が希少かどうかさえネヴァンジェリンたちには分からないのだ。

（知識がないと不利すぎる～）

思いながらもネヴァンジェリンはエリオットに通訳する。

エリオットも同じ結論に至ったらしく、眉を顰めて悩む素振りを見せた。

「魔界で三十種の植物を採取する、か。よくある植物なのかもしれないが……いや、それなら私たちに頼む必要はないな」

「ですよね～」

話し合うネヴァンジェリンたちを見て、トルテが片耳を曲げて補足する。

「アタシたちエルフ族は瘴気に弱いカラ、ほとんど外には出られないのですヨ。ちょっと植物を取りに行くだけでも大変なんでス」

「ああ、だから街でエルフ族の姿を見かけないんですか」

「そうでス。アタシたちは主に、地下の街で暮らしていまス」

今ネヴァンジェリンたちが歩いてきた街の下に、もう一つ街があるらしい。

こちらは基本的に――エルフ族が用事を頼んだ時以外――魔族は立ち入り禁止なのだとトルテは説明した。

「――だ、そうですよ？」
「なるほど、植物が希少かどうか自体、彼女にはよく分からないと」
ネヴァンジェリンとエリオットは腕を組み、天井を見上げた。
しばし考えた後、同時に視線を落として話し合う。
「しかし、言葉が通じなくとも表情を読んで補足してくる辺り、彼女は抜け目ない性格のようだ」
「この街を作ったエルフ族ですしね。頭いいですよ」
つまり、三十種のうち何割かは、魔界で希少な植物だと思われる。
「分かってて吹っかけてきてますよね？」
「そうだろうな。しかし私たちにはどれがそうなのか分からない」
「どうしましょう。他の仕事にしてもらいます？」
「他の仕事にしたところで、知識がないのは同じだろう。君の兄か犬くんを呼んで、アドバイスしてもらうという手もあるが……犬くんはともかく、君の兄は笑顔で私を騙しそうだ」
「ウサギさんの前に犬を連れてくるのって、鬼じゃないですか？」
ひそひそと、けれど合図なく笑顔で話し合うのが人間と元人間である。
（さっきは表情読まれたモンね）
これが魔族ならよく分からないとなった時点で「分かんないからヤだ」「分かんねぇけどそれでいいや」の二者択一になるところだ。
エリオットは軽く首を傾げて、図鑑を指し示しながら言った。
「どうせ知識がないのなら、この依頼を請けて植物の知識を得るの

も一つの手だな。余分に希少な植物を確保しておけば、他のエルフ族との交渉に使える」

「なるほど、服以外に何か必要になるかもしれませんしね！」

ネヴァンジェリンはぱちんと両手を合わせた。

希少な植物だと分かれば、今後はその植物を先に出して、「これで買えるものを」と言えばいい。ちょっとした通貨替わりになる。

「あ、でも――」

ネヴァンジェリンはふと思いついて、首を傾げた。

エリオットの意見は良いのだが、根本的な問題が一つある。

「これだけの量の植物って、一日じゃ集まらないですよね。食事も問題ですけど、その前に……

今日みたいに鳥籠か看板つきの檻で寝ることになりますけど、いいんですか？」

「却下で！　絶対却下で！！」

人間会議がまとまるには、もうしばし時間が必要そうだ。

第三三話：彼女の都合と、彼の不都合

「――というわけで、わたしはしばらくエリオット王子と二人で街に泊まるから。
ネヴァン兄様とヴァーリヴァルグさんは、お城に帰っていい子にしててね」

ネヴァンジェリンの言葉に、ネヴァンディーンは青褪めよろめいた。
貧血寸前の金魚のように、何度も口を開閉してから、渇いた声で妹の名を呼ぶ。

「ネヴァンジェリン……」
「なぁに、お兄さま」

ネヴァンディーンが縋るようにして抱きついてくる。
ぎゅーっと力を込めてネヴァンジェリンを腕に囲い、それはそれは悲しそうな声で、不条理だとばかりに叫んだ。

「可愛い妹が堂々浮気宣言するようになるなんて！　やっぱりあの男、うっかりを装って殺しておけばよかった！」
「やっぱりって何！？」
「っていうか今から消す！」
「ダメーっ！！」

トルテとの交渉結果、ネヴァンジェリンとエリオットは街に滞在することになりました。

「エリオット王子……」

壁に懐いて項垂れている負け犬――もといエリオットの肩に、ネヴァンジェリンはそっと手を乗せる。

勝つ方法がないわけではなかった。

彼女の主たる兄の名前をチラつかせれば、あるいは犬を連れてくるぞと脅せば、いくらでも対抗できただろう。

けれどエリオットはそれをしなかった。

それどころかむしろ、自ら敗北を選択した。

檻の中は嫌だと全面拒否を叫んだくせに、ネヴァンジェリンの何気ない一言で、考えてはいけないことを想像したのだ。

「そうですね、植物採取は大変ですから、自分でやってもらいましょう」

誓って言う。何気なくであって故意ではない。

ところがエリオットはそれを聞いた途端、固まって何やら考えだしたのだ。

「自分で……、兎――いや、エルフ族は瘴気に弱いのに……？　危険な魔界で植物採取……？」

零れ落ちた呟きが、人間の武器たる想像力を、ダメな方向に向けてしまったことを示している。

ネヴァンジェリンはおそらく正確に、エリオットの脳裏に浮かんだ光景を予測した。

瘴気にケホケホ咳き込みながら、か弱いウサギさんが魔界を歩い

ている。
　真っ白い毛皮を黒く汚し、よろよろふらふら倒れそうになりつつも、どうにか草を摘み終えたウサギさん。ほっと安堵の息が零れる。これでしばらくは大丈夫。
　その背後で木陰が揺れた。
　漏れ聞こえる肉食獣の息遣い。しかしウサギさんは気づかない。
　そして――――！！

　エリオットは前言撤回した。

「植物採取を引き受けよう」

　その時の彼の目は、殉教者のそれだった。

「自らの不都合に目を瞑り、あえて不利益を買うなんて……その行動はもはや愛です。この際開き直って誇りましょうよ」
「いいからしばらく放っておいてくれ……」

　返ってきたのは何とも力ない言葉。
　王子たる身分に伴う矜持と、何より人間としての尊厳にかけて、パンダ扱いはさぞ不本意だろうに……。
　動物愛護精神――もとい騎士道精神の下、自ら屈辱を受け入れた勇者の姿に、ネヴァンジェリンは思わず涙しそうになった。……微妙に笑いそうにもなったが。
　トルテのほうを振り向けば、どこかほくほく上機嫌な様子で、布やハサミ、メジャーを引っ張り出している。
　どうやらネヴァンジェリンたちは、彼女にとっての上客になったようだ。

「でハ、彼のサイズを測らせていただきまス」

落ち込むエリオットを気にも留めず――互いに言葉が分からないせいもあるだろうが――、トルテは踏み台を持って寄ってきた。

「彼のサイズならネヴァン兄様が測ってましたよ、無駄に正確に。訊いてきましょうか？」

「……いエ、マスターには頼りません！」

びしぃっとメジャーを武器のように構え、トルテは力強く宣言した。

「どんな些細なことであレ、あの方に借りを作れば何をされるか分かりません！　サイズくらい自分で測りまス！」

「そんな、いくらお兄様でもトルテさんにな――んでもないです、ええ、何でも！」

赤い目でギッと睨まれ、ネヴァンジェリンは高速で首を振った。迫力はぜんぜんないが、恨みがましい視線が胸に刺さる。あんな兄でゴメンナサイ。

（トルテさん相手に何をしたの、ネヴァン兄様～！！）

セクハラとかセクハラとかセクハラとか。まさかそれ以上はしてないよねと、ネヴァンジェリンは冷や汗をかく。

たとえ兎なエルフ族であっても、異性でお年頃で意思疎通が適えば、淫魔には餌候補だ。それどころかネヴァンディーンの場合、年齢制限があるかさえ怪しい。……ロリコンだから。

「王子、採寸だそうですよ」

怖いので追求は避けて、未だ落ち込んでいるエリオットを揺さぶる。

彼はのろのろ顔を上げると、ネヴァンジェリンを見てため息を吐いた。そして呟くように言う。

「……すまない」

「はい？」

「君も鳥籠で寝ることになってしまったな」

他の魔族は当たり前のようにそうしていることを、わざわざ魔族（じぶん）に謝罪してくる。

驚いて大きく瞬きをすると、エリオットはもう一度謝った。

「君の兄や犬くんはあの寝床でも気にならないようだが、君は違うだろう？　分かっているのに巻き込んですまない」

「いえ、あの……ええと、分かりました？」

「それくらいは見ていれば分かる。君の感性は人間に近い。彼女に対しても可愛いと興奮していたが、他の魔族はおそらく何も思わないはずだ」

ヴァーリヴァルグに懐いて拗ねているだけかと思っていたが、意外と周りを観察している。

先ほどとは違う意味で、ネヴァンジェリンは冷や汗をかいた。勇者は猪突猛進でおバカが信条なんじゃないかと、半ば疑っていてゴメンナサイ。兄のことでなく、今度は自分のことで謝ります。

（そうだよね、王子様だもんね）

この世界の人間の教育レベルは知らないが、王族であれば三流短大卒の渡辺凛より、上等な教育を受けているはずだ。

――その上で謝るのかと思うと、ネヴァンジェリンは少しおかしくなった。バカではないが、勇者はやはりお人好しらしい。拗ねたフリして観察していましたなんて、自己申告してまで謝らなくてもよかっただろうに。

「エリオット王子は、やっぱり勇者のほうが似合いますね」

「……どういう意味だ、それは？」

「いい人だなーって意味ですよ」

いい人イコール褒め言葉と言い切れないのが、人間の複雑なところだが。国を担う王族の一員としては、おそらく非情なほうがいいだろう。

言外の意味まで読み取ったエリオットは、憮然とした顔になってトルテのほうへ向かった。

それがさらにおかしくて、ネヴァンジェリンはくすくす笑う。王子としては失格かもしれないが、計算高く合理的なだけの人間よりも、いい人のほうがネヴァンジェリンは好きだ。

（全力でつけ込みますけどね）

それはそれ、これはこれで。

この手のタイプは一度懐に入れば、そうそう裏切れなくなるタイプだ。植物採取の機会に頑張ってお近づきになろう。

誠意で謝ってくれたのに、ちゃっかりしていてホントすみません。

「ねえトルテさん、植物採取はいいんですけど、毎日届けにこないとダメですか？　正直あの宿に泊まるのは遠慮したいんですけど……」

エリオットの腰回りを測っているトルテに、せめてと思って話し

かける。できればパンダ扱いくらいは解除してあげたい。

「植物は新鮮な状態で運んでほしいですから、毎日のほうがいいですネ」

短い腕で、トルテは一生懸命エリオットの腰に手を回している。もふもふに抱きつかれるような形になったエリオットは、指先をうずうずさせていた。セクハラ防止がてら、ネヴァンジェリンも採寸を手伝う。

「エルフ族の街でハ、魔族はあの宿で眠る決まりでス。寝ぼけて暴れる魔族がいたのデ、近隣での野宿も禁止でス」

「彼は人間です。彼くらい街で寝かせてあげてくれませんか？」

「魔族は危険ですガ、人間は信用できませン」

可愛い顔できっぱりと言う。

人界での共存時代、エルフ族と人間の間で何やら確執があったようだ。

ダメだったかぁとしょんぼり項垂れると、トルテはつーんと顔を逸らした。そして少しばかり不機嫌そうに、いつもより早口でせかせかと話す。

「でもそうですネ、アナタは噂通り弱そうですから、長老に頼んで特別に街で寝かせてあげますヨ。

……そうすれば彼はアナタの首――腕輪付きなのデ、アナタと一緒なら街で寝れまス」

「ホントですか！？」

ネヴァンジェリンは顔を上げ、笑顔になって彼女を見た。

つーんつーんと、さらにトルテは顔を背ける。

「別にアナタが落ち込んだからではありませン！　世に言うお客様サービスです！　多めに対価をいただきましたカラ、これくらいは――ッテ、何するんですカー！？」

我慢しきれず、ネヴァンジェリンはトルテに飛びついた。

（何このツンデレ、超可愛い～っっっ！！）

トルテの顔を胸と腕の間に抱き込んで、ぎゅうぎゅうに抱きしめる。

「ありがとうございます、トルテさんー！　もふもふー、ふわふわ～、もきゅー」

「ついでに毛並みを堪能するんじゃありませン！！　しかも胸、邪魔でスッ！」

「あ、当たってても大丈夫ですよ。同性ですから気にしません。問題（プロブレム）なしです」

「ダレが当たっているのを気にしてますカ！　息が詰まって苦しいんですヨ！　ちょっと大きいからって威張らないでくださイ！」

淫魔の中では小さいんですと、訂正すべきかネヴァンジェリンは悩んだ。

とりあえず、抱きしめた彼女から胸の感触は伝わってこなかったので――もふもふオンリー――、大きさの話題は避けることにする。

……女の子は時々、そこに地雷が埋まっている。避けるに越したことはない。

「わたし、ネヴァン兄様たちにエルフ族の街に泊まるって報告してきます」

パッと腕を離して、ネヴァンジェリンは踵を返した。

「マスターは街には泊めれませんヨ」

「分かってます。お兄様は……この際ですから、先に帰っててもらいます」

トルテが意外そうに耳を動かした。

「マスターから離れるんですカ？」

どうやらネヴァンディーンの過保護ぶりとネヴァンジェリンの依存ぶりは、エルフ族の間でも知られているらしい。

実際ネヴァンジェリンとしても、ネヴァンディーンから離れるのは不安だ。けれど、兄がいるとエリオットは警戒してしまう。

この機会に仲良くなろうと思うなら、兄はいないほうがいいだろう。幸い、エルフ族の街では魔族もおとなしくしているようだし。

「今、ひとりでできるもん、の挑戦期間中なんです。少しくらい自立してみようかな～って。少しだけ、ですけどね」

「そんなこと、マスターが許しますカ？」

その危惧ご尤もと、ネヴァンジェリンは頷いた。

世間を見るのは理解してくれたが、数日とはいえ兄から離れるなど許してもらえるだろうか。

「戦ってきます」

そして戦いは、何故かエリオットの命の危機から始まった。

第三四話：不可分な双子の、兄妹戦争

「少しの時間ならまだいいけど、一晩以上とか論外！　却下！　僕から離れるのも、他の男と二人きりになるのも許しません！！」
「イジワル！　横暴！」
「わがまま言うならエリスを殺すよ！？」
「恐怖政治反対ー！！」

ネヴァンジェリンとネヴァンディーンが対立することは少ない。基本ネヴァンディーンはネヴァンジェリンに甘く、大抵のわがままは笑顔で受け入れてくれるからだ。
ただし、危険だと思えば強硬に――もとい、大袈裟に反対する。
二人の言い争いを聞いていたヴァーリヴァルグが、心配そうに口を挟んだ。

「ネヴァンジェリン、ここは諦めたほうがいいのではないか？　街に泊まるなとは言わんが、せめて俺たちは宿に――」
「あんなところでお兄様が、じっとしてるはずないじゃないですか。深夜に客ごと宿を壊して、泊まるところなくなっちゃったから～とか言って、街に入ろうとするに決まってます」
「わあ、すごいやネヴァンジェリン。僕のやることはお見通しだねっ。だけど何の問題が？」
「問題だと思わないのが問題なのっ！」

一歩も引かないネヴァンジェリンを見て、普段ネヴァンディーンと言い争っているヴァーリヴァルグのほうが狼狽えている。
魔族は感情的になりやすく、そしてまた衝動に流されやすい。カッとなれば大切なものまで壊しかねないので、ネヴァンディーンが

本気にならないかと危惧しているのだろう。
もっともネヴァンジェリンは、その心配はしていなかった。
兄が大袈裟に振る舞う時は、こちらの反応を窺っている時だ。彼はそうやって、妹がどれくらい本気なのかを測っている。
なので、ここは主張あるのみ。

「お買い物くらい一人――もとい、王子と二人でできるもん！　お兄様はお城に帰ってて！」
「帰りません。どうしてもって言うなら、僕を倒して行きなさい」
「いいわ、お兄様。受けて立つ！」
「おい！」

ヴァーリヴァルグの制止を無視し、双子は身構えて間合いを取った。タイミングよく、乾いた草が二人の間を通り過ぎていく。
まずはネヴァンディーンが両腕を突き出した。

「いつものルールで百問勝負！」
「多っ！　そこは潔く一問で」

ネヴァンジェリンは指を一本立てた。

「少っ！　いくらなんでも値切り過ぎだよ」

双子はしばし沈黙し、同時に頷いた。

『十問で』
「……お前たちは、いったい何の話をしているんだ？」
「勝負方法ですよ」

ネヴァンジェリンとネヴァンディーンでは、力量差がありすぎて

ケンカになるはずがない。
そこで双子は協議の結果、口でできる勝負を思いついた。

「僕がこれから十の問いかけをする。全て答えられればネヴァンジェリンの勝ちで、答えられなければ僕の勝ち」
「問いかけは何でもいいですけど、わたしが知りようのない答えはダメです。たとえば、ヴァーリヴァルグさんの五日前の夕飯は何か、とか」
「でも意識すれば覚えられる知識はあり。ヴァルが僕に何回踏まれたか、とかね。もちろん、僕が答えを知っていることが前提だけど。えーと……うん、忘れた。この質問はダメだね」

問答勝負というか、半ば記憶クイズである。

「範囲が広すぎて、それはそれでネヴァンジェリンが不利ではないか？」
「どうしても分からない問題や、答えたくない質問はパスできるよ」
「それではお前が不利だろう」
「パス一回につき、服一枚脱ぐ条件で」
「……お前が楽しそうなルールだな」
「うん、楽しいね！」

嬉々として頷くネヴァンディーンに、ヴァーリヴァルグがあきれ顔になる。
実際ネヴァンジェリンとしても、身を削るような勝負は受けたくないのだが、これくらいの条件でなければ勝負してもらえないのだから仕方ない。
ネヴァンジェリンは今着ている服を確認した。上下ツーピースの白いミニドレスに、足首近くまで届く黒い上着。編み上げコルセットに厚底ブーツ。あとは靴下やリボンなどの装飾品くらいか。ワン

ピースでないだけまだマシだ。

「ちなみに脱ぐ服は僕が指定。イヤならネヴァンジェリンが指定できるけど、その場合は僕の手で脱がせまーす」

「……実に楽しそうだな」

「うん、すごく楽しいね！」

「お兄様、せめて屋内で勝負しましょう」

露出狂でもあるまいし、往来で服を脱ぐ趣味はない。

何故か人垣ができそうな気配に、慌ててトルテの店に入ろうとすると、色気たっぷりに流し目で耳打ちされた。

「ついでにベッドのある部屋に行く？」

「セクハラ禁止っ！　そういうことばっかり言うなら、お兄様から挑んできた時にも公開プレイで勝負するわよ」

「ネヴァンディーンの場合も服を脱がせるのか！？　お前が！？」

「いいえ、着せます」

驚愕したヴァーリヴァルグに、ネヴァンジェリンはにっこり答える。

「わたしの服を」

「うん、店内で勝負しようか」

ネヴァンディーンはサクサクした足取りで店に入っていった。

こっそり舌を出してから、ネヴァンジェリンも後に続く。

「琥珀の悪魔を相手に、弱くても負けていないな、お前は……」

その背後で、ヴァーリヴァルグがぽつりと呟いた。

「行くよ、ネヴァンジェリン。作麼生（そもさん）！」
「来なさい、お兄様。説破（せっぱ）！」

双子の勝負はトルテの店を舞台に始まった。
ちなみに審判はヴァーリヴァルグで、見物人はエリオットとトルテである。……双子以外は半眼になっているのは言うまでもない。

「ここエルフ族の街の名前は？」
「王侯の森（スカタルンド）！」
「僕たちが生まれた山の名前は？」
「太陽山（ソールフィヨル）！」
「ヴァルの本来の縄張りは？」
「え、えと、い、いあーる……びず……？　あ、鉄の森（イアールンヴィズ）！」
「今日泊まった宿に客は何人いた？」
「そ、そんなの知らな」
「数えれば分かったはずだよ。僕はちゃーんと数えました」
「うぅ……パスで」

ネヴァンディーンがにぃ～っと口角を上げる。
思わず後退りそうになったが、勝負なので引くわけにはいかない。
ネヴァンジェリンはどうにか踏みとどまった。

「まず一枚目～。ショーツで」
『いきなりか、この変態！』

期せずして一同の声がハモる。
それでも撤回する兄ではないので、ネヴァンジェリンは選択を迫

られた。

（下着……は脱いでも見えないけど、人前で脱ぐのは恥ずかしすぎるよ～！）

少人数とはいえ見物人がいるので、いつもの倍安全だが、いつもより三倍恥ずかしい。

却下して、ネヴァンジェリンが指定することにした。

「リボンにしてお兄様」

「胸元の？　それとも髪の？」

「髪」

ネヴァンディーンは笑って頷いた。

「片方だけ外すとバランスが悪いから、次のパスまで待つよ。街に入ってからトルテの店にくるまでに、何人の魔族とすれ違った？」

「パスでっ！」

自棄ぎみに叫んでそっぽを向く。

ネヴァンディーンはくすくす笑って、丁寧な手つきで髪からリボンを解いた。

黒い巻き毛が肩にかかって、胸元からふとももに流れ落ちる。邪魔だとネヴァンジェリンが掻き上げる前に、兄の長い指が髪を耳にかけた。

「ネヴァンは髪を下ろしてても可愛いね。ねえ、エリスと二人きりになったあとで、彼に襲われたらどうするの？」

「私はそんなことは――！」

「肋骨外してから全力で蹴る」

エリオットが異議を唱える前に、ネヴァンジェリンが即答した。

「そのあと折れた肋骨のまま、土下座で五時間謝るまで治してあげません」

「き、君は本当に容赦ないな……」

まだ外してもいない肋骨を押さえて、エリオットが後退る。

「王子が何もしなければ、わたしも何もしませんよ？　平和主義者ですもん」

「まあ、そうなんだが……仕返しをするのは、本当に平和主義者の所業か……？」

「仕返しじゃなくて、教育的指導です」

ネヴァンジェリンはきっぱり言い切った。

「性犯罪者は全員去勢されればいいと思う。麻酔なしで」

一同の視線が、無言のままネヴァンディーンに集中する。

まったく意に介さず、ネヴァンディーンは笑顔でエリオットに言った。

「ネヴァンは怒ると恐いから、下の息子は厳重に管理しておくようにね。下手するとホントに刈り取られるよ？　昼寝してる僕の側で、ハサミ見て考えてたことあるもん」

「小心者だから、いつもやめちゃうんですよねー……うん、もっと強くならないと！」

『いやいやいや』

男三人は首を振ったが、トルテは深く頷いていた。
がしっと両手を握られる。

「感動しましタ。お友達になりましょウ、ネヴァンジェリンさン。いつか本気でやっちゃってくださイ！」
「嬉しいです、トルテさん！　ええ、頑張ります！」
『いやいやいやいや』

その後男対女で少し揉めたが、その件は保留で問答に戻る。

「エリスの腰周りのサイズは？」
「さっき見たから覚えてる！　六七センチ」
「ネヴァンのスリーサイズは？」
「どーして人前で訊くの、お兄様ー！！」
「パスしたいならしてもいいよ？」

ぐっと堪えてネヴァンジェリンは、小さくぽそぽそ答えを告げる。

「あ、胸のサイズ違いまーす。ちょっと大きくなって八十な」
「パスでっ！　っていうか、何でお兄様が本人（わたし）より詳しいの！？」
「この間触ったからね。じゃあ次はブラ――」
「却下！　靴でお願いします！」

頑張って答えを返したところで、優位は問いかけ側にあるのがこの勝負だ。何やかんやで服を剥ぎ取られ、残り二問で下着と上着一枚まで追い詰められた。
床に座り込んだネヴァンジェリンは、上着の合わせと裾を押さえながら、ヴァーリヴァルグとエリオットに叫ぶ。

「そこの男二人、いつまで見てるんですか！　紳士らしく後ろを向くくらいしたらどうです！」

慌てて二人はそっぽを向くが、本気でいつまで見物しているつもりだったのだ。

羞恥心から涙目で唸るネヴァンジェリンに、楽しそうにネヴァンディーンが笑う。

「そんな紳士は幻想だよ。不能かホモか特殊性癖持ってる異常者だよ。健康な男子なら、女の子のエッチな姿は大歓迎だもの」

「エッチな格好にさせてる本人が、したり顔で何言うの！　バカー！！」

「キレて大泣きしたら、ネヴァンの負けだからね。ここに来るまでに服屋は幾つあった？」

「お兄様のいぢわるぅ～！！」

前置きがなければ泣き喚くところだ。

ネヴァンジェリンは唇を噛んで、泣きそうになるのをギリギリで堪える。いつもより意地の悪い問題が多すぎる。

「ネヴァンは弱いんだから、ちゃーんと周囲は見ておかないと。もっと観察する癖をつけようね。さて、そろそろ上着を脱いでもらおうかな～」

「う、上はダメ！」

「ネヴァンディーン、いい加減にしろ」

さすがに見かねたのか、ヴァーリヴァルグが口を出してくる。

「少しばかり遊びが過ぎるぞ。ネヴァンジェリンも、意地を張らずに諦めろ」

「だってさ、ネヴァン。ギブアップするなら、もう一枚脱ぐのは勘弁してあげるよ。どうする？」
「イヤ」

優しく髪を撫でてくる兄から、ネヴァンジェリンは顔を背けた。
ここまでくれば、それこそ意地だ。

「諦めません。今ので九問目よ、お兄様。ラスト一問！」
「ああ……半裸に涙目で意地を張られると、すっごくゾクゾクする。勝負とか全部忘れて襲っちゃいそう。ヤっていい？」
「だ、ダメダメダメー！！　ちょっと、審判！　ヴァーリヴァルグさーん！」
「ねえ、ネヴァン。僕とヴァルがいない時は、どうするの？」

それは最後の問いかけだった。
噛みつこうとしていたヴァーリヴァルグが口を閉じ、足を揃えて静観のポーズを取る。

「エリスが相手なら、ネヴァンは対抗できるよね。でも他は？　魔族や怪物（モンスター）に襲われたら、抵抗もしないで食べられちゃうのかな？」
「それは……」
「あつぅい杭を君の中に穿って、よがり啼く姿が見てみたい……。そんな風に思うのが僕だけだといいけどね」

それが性的な意味かはともかく、危害を加えようと思う者はいるだろう。特に怪物（モンスター）からしてみれば、ネヴァンジェリンは格好の餌だ。

「……前にもこんな質問されたよね。お兄様がいない時に、外に出てもいいかどうかで」

身を守る術のないネヴァンジェリンは、半年前まで一人での外出を禁止されていた。
食料調達などもってのほかと言われ、その時も今回と同じルールで勝負した。

「別に買い物にこだわってるわけじゃないし、お兄様から離れたいわけでもないの。でも安全じゃないからって理由で、何もできなくなるのはイヤ」

どう頑張ったところで、ネヴァンジェリンには魔界での自立は不可能だ。
兄に頼らないとは口が裂けても言えないし、少しでも迷惑にならないように……なんて、白々しいことも言えやしない。
ネヴァンジェリンが何かしようと動く度、むしろネヴァンディーンへの負担は増す。
それでも、

「一緒じゃなければ動けないなら、足も羽根もいらないわ。やりたいと思ったこともできないなら、わたしの心なんて意味ないよ」
「じゃあ足と羽根を千切って、僕のお人形にしちゃおうか」
「人形遊びなんて幼稚な趣味で、お兄様が満足できるとは知らなかったわ」

不穏な兄のセリフに、にっこり笑顔でネヴァンジェリンは返す。
問答勝負の本質は、意地と覚悟の表明だ。肉体的には圧倒的に劣るネヴァンジェリンが、対抗できるのは意思しかない。

（セクハラはやめてくれないけど……）

ネヴァンディーンはいつも、ネヴァンジェリンの意思を聞いてく

れる。
『彼なりに』という前置きはつくが、妹の意思を尊重してくれる兄に、余計な遠慮はむしろ失礼だ。だからネヴァンジェリンは、ネヴァンディーンにだけはどんなわがままでも言える。

「ネヴァン兄様なしでやってみたいから、先に帰って。でも何かあったら呼ぶから、その時はすぐに助けにきて」
「うわー、超わがまま言いますよ、僕のお姫様は」
「だってお兄様が甘やかすんだもの。お兄様が来るまでの間、時間稼ぎくらいは頑張るわ。以上、十問。ちゃんと答えたからねっ」

ネヴァンディーンは肩を竦めて、軽く両手を挙げて見せた。

「分かったよ、降参。僕の負け。仕方ないから許してあげる。でも毎晩連絡はするんだよ？　夢の中で逢瀬しようね」
「うん！」

ようやく外泊許可が出て、ネヴァンジェリンはほっと力を抜いた。こつんと額が合わされた——隙に、何かが服の合わせから滑り込んで素肌を撫でる。

「何を当たり前にセクハラしてるの、ネヴァン兄様～！」

慌てて兄の腕を押さえるが、意思はともかく肉体的にはまったく勝負にならないわけで。
腰を撫でる手を気にしているうちに、もう一方の手で軽く肩を押される。それだけでころんと、ネヴァンジェリンは床に転がった。

「ん？　だって、もう一枚服を脱がさなきゃでしょう？」

九問目の前の分。
ネヴァンジェリンは青褪めた。そういえばそうだった。

「上着はイヤなら、僕が脱がしていいんだよね。で、どうするネヴァン。どっちの下着にする？　上？　下？　どっちでもいいし両方でもいいよ。僕の手でやさし～く脱がせてあげるから」
「まま待って待って、お兄様！　決着ついたし！　っていうか、脱がすだけで終わる気ないでしょう！？」
「うん、ないね！」

元気いっぱい笑顔でお返事。
ネヴァンジェリンは冷や汗を掻きながら、どうにかトルテに片腕を伸ばした。

「すみません、トルテさん。ハサミ貸してください」

強制去勢（聖なるハサミ）が発動する日は今日かもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2827v/

不適材魔界転生

2011年10月2日13時34分発行